Ⅴ　教員の研究・調査活動

【凡例】

●基礎情報

①氏名（family name，first name）　②所属・職名・役職・併任　③生年（任意）　④学歴・職歴　⑤最終学位
⑥専門分野　⑦主な研究テーマ　⑧所属学会　⑨研究目的・研究状況・メールアドレス（任意）

●主要業績（研究者になってこれまで行ってきた自身の研究の代表的なもの）

・著書（単著・共著・編著・監修）
・論文
・調査・発掘調査報告書，自治体史・史料集，辞典など
・展示図録・資料図録・映像・ＤＢ
・学会・外部研究会発表
・総研大リーフレット
・その他

●2022年度の研究教育活動（成果を出す以前の研究・調査途中のものも含む）

一　研究業績（公開，発表，刊行済みのもの）

1　著書（単著・共著・編著・監修）
2　論文（査読あり，なしを明記）
3　調査・発掘調査報告書，自治体史・史料集，辞典など
4　展示図録・資料図録・映像・ＤＢ・デジタル・コンテンツ開発
5　学会・外部研究会発表
6　総研大リーフレット
7　その他（『REKIHAKU』，友の会ニュース，『本郷』など）

二　主な研究教育活動（共同研究，調査，展示，教育等）

1　主な共同研究等参加状況（歴博や機構の運営交付金による共同・連携研究）
　①　歴博（基幹・基盤・開発型，国内交流事業）
　②　他の機関
　③　機構（基幹研究プロジェクト）
2　外部資金による研究（科学研究費などの外部資金，各種補助金による研究，企業・自体体による研究）
3　国際交流事業（国際交流協定にもとづく事業，国際シンポジウム・集会など）
4　主な展示・資料活動（展示・資料・ＤＢなど）
5　教育（総研大シンポ，大学院セミナー担当，大学非常勤講師，学位審査の主査・副査・委員，博物館活動，教育プログラムなど）

三　社会活動等

1　館外における各種委員（学会，学術会議，文化庁・学振・自治体審議委員など）
2　講演・カルチャーセンターなど（友の会も含む）
3　マスコミ（テレビ，ラジオ，新聞，雑誌など）
4　社会連携（国内）
　①　刊行物（自治体など地方公共団体刊行のもの：市史，発掘調査報告書など）
　②　共同研究（自治体からの委託研究や産業界との共同研究）
　③　講演会・シンポジウム（自治体など地方公共団体主催のもの）
　④　デジタル・コンテンツ開発（自治体の経費で開発したもの）
5　国際連携（日本国内で行われたものも含む）
　①　JICA
　②　国際交流基金
　③　その他

四　活動報告

1　受賞歴

2　特別委員会委員など館長からの委嘱を受けたもの

3　研究・調査プロジェクト報告

4　その他（研究の目的，意義など）＊任意

西谷　大　NISHITANI Masaru　館長（2020.4～）

併任：総合研究大学院大学日本歴史研究専攻教授（2012～），生年：1959

【学歴】熊本大学文学部史学科（1984年卒業），熊本大学大学院文学研究科史学専攻修士課程修了（1986年単位取得退学），中華人民共和国天津師範大学普通進修生修了（1987年），中華人民共和国中山大学人類学系高級進修生修了（1989年）【職歴】国立歴史民俗博物館考古研究部助手（1989），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部助教授（2004），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部准教授（2007），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻准教授併任（2008），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部教授（2012），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻教授併任（2012），博物館資源センター長併任（2013～2015），副館長併任（2017～2019）
【学位】文学修士（熊本大学）（1986年取得），文学博士（総合研究大学院大学）（2008年取得）
【専門分野】東アジア人類史【主な研究テーマ】東アジアの生業に関わる歴史　日本の地域研究（人と自然の関係史）
【所属学会】中国考古学会，東南アジア考古学会【研究目的・研究状況・メールアドレス】東アジアにおける生業の歴史を主な研究目的とする。中国海南省のリー族，中国雲南省紅河州の者米谷でフィールド調査を行ってきた。近年は，千葉県房総丘陵地域で，近世から現代までの人と自然の関係史を，様々な分野の研究者と共同でフィールド調査を行っている。

●主要業績

1．【編著】「［共同研究］東アジアにおける多用な自然利用―水田農耕民と焼畑農耕民」『国立歴史民俗博物館研究報告』第164集，国立歴史民俗博物館，Ａ４版，177頁，2011年３月
2．【単著】『多民族の住む谷間の民族誌―生業と市からみた環境利用と市場メカニズムの生起』角川学芸出版，Ａ５版，335頁，2011年９月
3．【論文】Nishitani Masaru and Nathan Badenoch「Why Periodic Markets Are Held：Considering Products, People, and Place in the Yunnan-Vietnam Border Area」Vol 2. No 1. of Southeast Asian Studies, pp.171-192，Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University, 2013年４月（査読有）
4．【論文】西谷 大・島立理子・大久保悟「共同研究［日本の中山間地域における人と自然の文化誌］中間報告―二号穴からみた水利用―」『国立歴史民俗博物館研究報告』第186集，pp.295-309，国立歴史民俗博物館，2014年３月（査読有）
5．【論文】西谷 大「豚便所―飼養形態からみた豚文化の特質」『国立歴史民俗博物館研究報告』第90集，pp.79-149，国立歴史民俗博物館，2001年３月（査読有）

●2022年度の研究教育活動

一 研究業績

1　著書
総監修「講談社の動く図鑑MOVE 日本の歴史」，384頁，講談社，2022年11月29日

三　社会活動等

1　館外における各種委員
日本遺産北総四都市江戸紀行活用協議会 委員，公益財団法人佐倉国際交流基金 評議員，公益財団法人味の素食の文化センター 評議員，大和郡山市 水木十五堂賞選考委員会委員，千葉県教育委員会 スーパーサイエンスハイスクール（千葉県立佐倉高等学校）運営指導協議員，日本郵便株式会社 郵便切手アドバイザリー・グループ委員

3　マスコミ
館長インタビュー「開かれた共同研究による多様な視点で日本の歴史の確かな手がかりを提供する」文部科学教育通信No.536，pp.4-９，株式会社 ジ アース 教育新社，2022年７月25日
記念寄稿「あの３年間が人生に問いかける意味」学校法人 三木学園 白陵中学校・白陵高等学校 60周年記念誌，pp.112，学校法人 三木学園 白陵中学校・白陵高等学校，2022年11月９日

4　社会連携
③　講演会・シンポジウム
令和４年度佐倉市民カレッジ「これからの博物館で必要なこと・歴博を楽しむ」佐倉市立中央公民館，2022

年12月13日
令和４年度国立歴史民俗博物館友の会 館長特別講演会「豚と帝国 ―中国の豚たちの1000年物語―」国立歴史民俗博物館 講堂，2023年１月28日

四　活動報告

３　研究・調査プロジェクト報告

今年度は長崎県内（長崎市・西海市・平戸市・松浦市・佐世保市）を中心に調査を行い，長崎市内では一部市場の衰退化がみられたが，また一方佐世保市では安土桃山時代から400年以上続く早岐茶市が現在も５月初旬から６月初旬にかけて行われ，非常に活気に溢れており，店舗の種別データを収集する上でも特定の期間に行われる希少性と通常の定期市との相違は興味深い内容であった。

天野　真志　AMANO Masashi　　准教授（2022.4～）

【学歴】富山大学人文学部人文学科（2004年卒業），東北大学大学院文学研究科博士前期課程（2006年修了），東北大学大学院文学研究科博士後期課程（2010年単位取得退学）
【職歴】東北大学東北アジア研究センター教育研究支援者（2010-2012），東北大学災害科学国際研究所助教（2012-2017），人間文化研究機構研究推進センター研究員（2017.7～2022.03），併任国立歴史民俗博物館特任准教授（2017.7～2022.03），国立歴史民俗博物館准教授（2022.04～）
【学位】博士（文学，東北大学），【専門分野】日本近世・近代史，資料保存，【主な研究テーマ】日本近世近代移行期における政治・社会史研究，近世・近代社会における地域の由緒に関する研究，地域歴史文化の保全・継承に関する研究，地域歴史文化資料の災害対策に関する研究，【所属学会】文化財保存修復学会，明治維新史学会，歴史学研究会，東北史学会，日本古文書学会，日本アーカイブズ学会，歴史科学協議会

●主要業績

１．【著書】『幕末の学問・思想と政治運動』吉川弘文館，260頁，2021年４月10日
２．【共編著】『地域歴史文化継承ガイドブック』文学通信，248頁，2022年３月８日
３．【論文】「出羽国秋田藩の文書調査と由緒管理」，『常陸大宮市史研究』３，pp.13-32,2020年３月
４．【論文】「災害経験をめぐる記憶の行方」，『歴史学研究』1005，pp.28-33,2021年２月

●2022年度の研究教育活動

一 研究業績

１　著書

共編著：川村清志，天野真志『REKIHAKU 特集：アートがひらく地域文化』112頁，国立歴史民俗博物館，2023年２月26日
共編著：渋谷綾子，天野真志『古文書の科学　料紙を複眼的に分析する』240頁，文学通信，2023年３月31日

２　論文

「幕末期の政治変動と思想」『歴史評論』875，pp.52-62，歴史科学協議会，2023年３月１日
「社会の変容と諸藩」東北大学日本史研究室編『東北史講義【近世・近現代篇】』ちくま新書，pp49.-63，筑摩書房，2023年３月10日

３　調査・発掘調査報告書，自治体史・史料集，辞典など

『常陸大宮市史資料叢書１近世１　上伊勢畑村御用留』，260頁，常陸大宮市教育委員会，2023年１月31日

５　学会・外部研究会発表

Masashi AMANO, Sakiko KAWABE “Recent Progress and Challenge in Historical and Cultural Material Preservation with Local Communities” XXIII INTERNATIONAL CONGRESS OF HISTORICAL SCIENCES - POZNAŃ　2022, International Committee of Historical Sciences,2022年８月25日
「『岩沼市史11特別編Ⅲ震災』の刊行～一執筆者としての雑感～」第12回 震災資料の収集・公開に係る情報交換会，神戸大学附属図書館，2022年11月11日
「地域歴史資料の災害対策をめぐる国内的状況」国際会議「歴史資料継承の方法論と国際協力」JSPS 科学研究費補助金特別推進研究「地域歴史資料学を機軸とした災害列島における地域存続のための地域歴史文化の創

成」国際研究集会 兼 国立歴史民俗博物館機構基幹研究プロジェクト「日本歴史文化知の構築と歴史文化オープンサイエンス研究」，フクラシア品川クリスタル，2023年３月３日

7　その他

「紹介/加納靖之・杉森玲子・榎原雅浩・佐竹健治著『歴史のなかの地震・噴火』」『歴史評論』868，p.110，歴史科学協議会，2022年８月１日

「遠近画法 地域を見つめる」『うた新聞』125，p.2，いりの舎

「思想のニオイ」『REKIHAKU 特集：歴史の匂い』，p.24-26，国立歴史民俗博物館，2022年10月26日

「古文書のデータ化と向きあう」『人文情報学月報』139，p.1，一般財団法人人文情報学研究所，2023年２月28日

二　主な研究教育活動

1　主な共同研究等参加状況

①　歴博

課題設定型共同研究「中世日本の地域社会における都市の存立と機能の研究」（代表者：田中大喜）

②　他の機関

東京大学史料編纂所一般共同研究「中近世古文書の料紙に関する総合的科学研究」（代表者：貫井裕恵）（2022～2023年度）

岡山大学文明動態学研究所共同研究「岡山を中心とした地域歴史資料の保全と活用に関する基礎的研究」（代表者：今津勝紀）（2022年度）

③　機構

ネットワーク型機関研究プロジェクト「歴史文化資料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業」歴博拠点「共創的資料保存の構築に向けたネットワーク研究拠点」（代表者：天野真志）

機関拠点型基幹研究プロジェクト「日本歴史文化知の構築と歴史文化オープンサイエンス研究」（代表者：後藤真）

広領域連携型基幹研究プロジェクト「横断的・融合的地域文化研究の領域展開：新たな社会の創発を目指して」歴博ユニット「フィールドサイエンスの再統合と地域文化の創発」（代表者：川村清志）

広領域連携型基幹研究プロジェクト「横断的・融合的地域文化研究の領域展開：新たな社会の創発を目指して」民博ユニット「地域文化の効率的な活用モデルの構築」（代表者：日高真吾）

広領域連携型基幹研究プロジェクト「横断的・融合的地域文化研究の領域展開：新たな社会の創発を目指して」国文研ユニット「人口減少地域におけるアーカイブズと歴史文化の再構築」（代表者：西村慎太郎）

2　外部資金による研究

科学研究費特別推進研究「地域歴史資料学を機軸とした災害列島における地域存続のための地域歴史文化の創成」（代表者：奥村弘）（2019～2023年度）

科学研究費基盤研究（A）「「国際古文書料紙学」の確立」（代表者：渋谷綾子）（2019～2022年度）

科学研究費基盤研究（A）「恒久的保存に向けた災害被災資料の特性解明と保存環境の構築」（代表者：松井敏也）（2020～2024年度）

科学研究費基盤研究（A）「現実世界と電子世界の融合で被災地復興に寄与する次世代MLA」（代表者：白井哲哉）（2022～2027年度）

科学研究費基盤研究（B）「近世・近代日本における「富国」論の政治的・社会的機能に関する研究」（代表者：小関悠一郎）（2021～2024年度）

5　教育

立教大学文学部

神戸大学文学部

京都芸術大学藝術学舎

福島大学行政政策学類

山形大学人文社会科学部

国文学研究資料館アーカイブズカレッジ

三　社会活動等

1　館外における各種委員

国立文化財機構文化財防災センター客員研究員
福島県相馬市史編さん室調査執筆員
茨城県常陸大宮市史編さん委員会専門部会協力員
宮城県名取市史編さん専門部会専門部員
宮城県岩沼市収集資料保存活用等検討会委員
一般社団法人 文化財保存修復学会 災害対策調査部会拡大委員
鹿角市教育委員会・小坂町教育委員会 鹿角地域文化財保存活用計画策定協議会委員
日本文化財科学会第39回大会実行委員会
歴史科学協議会編集委員
明治維新史学会大会運営委員

２　講演・カルチャーセンターなど
歴博友の会古文書講座（2022年４月27日～2023年３月22日）
「地域資料の保存と継承」泉大津市立図書館「地域の歴史・文化再発見講座2022」，泉大津市立図書館，2022年５月12日
「被災紙資料の救済方法を学ぶ」山形文化遺産防災ネットワーク2022年度第一回研修会，山形大学，2022年５月22日
「資料保存から見つめる地域の歴史文化」岐阜県博物館・博物館学芸講座/岐阜県博物館協会もの部会連携事業，岐阜県博物館，2022年７月16日
「秋田藩角館の変遷」角館町町割400年記念シンポジウム，仙北市角館交流センター，2022年７月31日
「水濡れ紙資料の救出・乾燥方法を考える」令和４年度第１回博物館学芸員等スキルアップ研修会，熊本県博物館ネットワークセンター，2022年10月７日
「幕末期京都への眼差し―政治運動と情勢認識―」令和４年度富岡町図書館文化講演会「幕末期の京都と会津藩」，富岡町図書館，2022年11月５日
「資料ネットと歴史文化資料の保存」山形文化遺産防災ネットワーク2022年度第３回研修会，山形大学，2022年11月21日
「水濡れ紙資料の救出・応急処置を考える」埼玉県文化財保護協会令和４年度被災文化財レスキューボランティア研修会，北本市文化センター，2022年12月14日
「資料保存の現在地点とその考え方―災害対策の現況といくつかの展望―」令和４年度千葉県史料保存活用連絡協議会第２回研修会，千葉県文書館，2023年２月２日
「文化財レスキューをとりまく状況」埼玉県文化財保護協会令和４年度文化財レスキュー・防災研修会，さいたま共済会館，2023年２月14日

四　活動報告

２　特別委員会委員など館長からの委嘱をうけたもの
令和４年度国立歴史民俗博物館広報活動推進業務選定委員

荒川　章二　ARAKAWA Shoji 特任教授（2022～）

【学歴】早稲田大学第一文学部（1976年卒業），立教大学大学院文学研究科修士課程（1978年修了），一橋大学大学院社会学研究科博士課程（1983年単位取得退学）
【職歴】日本学術振興会奨励研究員（1984年度），法政大学大原社会問題研究所嘱託・兼任研究員（1985～1987年度），静岡大学教育学部助教授（1988年４月），静岡大学情報学部教授（1995年10月），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館客員教授（2004～2007年度），静岡大学情報学部副学部長（2008～2009年度），静岡大学情報学部学部長（2010～2012年度），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部教授（2013年４月），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻教授併任（2014年４月），早稲田大学文学学術院非常勤講師（2014～2016年度），静岡大学非常勤講師（2019～2021年度），放送大学（静岡学習センター所属）客員教授（2021年４月～現在），国立歴史民俗博物館客員教授（2021年６月～2022年３月），千葉大学文学部非常勤講師（2022年度）
【学位】文学修士（立教大学）【専門分野】日本近現代史【主な研究テーマ】近代日本の軍隊と地域関係史，戦後日

本社会史【所属学会】歴史学研究会，日本史研究会，歴史科学協議会，同時代史学会【研究目的・研究状況】軍隊と地域関係史の研究では，編著『地域の中の軍隊２　関東　軍都としての帝都』（吉川弘文館）を2014年度に刊行，2021年度に『増補　軍隊と地域―郷土部隊と民衆意識のゆくえ』を岩波現代文庫版として刊行した。また，沖縄軍事史に関し，『沖縄県史　各論編　第六巻　沖縄戦』（沖縄県，2017年３月刊）第１章，および「内地と外地の間で―戦前沖縄の軍事的特色」（杉原達編『戦後日本の＜帝国＞経験』（日本学叢書⑤，青弓社，2018年11月，pp.21-65）を執筆，戦後研究では，2017年度に「1968年」をテーマとする国立歴史民俗博物館企画展示を実施し，2018年度に「1968年」共同研究の研究報告書を刊行した。

●主要業績

１．【単著】『軍隊と地域』青木書店，358頁，2001年７月（2021年４月『増補　軍隊と地域―郷土部隊と民衆意識のゆくえ』岩波現代文庫，428頁として補章を加えた増補版刊行）
２．【単著】『軍用地と都市・民衆』（日本史リブレット95）山川出版社，107頁，2007年10月
３．【単著】『全集日本の歴史16　豊かさへの渇望』小学館，382頁，2009年３月
４．【編著】『地域の中の軍隊２　関東　軍都としての帝都』吉川弘文館，201頁，2015年２月
５．【編著】『国立歴史民俗博物館研究報告 「1968年」社会運動の資料と展示に関する総合的研究』第216集，国立歴史民俗博物館，347頁，2019年３月
６．【展示図録】『企画展示「1968年」 無数の問いの噴出の時代』（展示代表），国立歴史民俗博物館，228頁，2017年10月

●2022年度の研究教育活動

一　研究業績

１　共著『山口県史　通史編　現代』（山口県，1105頁，2022年３月31日）
　監修『静岡大学浜松キャンパス100年史』（国立大学法人静岡大学，156頁，2023年３月31日）
２　論文「「1968年」の広がり　人として生きられる社会への希求」歴史学研究会編『「歴史総合」をつむぐ』（東京大学出版会，pp.138-145，2022年４月25日）
５　学会・外部研究会発表
　口頭発表：総武地域史研究会第４回シンポジウム「軍隊・戦争と地域社会―津久井・横浜・小田原―」へのコメント，およびシンポジウムパネラー，東海大学湘南校舎，2022年10月22日

二　主な研究教育活動

４　主な展示・資料活動
　総合展示第５・６室リニューアル委員会展示代表

三　社会活動等

１　館外における各種委員
　静岡県史編さん専門委員（2020年11月～），浜松市文化財保護審議会委員（2021年７月～），沼津市明治史料館協議会委員（2022年11月～），静岡大学浜松キャンパス100周年記念事業実行委員会記念誌出版事業部会アドバイザー（2022年４月～），放送大学客員教授（静岡学習センター所属，2021年４月～）

アルト　ヨアヒム　ALT Joachim 特任助教（2022～）

生年：1986

【学歴】ケンプテン応用科学大学経済学部経済学科［ドイツ］（2008年３月中退），アーカンソー中央大学［米国］（2007年８月～12月交換留学），龍谷大学留学生別科（2012年３月卒業），龍谷大学国際文化学部国際文化学科（2014年３月卒業），北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院国際広報メディア専攻修士課程（2016年修了），北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院国際広報メディア専攻博士課程（2020年単位取得退学）
【職歴】横浜国立大学教育学部非常勤講師（2019年４月～９月），神奈川県立保土ヶ谷高等学校非常勤講師（2020年４月～2021年９月），神奈川県立相模原弥栄高等学校非常勤講師（2020年４月～2022年９月），東京福祉大学教育学部非常勤講師（2021年４月～2022年９月），桜美林大学グローバル・コミュニケーション学群非常勤講師（2021年

９月～），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館特任助教（2022年10月～），早稲田大学理工学部非常勤講師（2023年４月～）
【学位】博士（国際文化学）（論文博士，龍谷大学，2021年取得）【専門分野】地域研究（日本学）【主な研究テーマ】日本アニメにおける第二次世界大戦の表象およびその表象により構成される集合的記憶【所属学会】国際日本学会，日本アニメーション学会，日本マンガ学会，戦争社会学研究会，表象文化論学会，日本独文学会ドイツ語教育部会【研究目的・研究状況】アニメに代表される視聴メディアが集団アイデンティティーにどのような影響を与えるかを明確にすること。https://researchmap.jp/joachim_alt

●主要業績

１．【分担執筆】「No Hope in 1945? – Story Framing and Film Semiotics in Anime on Japan's War」Joff P. N. Bradley・Catherine Ju-yu Cheng編『Thinking with Animation』Cambridge Scholars Publishing（2021年８月）pp.227-246
２．【論文】「広島の原爆投下を語る戦争アニメにおける変化」『アニメーション研究』第20巻１号（2019年３月，査読有）pp.31-41
３．【論文】「World War II in Anime – A Portfolio Based Analysis」『The IAJS Journal』第４号（2019年11月，査読有）pp.3-14
４．【論文】「Schlüssel- und Wendejahr 1993 – Anime zu Japans Weltkrieg um und ab Heisei」『MINIKOMI: Austrian Journal of Japanese Studies』第88号（2020年12月，査読有）pp.42-57
５．【学会・外部研究会発表】「原爆とラジオ放送―日本アニメにおける終戦の表象」京都大学映画メディア合同研究室第２回シンポジウム，2022年10月２日

●2022年度の研究教育活動

一　研究業績

５　学会・外部研究会発表
「50 Jahre mediale Erinnerungskultur – Atombombe, Kriegsende, Anime」慶應義塾大学文学部（ドイツ学術交流会支援）講演シリーズ『Im Apparat』，2022年８月15日
「原爆とラジオ放送―日本アニメにおける終戦の表象」京都大学映画メディア合同研究室第２回シンポジウム，2022年10月２日
「Amateurism and Professionalism in Sports as Reflected in Japanese Cartoon Animation」表象文化論学会第16回研究発表集会，2022年11月12日
「《被害者意識の権利》と反戦の世論についての考察」大学共同利用機関法人情報・システム研究機構ROISクロストーク2022,2022年12月19日
「《被害者》の国民アイデンティティー？第二次世界 大戦，アニメ，集合的記憶と想像の共同体」国際日本文化研究センターワークショップ『次世代の「国際日本研究」』，2023年３月23日

７　その他
書評「出原健一著『マンガ学からの言語研究：「視点」をめぐって』」『マンガ研究』第26号（2022年３月）pp.167-171
書評「Alex Dudok de Wit著『Grave of the Fireflies 火垂るの墓』」『アニメーション研究』第22巻１号（2022年３月）pp.65-66

二　主な研究教育活動

５　教育
東京福祉大学非常勤講師（教育学部「アメリカの文化と言語Ⅰ」「多文化理解入門」）
桜美林大学非常勤講師（グローバル・コミュニケーション学群「日本文化：Family」「日本文化：Gender Representation」）

三　社会活動等

１　館外における各種委員
日本アニメーション学会大会運営委員会委員

上野　祥史　UENO Yoshifumi　准教授（2009.10～）

併任：総合研究大学院大学日本歴史研究専攻准教授（2010～）

【学歴】京都大学文学部史学科考古学専攻（1996年卒業），京都大学大学院文学研究科考古学専修修士課程（1999年修了），京都大学大学院文学研究科考古学専修博士後期課程（2000年中退）
【職歴】国立歴史民俗博物館考古研究部助手（2000），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部助手（2004），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部助教（2007），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部准教授（2009），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻准教授併任（2010）
【学位】文学修士（京都大学）（1999年取得）【専門分野】東アジア考古学【主な研究テーマ】漢三国六朝期の古代東アジア世界の展開Archaeological Study of Ancient East Asia【所属学会】史学研究会，考古学研究会，日本中国考古学会【研究目的・研究状況】漢三国六朝期，つまり弥生時代から古墳時代にかけての時期を対象に，東アジア世界各地の相互交渉を研究の目的の一つとしている。鏡や装身具などの金工具を検討し，価値・観念・製作技術という視点から，中国大陸と日本列島の社会動態を描き出すことに取組んでいる。

●主要業績

1．【共編著】『マロ塚古墳出土品を中心にした古墳時代中期武器武具の研究』国立歴史民俗博物館研究報告第173集，総624頁，2012年
2．【編著】『祇園大塚山古墳と５世紀という時代』六一書房，総136頁，2013年
3．【編著】『古代東アジアにおける倭世界の実態』国立歴史民俗博物館研究報告第211集，総512頁，2018年
4．【編著】『東アジアと倭の眼でみた古墳時代』国立歴史民俗博物館研究叢７，朝倉書店，総192頁，2020年
5．【編著】『金鈴塚古墳と古墳時代社会の終焉』六一書房，総274頁，2022年

●2022年度の研究教育活動

一 研究業績

２ 論文
「中国系渡来文化と畿内」『軍事と対外交渉』講座畿内の古代学第Ⅳ巻，雄山閣，pp.124-143,2022年９月
「報告３・４・５に対するコメント」『アジア流域文化研究』ＸⅣ，東北学院大学アジア流域文化研究所，pp.83-87,2023年３月

４　展示図録･資料図録･映像･DB･デジタル･コンテンツ開発『加耶―古代東アジアを生きた，ある王国の歴史―』国際企画展示図録（編集）

５　学会・外部研究会発表
「内部透過情報を対照した封泥の検討」歴博共同研究，国立歴史民俗博物館，2022年11月６日
「時間の認識から評価した社会の複雑化」科研新学術領域研究，オンライン，2023年１月7,８日
「コメント」国際シンポジウム『中国都城考古学の最前線３：秦漢都城と周縁域都市・城塞の考古学的新進展』東北学院大学アジア流域文化研究所・中国社会科学院考古研究所主催，東北学院大学／オンライン，2023年２月18日
「理化学分析を複合した封泥のライフヒストリー復元（１）」歴博共同研究，国立歴史民俗博物館，2023年３月25日（島津美子と共同報告）
「封泥の木質情報（１）」歴博共同研究，国立歴史民俗博物館，2023年３月25日（箱﨑真隆と共同報告）

二　主な研究教育活動

１　主な共同研究等参加状況
①　歴博
基盤研究「秦漢時期の文字使用をめぐる学際的研究」副代表（2021～2023年度）
③　機構（基幹研究プロジェクト）
広領域連携型基幹研究プロジェクト「フィールドサイエンスの統合と地域文化の創発」共同研究員（2022年度～）

２　外部資金による研究

鹿島財団研究助成（「美術に関する調査研究」）「六朝装身具の復元研究」申請者（2021年度／期間延長）
基盤研究（C）「高精細X線CTスキャナ活用を中心とする古代中国の封泥の作成方法に関する総合的研究」研究分担者（2021～2023年度）
基盤研究（B）「器物の「伝世・長期保有」・「復古再生」の実証的研究と倭における王権の形成・維持」研究分担者（2019～2022年度）
新学術領域研究（研究領域提案型）「心・身体・社会をつなぐアート／技術」研究分担者（2019～2023年度）

4　主な展示・資料活動
総合展示第１室「Ⅳ倭の登場」「Ⅴ倭の前方後円墳と東アジア」展示プロジェクト委員
企画展示「加耶―古代東アジアを生きた，ある王国の歴史―」展示副代表
企画展示「歴博色づくし」展示プロジェクト委員

5　教育
総合研究大学院大学　学位審査副査
上智大学非常勤講師「超域史・隣接学概説Ⅳ」
女子美術大学非常勤講師「文化遺産学A・B」「比較文化論」「芸術文化ゼミⅢ」

三　社会活動等

1　館外における各種委員
日本中国考古学会幹事・木更津市史編集部会員

2　講演・カルチャーセンターなど
「中国と加耶と倭」第441回歴博講演会，11月12日
「東アジアの国際交流のなかにみえる加耶」歴博友の会考古学講座，11月16日
「楽浪と遼東，その周辺環境―銅鏡の往来と交流―」シンポジウム『卑弥呼王権と公孫氏政権―その関係性を探る―』東アジアの古代を考える会，11月19日

四　活動報告

2　特別委員会委員など館長からの委嘱を受けたもの
Webサイトリニューアル業務選定委員会委員／ホームページリニューアルプロジェクト

3　研究・調査プロジェクト報告
中国における秦漢時代から三国両晋南北朝時代の出土資料を集成し，物質文化論的視点から中国古代・中世社会の構造を検討し，中国文物を通じて，朝鮮半島・日本列島との交流についての検討を進めた。中国での検討は，陝西省・河南省・江蘇省を対象に分析を進めた。その成果の一部は，東北学院大学で２月に開催された国際シンポジウム（コメント）等で公開した。

4　その他
今年度は，３次元情報の作成及び分析を一つの核として研究活動を展開した。共同研究「秦漢時期の文字使用をめぐる学際的研究」では，昨年度より着手している高精度X―CT装置を利用した封泥の内部透過情報分析を進めた。200点近い資料の計測と加工，整備と分析を自らの手で実施し，内部透過情報を含めた３次元情報をもとに，物質の形状，構造および人間の所作・関与への検討を進めた。その成果は，共同研究の報告にて公開している。

また，新学術領域研究（科研）や研究・調査プロジェクトを通じて，各種の考古資料の３次元情報作成に取組み，考古学研究における３次元情報の活用を実践した。その一つとして，市原市天神台遺跡出土の小銅鐸を情報化し，デジタルデータを提供して報告書作成に寄与した。各種資料の３次元情報化に取組むことで，形態にあわせた計測方法の模索と，取得データと基にした解析方法の確立に努めた。研究実践を通じて，３次元情報の計測と研究での利活用に一つの形を見通すことができたと考えている。今後は，それをふまえた各種の研究の深化に努める予定である。

一方で，新学術領域研究（科研）では，ポスター発表において，弥生時代から古墳時代における時間概念の認識について検討をおこなった。造形と人のかかわりに注目し，この時期には世代をこえた器物の利用が極めて限られることを示した。先年『心とアートの人類史』にて発表した論文では，直進する絶対的な時間の認識が，造形や行為に大きく作用することを予見したが，その画期は古墳時代後期から古代にかけてであることを改めて確認した。文明形成，社会の複雑化の評価において，時間概念の変化も重要な指標であることを示した。

器物と人のかかわりに映じた時間概念は，これまで取り組んできた古墳時代の鏡の研究でも指摘したことで

ある。長期保有や伝世という現象の解明においても，世代をこえた器物の取扱いと背後にある時間の認識との関係は注目される。この点は，基盤研究（B）（科研）において，これまでの研究成果を総じて，「復古」「再生」が発生するメカニズムと過去の認識との関係を検討した。その成果は，2023年６月の刊行の報告書に掲載の予定である。

そして，東アジア国際環境については，国際企画展示の開催とその関連事業や，東アジアの古代を考える会が主催したシンポジウム，あるいは東北学院大学で開催の国際シンポジウムを通じて，研究情報の発信に努めた。前２者では，中国と朝鮮半島と日本列島との相互関係を，後者では，中国と西域・北方との相互関係を検討し，中国を中心とした東アジア国際環境について理解を深化させた。

基礎資料の情報化と分析，時間認識と国際環境とは，一見すると二極化した活動にみえるが，いずれも，行為・所作の復元とそこに投影された意識の相互作用に注目することは共通しており，それを時空を違えて複合的に検討したと認識している。

内田　順子　UCHIDA Junko　教授（2020.4～），博物館資源センター長（2021～）

併任：総合研究大学院大学日本歴史研究専攻教授（2020～）

【学歴】東京芸術大学音楽学部楽理科（1990年卒業），東京芸術大学大学院音楽研究科音楽学専攻（1993年修了，総合研究大学院大学文化科学研究科国際日本研究専攻博士後期課程（1997年修了）
【職歴】国際日本文化研究センター中核的研究機関研究員（1997），日本学術振興会特別研究員（1997），国立歴史民俗博物館民俗研究部助手（1999），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部助手（2004），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部助教（2007），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館民俗研究部准教授（2007），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻准教授併任（2009），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館民俗研究部教授（2020），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻教授併任（2020）
【学位】学術博士（総合研究大学院大学）（1997年取得）【専門分野】音楽学，民俗学【主な研究テーマ】音楽の伝承過程についての研究／資料批判に基づいた映像研究【所属学会】東洋音楽学会，日本音楽学会，沖縄文化協会，日本民俗学会【研究目的・研究状況】ある社会において神聖なものの位地に置かれている音楽の伝承過程や伝承方法を明らかにするため，宮古島をフィールドとして調査研究を継続している。また，歴史的な映像を資料批判的研究に基づいて再解釈することをとおして，映像の歴史資料としての可能性と限界を考察する研究を実施している。

●主要業績

１．【著書】
内田順子（編）・国立歴史民俗博物館（監修）『映し出されたアイヌ文化―英国人医師マンローの伝えた映像』160頁，吉川弘文館，2020年
『宮古島狩俣の神歌―その継承と創成―』思文閣出版，2000年　２．【論文】
「与えられたことば―宮古島狩俣における神歌の継承―」，斎藤英喜編『呪術の知とテクネー―世界と主体の変容―』，森話社，pp.107-136,2003年

３．【調査・発掘調査報告書，自治体史・史料集，辞典など】
『国立歴史民俗博物館研究報告』第168集（「マンローコレクション研究―写真・映画・文書を中心に―」），299頁，2011年

４．【展示図録・資料図録・映像・DB】
民俗研究映像「AINU Past and Present―マンローのフィルムから見えてくるもの」（ビデオ，102分，監督：内田順子・鈴木由紀，制作：内田順子・岡田一男），2007年

５．【その他】
「平成17年度 国立歴史民俗博物館 民俗研究映像『AINU Past and Present―マンローのフィルムから見えてくるもの―』：映画フィルムの資料批判的研究に関連する研究ノート」，『国立歴史民俗博物館研究報告』150，国立歴史民俗博物館，pp.179-192,2009年

●2022年度の研究教育活動

一 研究業績

7　その他
「アイヌ文化へのまなざし」『學士會会報』957号，一般社団法人学士会，pp.100-106,2022年11月１日
「「アイヌアート」の展示」『REKIHAKU』８号，国立歴史民俗博物館，pp.57-59,2023年２月26日
「コロナ禍で15周年を迎える「歴博映画の会」」『友の会ニュース』，歴史民俗博物館振興会，p.3,2022年８月５日
書誌紹介「島添貴美子著　『民謡とは何か？』『日本民俗学』311号，日本民俗学会，p.183,2022年８月

二　主な研究教育活動

1　主な共同研究等参加状況
①　歴博
「歴博研究映像の総合的活用の方法論の構築―沖縄地域の映像を中心に」（2022年度～2024年度）研究副代表
「映像による民俗誌の叙述に関する総合的研究―制作とアーカイブスの実践的方法論の検討」（2021年度～2023年度）共同研究員
「定期市からみた地域の生活文化の歴史と多様性に関する研究」（2020年度～2022年度）研究副代表
②　他の機関
国立民族学博物館共同研究「民博所蔵東洋音楽学会資料に基づく日本民俗音楽の再構成と再活性化」（2021年10月～2024年３月）共同研究員
国立アイヌ民族博物館調査研究プロジェクト「近現代アイヌ民族史（誌）と博物館展示をめぐる実証的研究」（2022年度）共同研究員
③　機構
機構基幹研究プロジェクト（広領域連携型基幹研究プロジェクト：横断的・融合的地域文化研究の領域展開：新たな社会の創発を目指して）「フィールドサイエンスの再統合と地域文化の創発」（2022～2027年度）共同研究員

2　外部資金による研究
科研挑戦的研究（萌芽）「沖縄/日本/アメリカ，女/男の分断を超えた視点の構築―作曲家・金井喜久子を中心に」（2021～2023年度）研究代表者
科研基盤研究B「文化の主体的継承のための民俗誌の構築―マルチメディアの活用と協働作業を通じて」（2018～2022年度）研究分担者

4　主な展示・資料活動
総合展示第４室「『民俗』へのまなざし」展示プロジェクト委員総合展示第５室「近代」展示プロジェクト委員

5　教育
國學院大学非常勤講師「映像文化論」

三　社会活動等

2　講演・カルチャーセンターなど
「沖縄県宮古島の手わざと歌わざ」第39回歴博映画の会，国立歴史民俗博物館，2023年１月21日
「ジェンダーから考える民俗宗教-沖縄県宮古島の場合」友の会民俗学講座，2023年２月20日
「国立歴史民俗博物館の映像資料と活用―可能性・課題・展望―」日本史研究会第11回講演会「歴史から現在を考える集い」，平安女学院大学京都キャンパス，2023年２月25日

小倉 慈司　OGURA Shigeji 教授（2021.11～）

併任：総合研究大学院大学日本歴史研究専攻教授（2021～）

【学歴】東京大学文学部国史学専修課程（1990年卒業），東京大学大学院人文科学研究科国史学専攻修士課程（1992年修了），東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻博士課程（1995年単位修得退学）
【職歴】放送大学非常勤講師（1995），日本学術振興会特別研究員（PD）（1996），宮内庁書陵部編修課研究員（1996），同主任研究官（2003），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部准教授（2010），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻准教授併任（2010），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立

歴史民俗博物館研究部教授（2021.11），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻教授併任（2021.11）【学位】博士（文学）（東京大学）（1999年取得）【専門分野】日本古代史，史料学【主な研究テーマ】古代神祇制度の研究，禁裏・公家文庫の研究，延喜式の研究，渡辺村史研究【所属学会】木簡学会，日本歴史学会，日本史研究会，大阪歴史学会，出雲古代史研究会，正倉院文書研究会，古代学協会，東方学会，史学会，日本古文書学会

●主要業績

1．【著書】『古代律令国家と神祇行政』340頁，同成社，2021年６月
2．【論文】「皮革生産賤視観の発生」（『日本史研究』第691号，pp.1-21，査読有，2020年３月）
3．【概説書】小倉慈司『事典 日本の年号』432頁，吉川弘文館，2019年６月
4．【展示図録】小倉慈司編著『文字がつなぐ―古代の日本列島と朝鮮半島―』国立歴史民俗博物館平成26年度企画展示図録，247頁，2014年10月
5．【科研】基盤研究（B）「格・式研究を踏まえた日本古代社会像の再構築」20H01318,2020年４月～2023年３月

●2022年度の研究教育活動― 研究業績

1　著書
共編『REKIHAKU』007「歴史の「匂い」,111頁,国立歴史民俗博物館,2022年10月26日
共編『差別の地域史―渡辺村からみた日本社会』，276頁，法蔵館，2023年２月15日
編『古代史料学講演会記録集３』，59頁，2022年３月15日

2　論文
「摂関期貴族社会における漢籍収蔵の様相」髙田宗平編『日本漢籍受容史―日本文化の基層』八木書店，pp.159-181,2022年11月25日

4　展示図録・資料図録・映像・DB・デジタル・コンテンツ開発
（分担執筆）『いにしえが好きっ！―近世好古図録の文化誌』国立歴史民俗博物館,2023年３月７日
延喜式関係論文目録DB増補
デジタル延喜式DB更新

5　学会・外部研究会発表
「市大樹「日本古代文書木簡の展開」へのコメント」,慶北大学校人文学術院HK＋事業団第五回国際学術会議，オーシャンスイーツ済州ホテル＋オンライン，2022年１月30日
「『延喜式』から見た堅魚製品」シンポジウム カツオの古代学，東京医療保健大学世田谷キャンパス＋オンライン，2023年２月24日

7　その他
「元号（年号）字の決定権」『REKIHAKU』006，pp.58-59，国立歴史民俗博物館，2022年６月26日，査読有
「最澄と空海」「源高明」新『人物で学ぶ日本古代史』３，pp.65-75,171-174，吉川弘文館，2022年12月10日
「一代要記残簡―水戸黄門の贈り物」『文部科学通信』547，p.2，ジーアス教育新社，2023年１月９日
書評「岡田莊司著『古代天皇と神祇の祭祀体系』」『神道宗教』269，pp.167-174，神道宗教学会，2023年１月25日
「元禄時代の修理の際に作成された東大寺正倉院宝物図」『REKIHAKU』008, pp.76-79, 国立歴史民俗博物館，2023年２月26日，査読有
「前白木簡は前で申したのか」『桐墨』14，pp.2-３，大東文化大学書道研究所，2023年３月20日
コラム「典籍近世写本の調査から」渋谷綾子・天野真志編『古文書の科学　料紙を複眼的に分析する』文学通信，pp.178-182,2023年３月31日

二　主な研究教育活動

1　主な共同研究等参加状況
①　歴博
「日本歴史文化知の構築と歴史文化オープンサイエンス研究」分担者（2022～2027年度）
「『広橋家旧蔵記録文書典籍類』を素材とする中世公家の家蔵史料群に関する研究」分担者（2020～2022年度）
②　他の機関
国際日本文化研究センター共同研究「日文研所蔵井上哲次郎関係書簡の研究――国民国家の始発と終焉」共同研究員（2022年４月～2023年３月）

東京大学史料編纂所一般共同研究「中近世古文書の料紙に関する総合的科学研究」共同研究員　2022年４月～2023年３月

③　機構

広領域型基幹研究プロジェクト「異分野融合による総合書物学の拡張的研究」ユニット「延喜式のデジタル技術による汎用化」代表（2022～2027年度）

２　外部資金による研究

科学研究費基盤研究（B）「格・式研究を踏まえた日本古代社会像の再構築」研究代表者，2020～2022年度

科学研究費挑戦的研究（萌芽）「忘れられた古代塗料「金漆」の復元研究」研究代表者,2022～2024年度

科学研究費基盤研究（A）「「国際古文書料紙学」の確立」研究分担者，2019～2022年度

科学研究費基盤研究（A）「東アジア東辺における古代食の多角的視点による解明とその栄養価からみた疾病」研究分担者，2020～2024年度

科学研究費基盤研究（B）「近代日本における国民国家論の始発と終焉―井上哲次郎関係書簡の分析を通じて」研究分担者，2022～2024年度

４　主な展示・資料活動

2022年度企画展示「いにしえが，好きっ！―近世好古図録の文化誌」展示プロジェクト委員

2022年度特集展示「中世公家の〈公務〉と生活―広橋家記録の世界」展示プロジェクト委員

2024年度企画展示「変わりゆく歴史資料像ー過去を知るための新たなモノたち」（仮）展示プロジェクト委員

５　教育

法政大学大学院史学専攻非常勤講師（日本史学研究Ⅰ）

「『延喜式』とはなにか／『延喜式』の写本・版本」総研大文化科学研究科共通科目「総合書物論」，国文学研究資料館

三　社会活動等

１　館外における各種委員

日本歴史学会評議員，正倉院文書研究会委員，『史学雑誌』編集委員，日本古文書学会評議員

四　活動報告

２　特別委員会委員など館長からの委嘱を受けたもの

研究推進センター長

運営会議委員

メタ資料学研究センター員

人間文化研究機構研究設備・機器の共用促進検討チーム チーム員

総合展示第２室リニューアル委員

３　研究・調査プロジェクト報告

館蔵『東大寺正倉院宝物図』等の研究の参考となる関連書籍を購入した。

小野塚　航一　ONOZUKA Koichi　特任准教授（2022.10～）

【学歴】金沢大学文学部史学科（2008年卒業），金沢大学大学院人間社会環境研究博士前期課程（2010年修了），神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程（2019年修了）

【職歴】神戸大学大学院人文学研究科学術研究員（2020.8-2021.3），神戸大学大学院人文学研究科助手（2021.4-2022.9），人間文化研究機構人間文化研究創発センター研究員（2022.10～），併任国立歴史民俗博物館特任准教授（2022.10～），宗教法人勝尾寺非常勤職員（2022.12～）

【学位】博士（文学）（神戸大学）【専門分野】日本中世史,資料保存【主な研究テーマ】日本中世の地方寺院経済史,「勝尾寺文書」の形成と伝来，地域歴史資料の保全と活用【所属学会】大阪歴史科学協議会，大阪歴史学会，京都民科歴史部会，高大連携歴史教育研究会，神戸大学史学研究会，日本史研究会，北陸史学会

●主要業績

１．【論文】「中世後期における地方寺院の寺領と経済構造―摂津国勝尾寺を事例に―」，『ヒストリア』第295号，

pp. 80-103, 2022年12月
2．【論文】「地域歴史資料保全をめぐる課題―2019年台風19号による被災資料レスキューを通じて―」,『歴史科学』248号，pp. 29-36, 2022年１月
3．【論文】「歴史資料ネットワーク発足二五年―続発する大規模水害の中での保全活動の展開―」,『日本史研究』第699号，pp. 48-58, 2020年11月（共著）
4．【論文】「「勝尾寺文書」所収寺領目録の基礎的研究」,『ヒストリア』第280号，pp. 25-50, 2020年６月
5．【論文】「「勝尾寺文書」と「類聚目録」―未翻刻文書の位置をめぐって―」，神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報『LINK【地域・大学・文化】』Vol.10，pp. 87-102, 2018年12月

●2022年度の研究教育活動

一　研究業績（公開，発表，刊行済みのもの）

２　論文

「中世後期における地方寺院の寺領と経済構造―摂津国勝尾寺を事例に―」,『ヒストリア』第295号，pp. 80-103, 2022年12月（査読有）

「『新しい歴史学のために』第１～５号（1951年）翻刻」,『新しい歴史学のために』第300号，pp. １-36, 2022年６月（査読無）（共著）

４　DB

教材共有サイト2.0（https://kodai-kyozai2.org/）の構築・公開（2022.10.10）

５　学会・外部研究会発表

「中世勝尾寺の如法経会と寺院経済」，中近世宗教史研究会例会，オンライン，2022年９月16日

“The Rescue and Preservation of Historical Documents and Materials in the History of Japanese Historical Science”，国際歴史学会議（ICHS/CISH）第23回ポズナン大会，アダム・ミツキェヴィチ大学（ポーランド），2022年８月25日，

「地域間連携による災害被災史料の保全・アーカイブ化の研究」，東北大学災害科学国際研究所 IRIDeS金曜フォーラム「2021年度共同研究成果報告会」，オンライン，2022年７月16日

「中世後期における地方寺院の寺領と経済構造―摂津国勝尾寺を事例に―」，2022年度大阪歴史学会大会，オンライン，2022年６月26日

二　主な研究教育活動

１　主な共同研究等参加状況（歴博や機構の運営交付金による共同・連携研究）

①　歴博

機関拠点型基幹研究プロジェクト「日本歴史文化知の構築と歴史文化オープンサイエンス研究」（研究代表：後藤真）

③　機構

ネットワーク型基幹研究プロジェクト「歴史文化資料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業」（事業代表：三上喜孝）

５ 教育

兵庫県立御影高等学校

三　社会活動等

１　館外における各種委員

一般財団法人歴史科学協議会全国委員，歴史資料ネットワーク事務局長，歴史資料ネットワーク運営委員，高大連携歴史教育研究会事務局員，京都民科歴史部会委員

２　講演

「『勝尾寺縁起』を読む⑤―三宝荒神の霊験譚―」，勝尾寺史研究会，勝尾寺，2022年４月30日

「『勝尾寺縁起』を読む⑥―弥勒寺の建立―」，勝尾寺史研究会，勝尾寺，2022年６月４日

「『勝尾寺縁起』を読む⑦―結界・本尊・浄道上人―」，勝尾寺史研究会，勝尾寺，2022年８月５日

賀　申杰　GA Shiketsu　プロジェクト研究員（2020.4～）

生年：1989

【学歴】中国人民大学歴史学部卒（2011），東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻日本史学修士課程修了（2015），東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻日本史学博士課程修了（2020）
【職歴】国立歴史民俗博物館プロジェクト研究員（2020）
【学位】文学博士（東京大学，2020年取得）
【専門分野】日本近代史
【主な研究テーマ】日本近代の造船業
【所属学会】史学会，軍事史学会，東アジア史学会
【研究目的・研究状況】メールアドレス：heshenjie@rekihaku.ac.jp

●主要業績

・論文
「明治後期の川崎造船所における外国発注艦建造問題に関する一考察」，『史学雑誌』126編７号，2017年７月
「大正九年以降における臣籍降下基準の沿革に関する一考察：降下した皇族の待遇問題を中心に」，『東京大学日本史学研究室紀要』22巻，2018年３月
「明治末期日本企業的艦船輸出」（李福鐘，若林正丈，川島真等編『跨域青年學者台灣與東亞近代史研究論集第二輯』稲鄉出版社（台灣）2017年）
「日清戦争以前の外国船修理問題：東京石川島造船所を中心に」，『東京大学日本史学研究室紀要』24巻，2020年３月
「横須賀造船所の外国船修理事業：明治一六年海軍軍拡以前を中心に」，『史学雑誌』130編２号，2021年２月
「日露戦争前の「揚武艦」輸出をめぐる対韓外交の一側面：在韓公使館の対応を中心に」，『軍事史学』56編４号，2021年３月
・学会・外部研究会発表
「明治終期における民間造船企業の艦艇輸出活動」，2015年第113回史学会大会報告

●2022年度の研究教育活動

一　研究業績

５　学会・外部研究会報
賀申杰「原敬，滨口雄幸暗杀事件与政党政治」，山東・山東大学歴史文化学院主催研究会「日本史上的暗杀与政治变动」，中華人民共和国，中国語，2022年７月11日（招待）

二　主な研究教育活動

３　国際交流事業
賀申杰（コメンテーターとして参加）「天津・南開大学日本研究院主催，シンポジウム「日本史研究的学脉传承与守正创新高端论坛」，中華人民共和国，中国語，2022年10月16日（招待）
賀申杰，海上貴彦，朴完，曽宝満，アンドリュー・レヴィディス，吉田ますみ「日本研究者のための各国文献検索ワークショップ」，吉田ますみ（三井文庫）主催，日本，日本語，2022年９月23日（招待）

５　教育
賀申杰「日本大学院教育中日本近代史的研究方法」（講義），天津・南開大学歴史学院，中華人民共和国，中国語，2022年11月22日（招待）

亀田　尭宙　KAMEDA Akihiro　特任助教（2019.10～）

生年：1984

【学歴】東京大学工学部システム創成学科（2007年卒業）東京大学大学院新領域創成科学研究科人間環境学専攻（2009年９月修了）東京大学大学院情報理工学系研究科コンピュータ科学専攻（2012年９月単位取得退学）
【職歴】情報処理推進機構 未踏IT 人材発掘・育成事業 未踏本体 クリエータ（2009.7～2010.3），情報・システム研

究機構 技術補佐員（2012.10～2013.3），同 特任研究員（2013.4～2014.9），湘南工科大学 コンピュータ応用学科 非常勤講師（2013.4～2014.9），京都大学地域研究統合情報センター 助教（2014.10～2016.12），京都大学東南アジア地域研究研究所 助教（2017.1～2019.9）
【学位】修士（環境学）（東京大学）（2009年取得）
【専門分野】情報知識学（Linked Dataの構築と活用，自然言語処理による知識抽出，デジタル知識の保存と継承），人文社会情報学
【主な研究テーマ】地域に関わる知識の共有と継承のための情報技術研究
【所属学会】情報処理学会，人工知能学会，言語処理学会，デジタルアーカイブ学会

●主要業績

1．Akihiro Kameda, Kiyoko Uchiyama, Hideaki Takeda, Akiko Aizawa：Extraction of Semantic Relationships from Academic Papers using Syntactic Patterns, The Fifth International Conference on Information, Process, and Knowledge Management,（2013）.
2．Akihiro Kameda, Fumihiro Kato, Utsugi Jinbo, Ikki Ohmukai, Hideaki Takeda：Integrate Japanese Red List into LOD of Species, PNC Annual Conference and Joint Meetings 2013（2013）.
3．亀田　尭宙，後藤　真「地域歴史資料情報基盤のデータモデル構築：保存・発見・活用の高度化にむけて」じんもんこん2020，情報処理学会，オンライン，2020年12月13日.
4．Akihiro Kameda, Kosei Mino, Shoichiro Hara, Shigeo Sugimoto：Trial for Collecting, Sharing and Preserving Digital Research Assets in Asia, PNC Annual Conference and Joint Meetings 2022（2022）. https://ieeexplore.ieee.org/document/9982779

●2022年度の研究教育活動

一 研究業績

2　論文
Akihiro Kameda; Kosei Mino; Shoichiro Hara; Shigeo Sugimoto：Trial for Collecting, Sharing and Preserving Digital Research Assets in Asia, PNC Annual Conference and Joint Meetings 2022（2022）. https://ieeexplore.ieee.org/document/9982779（査読あり）

二 主な研究教育活動

2　外部資金による研究（科学研究費などの外部資金，各種補助金による研究，企業・自体体による研究）
「地域歴史資料学を機軸とした災害列島における地域存続のための地域歴史文化の創成」（研究代表者：奥村弘），研究協力者，2019～2023年度
「インドネシア熱帯泥炭地における災害および水文・気象情報管理システムの構築」（研究代表者：甲山治）分担者，2019年10月～2023年度
「データベースをつうじた地域と科学の知の統合による気候応答型居住環境の創出」（研究代表者：山田協太）分担者，2018～2023年度
「芸術・文化財情報流通のための多言語辞書データ開発の研究」（研究代表者：嘉村哲郎）分担者，2022～2024年度
「Linked Dataの可視化を中心にした資料群データの理解支援手法の構築」研究代表者，2022～2024年度

川邊　咲子　KAWABE Sakiko　　特任助教（2022.4～）

生年：1989

【学歴】金沢大学人間社会学域人文学類卒業（2013），金沢大学大学院人間社会環境研究科地域創造学専攻（博士前期課程）修了（2016），金沢大学大学院人間社会環境研究科人間社会環境学専攻（博士後期課程）修了（2021）
【職歴】日本学術振興会特別研究員DC２（2018.4～2019.5）人間文化研究機構国立歴史民俗博物館プロジェクト研究員（2019.5-2022.3）
【学位】博士（学術）【専門分野】文化資源学，物質文化学【主な研究テーマ】地域民具コレクションに見る人とモノとの関係性【所属学会】日本民具学会，文化資源学会，北陸人類学研究会（日本文化人類学会北陸地区研究懇談

会）【研究目的・研究状況】石川県能登半島とフィリピン・イフガオ州をフィールドに，地域の民具コレクションについての調査・研究を行ってきた。民具そのものというよりも，人々がそうした過去から残されたモノを集めて残そうとするその活動自体に注目し，背景にあるモノと人，記憶との関係について研究・調査を行っている。
地域においてこれまで収集・保存された民具は，物だけが残り情報が残されていないために学術資料や地域文化資源としての価値が低く，資料館等の収蔵庫や廃校舎等に死蔵され，消失の危機にあるものも少なくない。そうした現状において，民具が研究や博物館活動だけでなく地域活動や日常生活の営みにも役立つような文化資源となるには，どのような情報を記録･蓄積し，いかなる方法で活用･共有していくのが望ましいかを考えていく必要がある。そうしたモノと情報の蓄積・共有のあり方，方法について考察を行っている。

●主要業績

論文

1．【論文】Kawabe, S.「Everyday Object Collections Formed by Collectors and Contributors in the Local Living Context： An investigation on background of the collecting and functions of collected objects in the Noto Peninsula, Japan and Ifugao Province, Philippines」（博士学位論文）金沢大学大学院人間社会環境研究科，2021年３月
2．【論文】川邊　咲子「民具の「緩やかな保存」考―物のライフサイクルの視点から―」『農村計画学会誌』41-1, pp.6-9,2022年６月
3．【論文】川邊　咲子「アーティストと市民との協働による民具の「緩やかな保存」の取り組みと展望」『日本民俗学』313，pp.92-99,2023年２月

●2022年度の研究教育活動― 研究業績

2　論文

Kawabe, S.「Formation of an Everyday Object Collection through the Perspectives of an Ifugao Indigenous Community's Collector and Contributors」『The Cordillera Review： A Journal of Philippine Culture and Society』12-１＆２，pp.93-126,2022年（査読あり）

川邊　咲子「民具の「緩やかな保存」考―物のライフサイクルの視点から―」『農村計画学会誌』41-1, pp.6-9,2022年６月（査読なし）

川邊　咲子「アーティストと市民との協働による民具の「緩やかな保存」の取り組みと展望」『日本民俗学』313，pp.92-99,2023年２月（査読なし）

5　学会・外部研究会発表

Kameda, A.，Kawabe, S.，Goto, M.「Knowledge accumulating and clustering in khirin」CIDOC 2021，オンライン，2022年５月24日

川邊　咲子「アーティストと市民との協働による民具の“緩やかな保存”の取り組みと展望」日本民俗学会第920回談話会（第74回年会プレシンポジウム），オンライン／国立歴史民俗博物館，2022年７月24日

Amano, M.，Kawabe, S.「Recent Progress and Challenge in Historical and Cultural Material Preservation with Local Communities」XXIII International Congress of Historical Sciences，2022年８月25日

Kawabe, S.「Creating a Transborder Community for the Preservation of Local Cultural Artifact」International Conference on Cross-Border Mobility，オンライン，2022年９月８日

Kawabe, S.「Creating a crowdsourcing system and community to collect information on local everyday objects」7 th Digital Humanities in the Nordic and Baltic Countries Conference（DHNB2023），オンライン／Mae Fah Luang University，2023年３月10日

7　その他

川邊　咲子「民具の「緩やかな保存」―奥能登国際芸術祭「珠洲の大蔵ざらえ」」国立歴史民俗博物館編『REKIHAKU 特集「アートがひらく地域文化」』文学通信，pp.30-36,2023年２月26日

二　主な研究教育活動

1　主な共同研究等参加状況（歴博や機構の運営交付金による共同・連携研究）

①　歴博

基幹研究プロジェクト「日本歴史文化知の構築と歴史文化オープンサイエンス研究」

・学術野営2022（2022年７月１～３日　於：オンライン／岡山県・吹屋）を企画・運営し，報告「地域民具

資料の保存・継承の担い手について」とディスカッションを行った。
・キックオフ研究会（2022年８月５日　於：オンライン／歴博）にて報告「日常における資料消失への対応を考える―「学術野営」の内容報告を中心に―」を行った。

２　外部資金による研究（科学研究費などの外部資金，各種補助金による研究，企業・自体体による研究）
科学研究費・基盤研究（C）「地域民具コレクションの整理手順のモデル化と緩やかな保存についての実践的研究」研究代表者
科学研究費・基盤研究（C）「Linked Dataの可視化を中心にした資料群データの理解支援手法の構築」研究分担者
科学研究費・基盤研究（B）「芸術・文化財情報流通のための多言語辞書データ開発の研究」研究分担者

３　国際交流事業（国際交流協定にもとづく事業，国際シンポジウム・集会など）
バンドン工科大学（インドネシア）との包括連携協定に基づく共同研究
・バンドン工科大学芸術デザイン学部にて，大学内外の学生・研究者を対象にOpen Lecture and Workshop Seriesを開催し，講演「Reframing Museum: Its expanding concept and methodology」（2022年11月21日）とワークショップ「Workshop Session 1: Recording Object Biography 」「Workshop Session 2: Making Mobile Museum 」（2022年11月23日）を行った。
・人文科学とコンピュータシンポジウム「じんもんこん2022」のプレイベント「From Field To Table: Methodology and Workflow for Creating Digital Archives of Art and Cultural Resources 」（2022年12月９日 於：オンライン）を企画し，当日はモデレーターの役割を担った。

三　社会活動等

４　社会連携
②　共同研究（自治体からの委託研究や産業界との共同研究）
令和４年度文化芸術振興費補助金（「食文化ストーリー」創出・発信モデル事業）「「能登杜氏」により継承された奥能登の酒造産業・技術・文化に関する学術調査研究・発信事業」（事業主体：輪島市文化財総合活用実行委員会）に有識者・オブザーバーとして参加。

四　活動報告

３　研究・調査プロジェクト報告
・令和４年度NIHU若手研究者海外派遣プログラムへの参加
派遣先機関：バンドン工科大学（インドネシア）
派遣期間：2022年11月２日～12月１日
プロジェクト名：日本歴史文化知の構築と歴史文化オープンサイエンス研究
研究課題名：地域との協働による民具資料のデジタルアーカイブ化
活動内容：バンドン工科大学芸術デザイン学部のDesign Ethnography Lab によるデジタルアーカイブのデータ収集・編集作業に参加し，方法論に関する調査を行った。また，そうした調査やOpen Lecture and Workshop Seriesを通し，大学内外の学生や研究者と，博物館や資料データの記録・公開について議論し活発な意見交換を行った。

川村　清志　KAWAMURA Kiyoshi　准教授（2012.4～）

併任：総合研究大学院大学日本歴史研究専攻准教授（2014.4～）生年：1968

【学歴】大阪大学文学部（1992年３月卒業）京都大学人間・環境学研究科大学院（修士）（1996年３月修了）京都大学人間・環境学研究科大学院（博士）（1999年３月単位取得退学）
【職歴】神戸学院大学人文学部地域研究センターP.D.（2002），札幌大学文化学部日本語・日本文化学科助（准）教授（2005），同教授（2009）大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部准教授（2012），総合研究大学院大学日本歴史研究専攻准教授併任（2014）
【学位】学術博士（京都大学人間･環境学研究科）（2003年取得）【専門分野】文化人類学, 民俗学【主な研究テーマ】口頭伝承の近代的展開，祭礼芸能の実践と習得過程の探求，メディアによる民俗文化の再表象過程，現代日本のサブカルチャーと伝統文化など【所属学会】日本文化人類学会，日本民俗学会，日本口承文芸学会，京都民俗学会

●主要業績

1．【単著】『クリスチャン女性の生活史―「琴」が歩んだ日本の近・現代』青弓社，292頁，2011年１月
2．【論文】「近代における民謡の成立―富山県五箇山地方「こきりこ」を中心に」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第165集，pp.175-204,2011年３月）（査読有）
3．【論文】「祭りの習得と実践：子どもによる準備過程を中心に（『比較文化論叢：札幌大学文化学部紀要』25，pp.7-54,2010年12月）
4．【論文】芸能への参入と習得―兵庫県明石市大蔵谷獅子舞の事例から」（後藤静夫編『日本伝統音楽研究センター研究報告５「近代日本における音楽・芸能の再検討」』pp.187-199，京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター，2010年３月）
5．【論文】「移動する身体と故郷の物語の行方―移動によって見いだされた故郷と移動のなかで変容する故郷」（『歴博研究報告［共同研究］人の移動とその動態に関する民俗学的研究』199集，pp.143-170,2015年12月

●2022年度の研究教育活動

一 研究業績

1　著書
共編著：島立理子，川村清志，小田島高之 2023年３月『定期市を歩く―定期市からみた生活文化の歴史と多様性に関する研究』国立歴史民俗博物館

2　論文
川村清志　2023年３月「都合される声とモノ，共創される「津波文化」―リアス・アーク美術館の震災展示から」『国立歴史民俗博物館研究報告』240
川村清志　　2023年２月「アートと民俗文化研究の節合の試み―奥能登国際芸術祭を事例として―」『日本民俗学』313

口頭発表

書評・その他

5　学会・外部研究会発表
川村清志　2022年７月「地域文化の<保存>と<活用>，そして再創造」，第920回日本民俗学会談話会年会プレシンポジウム
川村清志　2022年10月「民俗文化からアートへ―現代における保存と活用のアルケミー」日本民俗学会第74回年会シンポジウム
川村清志　2022年12月「全体構想「課題と目標―フィールドサイエンスの再統合」」，共同研究「フィールドサイエンスの統合と地域文化」第３回研究会
川村清志　2023年３月「地域文化における創発とは何か―フィールドサイエンスの再統合が目指すもの」，人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト・キックオフシンポジウム「横断的・融合的地域文化研究の領域展開」

7　その他
川村清志　2022年９月「書評「原慶太郎・菊池慶子・平吹喜彦編『自然と歴史を活かした震災復興―持続可能性とレジリエンスを高める景観再生―」『林業経済』887

二 主な研究教育活動

1　主な共同研究等参加状況
③　機構
「フィールドサイエンスの再統合と地域文化の創発」（研究代表者：川村清志），研究代表（2022年度～2027年度）

2　外部資金による研究
科学研究費基盤研究（B）「日本語敬語形成モデルの構築―生成・運用・伝播に注目して―」（研究代表者，中井靖一 富山大学教授），研究分担者（2019年度～2022年度）
科学研究費基盤研究（C）「植物方言を地域研究資料として位置付けるための実践的な研究（研究代表者，島立理子研究員，千葉県立中央博物館）研究分担者（2022年度～2024年度）

三 社会活動等

２　講演・カルチャーセンターなど
川村清志　2022，7「日本の祭の領域展開―過去と現在のダイナミズム―」「和の心のフォーラム」学士会館，東京
川村清志　2022，11「七つの浦の物語―同窓会誌をめくりて―」「文化のつどい」，輪島市七浦公民館，石川

工藤　航平　KUDO Kohei　准教授（2022.4～）

生年：1976年

【学歴】東京学芸大学教育学部（2000年卒業），東京学芸大学大学院教育学研究科社会科教育専攻修士課程（2004年修了），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻博士課程（2010年修了）
【職歴】埼玉県立文書館 公文書担当嘱託職員（2005年），国文学研究資料館 研究部機関研究員（2010年），東京都公文書館 史料編さん担当公文書館専門員（2013年），国立歴史民俗博物館 研究部 歴史研究系准教授（2022年～）
【学位】博士（文学）【専門分野】日本近世史，地域文化史【主な研究テーマ】近世社会における知識の多様性とその構築・継承プロセスの解明，民間所在資料の保存【所属学会】地方史研究協議会，日本歴史学協会，日本アーカイブズ学会，日本教育史研究会，関東近世史研究会

●主要業績

１　【著書】『近世蔵書文化論―地域〈知〉の形成と社会―』457頁，勉誠出版，2017年11月
２　【論文】「北海道所在の民間アーカイブズの特質―分割管理された「移住持込文書」の伝来と意義―」（国文学研究資料館編『社会変容と民間アーカイブズ―地域の持続へ向けて―』，pp97-129，勉誠出版，2017年３月）
３　【論文】「幕末期江戸周辺における地域文化の自立」，『関東近世史研究』第65号，pp４-50，関東近世史研究会，2008年10月，査読有
４　【論文】「八丈島流人アーカイブズの概要調査報告―都有形文化財「八丈民政資料」の伝来と構造―」，『東京都公文書館調査研究年報〈WEB版〉』第５号，pp.1-24，東京都公文書館，2019年３月，査読無
５　【論文】「日本近世社会における知識形成と蔵書文化」，『歴史学研究』第1031号，pp１-11頁，績文堂出版，2023年１月，査読有

●2022年度の研究教育活動

一　研究業績

２　論文
「日本近世社会における知識形成と蔵書文化」，歴史学研究会『歴史学研究』1031号，績文堂出版，2023年１月，査読あり
「石川県における公文書管理と公文書館設置」，宮間純一編『公文書管理法時代の自治体と文書管理』，勉誠出版，2022年10月，査読なし
５　学会・外部研究会発表
「小金井桜の名所化と川崎平右衛門」，川崎平右衛門研究会第１回シンポジウム，オンライン，2023年２月19日
７　その他（『REKIHAKU』，友の会ニュース，『本郷』など）
「知の形成―民衆はどのように知識を形成・継承したのか」，岩城卓二ほか編『論点・日本史学』，pp206-207，ミネルヴァ書房，2021年８月
「フィールド紀行　移住持込資料を守り，伝える―北海道開拓移住の記憶と記録―①」，国立歴史民俗博物館編『REKIHAKU』第９号，pp70-75，文学通信，2023年６月
「15 史料論」，史学会『史學雜誌　回顧と展望』第131編第５号，史学会，2022年５月
「国立歴史民俗博物館の愉悦⑪　御本丸一二三四之側大奥長局惣絵図　鈴木扣」，『文部科学教育通信』第549号，ジアース教育新社，2023年２月
「江戸時代の蔵書から知識形成を解き明かす」，歴史民俗博物館振興会編『国立歴史民俗博物館友の会ニュース歴博友の会』第221号，歴博友の会，2022年６月

二　主な研究教育活動

１　主な共同研究等参加状況

③　機構（基幹研究プロジェクト）
機関拠点型基幹研究プロジェクト「日本歴史文化知の構築と歴史文化オープンサイエンス研究」
ネットワーク型基幹研究プロジェクト「歴史文化資料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業」
共創促進研究日本関連在外資料調査研究「外交と日本コレクション―19世紀在外日本資料の世界史的文脈による研究と現地およびオンライン空間における活用」

2　外部資金による研究
日本学術振興会科学研究費助成　研究活動スタート支援「日本近世における民衆の知識形成・継承・共有の特質に関する研究」，研究代表者，2022年度-2023年度
日本学術振興会科学研究費助成　基盤研究（C）「幕末外交と贈答美術品―遣米･遣欧使節団の贈品を中心に」，研究分担者，2021年度-2024年度

4　主な展示・資料活動
資料調査研究プロジェクト「棟梁鈴木家資料」，研究代表者，2022年度-2024年度

5　教育
学習院女子大学国際文化交流学部非常勤講師
駒澤大学文学部非常勤講師

三　社会活動等

1　館外における各種委員
地方史研究協議会常任委員，日本アーカイブズ学会委員，千葉県市原市歴史博物館協議会委員

2　講演・カルチャーセンターなど
「本多雖軒と国分寺の地域医療」，国分寺市武蔵国分寺跡史跡指定100周年記念歴史講座，東京都国分寺市本多公民館，2022年10月
「延遼館の歴史とかたち―延遼館の再建に向けての素材提供―」，浜離宮庭園ガイドクラブ研修会，東京都港区立生涯学習センター，2022年12月
「江戸時代の民衆の学び―第３展示室「寺子屋れきはく」の展示内容から―」，国立歴史民俗博物館登録ボランティア研修会，オンライン，2022年12月
「近世房総の村の具体像について」，木更津市立中郷公民館中郷カレッジ，千葉県木更津市立中郷公民館，2023年１月
「図書館のなかの地域資料　～朴斎文庫の魅力をひもとく～」，地域の歴史・文化再発見講座特別編，大阪府泉大津市立図書館，2023年３月

小池　淳一　KOIKE Jun’ichi　教授（2011～）

併任：総合研究大学院大学日本歴史研究専攻教授（2011～），生年：1963

【学歴】東京学芸大学教育学部（1987年卒業）筑波大学大学院博士課程歴史人類学研究科（一貫制）（1992年単位取得退学）
【職歴】弘前大学人文学部講師（1992），弘前大学人文学部助教授（1994），愛知県立大学文学部助教授（2001），国立歴史民俗博物館民俗研究部助教授（2003），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部助教授（2004），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻助教授併任（2006），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部准教授（2007），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻准教授併任（2007），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部教授（2011），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻教授併任（2011），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻長（2014-15）
【学位】博士（文学）（総合研究大学院大学）【専門分野】民俗学（民俗信仰，口承文芸，民俗学史），伝承史【主な研究テーマ】民俗における文字文化の研究，陰陽道の展開過程の研究，地域史における民俗の研究など【所属学会】日本民俗学会，日本宗教学会（理事），日本昔話学会，日本口承文芸学会，日本文化人類学会，地方史研究協議会，日本史研究会，日本民具学会，儀礼文化学会，青森県民俗の会，福島県民俗学会ほか

●主要業績

1．【編著書】『新陰陽道叢書（第四巻）民俗・説話』635頁，名著出版，2021年10月
2．【著書】『季節のなかの神々―歳時民俗考―』220頁，春秋社，2015年10月
3．【著書】『陰陽道の歴史民俗学的研究』442頁，角川学芸出版，2011年２月
4．【論文】「結節点としての万年筆―筆記具の民俗学へむけて―」『民具マンスリー』51（４），pp.1-11, 2018年７月10日
5．【展示図録】歴博企画展示図録『万年筆の生活誌―筆記の近代―』，国立歴史民俗博物館，2016年３月

●2022年度の研究教育活動

一 研究業績

1　著書
編著『奥会津の戦国期文化をさぐる―学僧祐俊の旅と文化遺産―』只見町（福島県）教育委員会，2023年３月31日，全79頁
編著（橋本萬平著）『江戸・明治の物理書』岩田書院，2023年３月，全396頁

2　論文
「大根と神霊―民俗祭祀の音と場―」『學士會会報』954号，学士会，pp. 66-70，2022年５月１日（査読なし）

5　学会・外部研究会発表
「「博士」とその周辺」日本宗教学会第81回学術大会（愛知学院大学／リモート）2022年９月11日，パネル「陰陽師の虚像と実像」パネル代表＋司会
「安倍晴明伝承の中世的様態―『安部懐中伝暦』をめぐって―」日本民俗学会第74回年会（熊本大学）2022年10月２日

7　その他
「俗信と昔話的世界―『あおもり俗信辞典』によせて―」『アオモリ文藝』２号，青森文芸出版，pp.6-７，2022年８月15日
「太陽暦受容の一面―「新暦萬歳」の紹介―」『西郊民俗』260号，西郊民俗談話会，pp.21-25，2022年９月18日
「くらしの由来記・七五三」『REKIHAKU』７号，国立歴史民俗博物館，pp.96-97，2022年10月26日
「在地記録としての常楽寺聖教」福島県金山町教育委員会編『常楽寺聖教調査概報』，金山町教育員会，pp.13-14頁，2023年３月17日
「歴史家への道程―塚本学日記―」『国立歴史民俗博物館研究報告』240集，国立歴史民俗博物館，pp.261-306，2023年３月
「橋本萬平の科学史研究―その視点と射程―」橋本萬平著（小池淳一編）『江戸・明治の物理書』，岩田書院，pp.383-394，2023年３月
「昔話録音音源の処理と発信―青森県史における口承文芸調査資料から―」『口承文芸研究』，日本口承文芸学会，pp.142-149，2023年３月

二 主な研究教育活動

1　主な共同研究等参加状況

2　外部資金による研究
科学研究費基盤研究B「「知識」の再配置と実践―東北の巫者と寺院をめぐって―」（弘前大学, 2020～2022年度）研究分担者
科学研究費基盤研究C「古代～近代陰陽道史料群の歴史的変遷と相互関係の解明」（京都女子大学，2021～2023年）研究分担者
科学研究費基盤研究A「宗教テクスト文化遺産アーカイヴス創成学術共同体による相互理解知の共有」（龍谷大学，2022～2026年），研究分担者

5　教育
成城大学大学院文学研究科非常勤講師（日本民俗学研究）明治大学文学部非常勤講師（民俗学）

三　社会活動等

1　館外における各種委員日本宗教学会理事
八千代市文化財審議会委員

３　マスコミ

四　活動報告

３　研究・調査プロジェクト報告

福島県奥会津地方における真言宗寺院の聖教典籍の中から陰陽道およびその周辺に関する資料を見出し，その分析を進めた。併せて修験道（密教）と陰陽道とのかかわりを民俗事象から探る調査も進めた。その成果の一端として，以下の２つの学会発表を行なった。

・「「博士」とその周辺」日本宗教学会第81回学術大会（愛知学院大学／リモート）2022年９月11日

・「安倍晴明伝承の中世的様態―『安部懐中伝暦』をめぐって―」日本民俗学会第74回年会（熊本大学）2022年10月２日

小瀬戸　恵美　Koseto-Horyu, Emi　准教授（2010.1～）

併任：総合研究大学院大学日本歴史研究専攻准教授（2013～）

【学歴】東京大学理学部化学科（1995年卒業），東京藝術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻博士後期課程（2000年中途退学）【職歴】アメリカ合衆国ゲティ保存研究所グラジュエイトインターン（1999）
国立歴史民俗博物館情報資料研究部助手（2000），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部助手（2004），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部助教（2007），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部准教授（2010），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻准教授（2013～）
【学位】文化財修士（東京藝術大学）（1998年取得）【専門分野】保存科学，文化財保存学【主な研究テーマ】展示評価の手法と検討，博物館施設における資料劣化原因・過程に関する研究【所属学会】文化財保存修復学会，日本文化財科学会，国際博物館会議（International Committee of Museum，ICOM），International Institute for Conservation of Historic and Artistic Works（IIC）【研究目的・研究状況】博物館における研究展示において視線計測などの非接触・非言語による展示評価手法の検討と考察を目的としている。同時に，文化財を対象に自然科学的手法による分析・調査を行い，他分野との協業によって文化財構成物質の流通や人の文化的交流についての考察をおこなっている。

●主要業績

１．【論文】「常呂川河口遺跡墓壙出土ガラスの自然科学的分析」（『常呂川河口遺跡』８，pp.297-303,2008年３月）

２．【論文】「２．連携研究機関における生物被害対策の現状と課題 国立歴史民俗博物館の生物生息調査」（『有形文化資源の共同利用を推進するための資料管理基盤形成』pp.125-132,2008年２月）

３．【論文】「ラマンイメージング装置による伊勢市版歌川派錦絵および版木の色材分析」（共著／坂本 章，落合周吉，東山尚光，増谷浩二，木村淳一）（『国立歴史民俗博物館研究報告』第153集，pp.1-19,2009年３月）（査読有）

４．【論文】「Raman studies of Japanese art objects by a portable Raman spectrometer using liquid crystal tunable filters」(共著 Akira Sakamoto，Shukichi Ochiai，Hisamitsu Higashiyama，Koji Masutani，Jun-ichi Kimura，Mitsuo Tasumi)（『Journal of Raman Spectroscopy』，Vol.43，pp.787-792,2012年６月，published online on October 27）（査読有）

５．【論文】「A Pilot Study on the Museum Visitors'Interest by using Eye Tracking System」The Eighth Conference of Japanese Association for Digital Humanities（JADH2018）proceeding，pp.129-131,2018年９月９日（査読有）

●2022年度の研究教育活動

一　研究業績

三　社会活動等

２「博物館における来館者調査」『情報資料学講座』国立歴史民俗博物館友の会,2022年７月６日

四　活動報告

３　研究・調査プロジェクト報告

前年度までに取得した，視線検出及び視線検出ポイントのデータ解析を被験者の分析を試みて再解析したが，被験者別での有意な解析結果を得ることが出来なかった。これは，取り付け型機器を用いたことにより，データの精度が要素分析に耐えうるほどではなかったことに起因する。ゆえに次年度以降，可能であれば，２種のグラス型機器を取り付け型機器との同時測定をおこない，分析する必要がある。

齋藤　努　SAITO Tsutomu 教授（2009.4～）

併任：総合研究大学院大学日本歴史研究専攻教授（2009～），生年：1961

【学歴】東京大学理学部化学科（1983年卒業），東京大学大学院理学系研究科化学専攻博士課程（1988年修了）
【職歴】東京大学教養学部非常勤講師（1988），国立歴史民俗博物館情報資料研究部助手（1988），同助教授（1999），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻助教授併任（2002），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部助教授（2004），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究准教授（2007），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻准教授併任（2007），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部教授（2009），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻教授併任（2009），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻長併任（2010～2011），広報連携センター長併任（2013～2015,2018～2019）
【学位】理学博士（東京大学）（1988年取得）【専門分野】文化財科学【主な研究テーマ】歴史資料の自然科学的手法による分析（材質，技法，産地）【所属学会】日本文化財科学会，文化財保存修復学会【研究目的・研究状況】美術品・工芸品・考古遺物などの歴史資料を対象として自然科学的な手法を用いて調査を行い，人文科学的な研究結果とあわせることによって，原料の流通や人の交流，使用されていた技術などについて考察を加える。また，伝統技術に関する実地調査や再現実験なども実施している。

●主要業績

１．【単著】
『金属が語る日本史―銭貨・日本刀・鉄炮―』歴史文化ライブラリー355，吉川弘文館（単著），205頁，2012年11月

２．【論文】
齋藤努，高橋照彦，西川裕一「古代銭貨に関する理化学的研究 ―「皇朝十二銭」の鉛同位体比分析および金属組成分析―」IMES Discussion Paper No.2002-J-30, 2002年９月（査読なし）

３．【論文】
齋藤努，土生田純之，亀田修一，福尾正彦，鄭仁盛，高田寛太，風間栄一，藤尾慎一郎，柳昌煥，趙榮濟「鉛同位体比分析による古代朝鮮半島・日本出土青銅器などの原料産地と流通に関する研究 ―韓国嶺南地域出土・東京大学所蔵楽浪土城出土・宮内庁所蔵の資料などを中心に―」『考古学と自然科学』59，pp.57-81，2009年６月（査読あり）

４．【論文】
「刀匠の継承する伝統技術の自然科学的研究」『国立歴史民俗博物館研究報告』第177集，pp.127-178, 2012年11月（査読あり）

５．【論文】
齋藤努，坂本稔，高塚秀治「大鍛冶の炉内反応に関する検証と実験的再現」『国立歴史民俗博物館研究報告』第177集，pp.179-229, 2012年11月（査読あり）

６．【論文】
単著「江戸期小判などの色揚げに関する自然科学的研究」『国立歴史民俗博物館研究報告』第183集（開館三〇周年記念論文集Ⅱ），pp.1-51, 2014年３月（査読あり）

●2022年度の研究教育活動

一 研究業績

２　論文
齋藤 努, 青島 啓, 齊藤 大輔, 森福 洋二, 永嶌真理子, 今岡 照喜, 田中 晋作「史跡周防鋳銭司跡などから出土した資料の鉛同位体比分析」『国立歴史民俗博物館研究報告』285，pp.59-78, 2023年３月（査読あり）

3　調査・発掘調査報告書，自治体史・史料集，辞典など
齋藤 努「巨大加速器と江戸時代の銀貨」『文部科学教育通信』548，p.2, 2023年１月
齋藤 努「負ミュオンによる丁銀の深さ方向分析」『めそん』57，pp.17-19, 2023年３月
齋藤 努「共同研究の経過と概要・基盤研究（課題設定型）「高精度同位体比分析法を用いた古代青銅原料の産地と採鉱に関する研究」」『国立歴史民俗博物館研究報告』285，pp.1-10, 2023年３月
5　学会・外部研究会発表
齋藤 努, 反保 元伸, 土居内翔伍, 梅垣いづみ, 三宅 康博「ミュオン非破壊分析法による古後藤の目貫の深さ方向分析」日本文化財科学会第39回大会，千葉大学，pp.70-71，2022年９月11日
齋藤　努「文化財の分析を進めるために必要なこと」第７回文理融合シンポジウム「量子ビームで歴史を探る―加速器が紡ぐ文理融合の地平―」，高エネルギー加速器研究機構つくばキャンパス，2022年11月３日
7　その他
齋藤 努「巨大加速器で文化財へ潜る」『REKIHAKU』８，pp.80-84, 2023年２月

二　主な研究教育活動
2　外部資金による研究
科学研究費補助金・新学術研究「負ミュオンビームを用いた新たな非破壊元素分析法」（研究代表 二宮和彦）研究分担者，2018～2022年度
科学研究費補助金・基盤研究（A）「中世東アジア海域の地域社会と琉球帝国―集落・信仰・技術―」（研究代表 村木二郎）研究分担者，2022～2026年度

四　活動報告
3　研究・調査プロジェクト報告
古代に採掘が行われていた山口県内鉱山や周辺の製錬関連遺跡から出土した遺物から鉛を単離し，同位体比測定を行うことによって，各資料の原料の産地を推定した。

坂本　稔　SAKAMOTO Minoru　教授（2013～）

併任：総合研究大学院大学日本歴史研究専攻教授（2013～）

【学歴】東京大学理学部化学科（1989年卒業），東京大学大学院理学系研究科化学専攻修士課程（1991年修了），東京大学大学院理学系研究科化学専攻博士課程（1994年修了）
【職歴】国立歴史民俗博物館情報資料研究部助手（1994），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部助教授（2004），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部准教授（2007），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻准教授併任（2008），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部教授（2013），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻教授併任（2013），総合研究大学院大学文化化学研究科日本歴史研究専攻長（2016-2018）
【学位】博士（理学）（東京大学）（1994年取得）【専門分野】文化財科学【主な研究テーマ】同位体分析に基づく年代測定【所属学会】日本文化財科学会, 文化財保存修復学会, 日本AMS研究協会, 応用物理学会【研究目的・研究状況】炭素14年代法を中心に，数値年代の獲得と精度向上に研究の重点を置く。

●主要業績
1．【著書】坂本稔・横山操編『樹木・木材と年代研究』147頁，朝倉書店，2021年３月
2．【論文】Sakamoto Minoru, Hakozaki Masataka, Nakao Nanae, Nakatsuka Takeshi「Fine structure and reproducibility of radiocarbon ages of middle to early modern Japanese tree rings.」『Radiocarbon』59巻６号，pp.1907-1917，2017年12月
3．【共同研究】坂本 稔編『歴史資料研究における年代測定の活用法に関する総合的研究』国立歴史民俗博物館研究報告176,178頁，2012年12月
4．【外部資金】2022～2026年度科学研究費補助金（基盤A）「高精度単年輪14C測定による弥生から古墳期の暦年較正の高解像度化」研究代表者

●2022年度の研究教育活動

一 研究業績

1　著書

坂本稔・藤尾慎一郎・國木田大・箱崎真隆・中尾七重「^{14}C年代研究の現在地」『考古学ジャーナル』2023年３月号，ニューサイエンス社, ISSN:0454-1634, 23頁

2　論文

山田康弘，瀧上舞，坂本稔，木下尚子，藤尾慎一郎「熊本大学医学部所蔵縄文時代の人骨の年代学的調査―浜ノ州貝塚・沖ノ原貝塚・カキワラ貝塚・境崎貝塚・尾田貝塚―」『国立歴史民俗博物館研究報告』234，国立歴史民俗博物館，pp.121-147，2022年３月31日（査読有）

藤尾慎一郎，木下尚子，坂本稔，瀧上舞，篠田謙一「考古学データによるヤポネシア人の歴史の解明」『国立歴史民俗博物館研究報告』229，国立歴史民俗博物館，pp.3-14，2021年10月29日（査読有）

濵田竜彦，瀧上舞，坂本稔「鳥取県内所在古墳群出土人骨の年代学的調査（１）」『国立歴史民俗博物館研究報告』229，国立歴史民俗博物館，pp.127-143，2021年10月29日（査読有）

竹中正巳，坂本稔，瀧上舞「鹿児島県西之表市田之脇遺跡出土人骨の年代学的調査」『国立歴史民俗博物館研究報告』229，国立歴史民俗博物館，pp.153-159，2021年10月29日（査読有）

竹中正巳，坂本稔，瀧上舞「鹿児島県鹿屋市に所在する地下式横穴墓から出土した人骨の年代学的調査」『国立歴史民俗博物館研究報告』229，国立歴史民俗博物館，pp.161-167，2021年10月29日（査読有）

竹中正巳, 坂本稔, 瀧上舞「鹿児島県西之表市小浜遺跡出土人骨の年代学的調査」『国立歴史民俗博物館研究報告』229，国立歴史民俗博物館，pp.169-173，2021年10月29日（査読有）

竹中正巳, 坂本稔, 瀧上舞「鹿児島県南九州市高取遺跡出土人骨の年代学的調査」『国立歴史民俗博物館研究報告』229，国立歴史民俗博物館，pp.183-187，2021年10月29日（査読有）

木下尚子, 坂本稔, 瀧上舞「沖縄貝塚時代の貝殻集積等出土貝殻の年代学的調査」『国立歴史民俗博物館研究報告』229，国立歴史民俗博物館，pp.189-246，2021年10月29日（査読有）

木下尚子，坂本稔，瀧上舞「沖縄貝塚時代出土人骨等の年代学的調査」『国立歴史民俗博物館研究報告』229，国立歴史民俗博物館，pp.247-277，2021年10月29日（査読有）

5　学会・外部研究会発表

坂本稔・門叶冬樹・光谷拓実「９・10世紀の日本産樹木の単年輪^{14}C測定」日本文化財科学会第39回大会, 2022年９月10日, 千葉大学

坂本稔・齋藤努・米田穣「人新世に至る，モノを通した自然と人間の相互作用に関する研究」日本文化財科学会第39回大会ワーキンググループ会議，2022年９月10日，千葉大学

Sakamoto Minoru, Hakozaki Masataka, Nakatsuka Takeshi, Ozaki Hiromasa.「Annual radiocarbon dating of tree rings of the beginning and the end of the Yayoi period, Japan.」24th Radiocarbon & 10th ^{14}C&Archaeology Conference, 2022年９月18日, ETH Zürich.

坂本稔「炭素14年代測定における試料処理―埋没資料と樹木年輪を中心に―」2023年応物春季学術講演会, 2023年３月17日, 上智大学（オンライン）

7　その他

坂本稔「日本の樹木が炭素14年代法を変える」『REKIHAKU』７号, pp.56・57, 2022年10月, 国立歴史民俗博物館, ISBN:978-４-909658-91-３

二　主な研究教育活動

1　主な共同研究等参加状況

②　他の機関

産学連携共同研究「日本産樹木年輪による炭素14年代較正曲線の整備」研究代表者，2022～2024年度

③　機構

広領域連携型基幹研究プロジェクト「人新世に至る, モノを通した自然と人間の相互作用に関する研究」（代表：陀安一郎）歴博ユニット「同位体による年代・古気候・交流史研究」研究代表者，2022～2026年度

2　外部資金による研究

科学研究費補助金（基盤A）「高精度単年輪14C測定による弥生から古墳期の暦年較正の高解像度化」研究代表者，2022～2026年度

科学研究費補助金（基盤A）「高精度年代体系による東アジア新石器文化過程―地域文化の成立と相互関係―」

（研究代表者：小林謙一）研究分担者，2022年度～2026年度
科学研究費補助金（基盤B）「考古遺跡の高精度編年による人類史再構築のための国際的データベースの作成」（研究代表者：工藤雄一郎）研究分担者，2022年度～2025年度
科学研究費補助金（基盤S）「酸素同位体比年輪年代法の高精度化による日本列島の気候・生産・人口変動史の定量化」（研究代表者：中塚武）研究分担者，2021年度～2025年度
科学研究費補助金（基盤C）「中世民家の年代研究」（研究代表者：中尾七重）研究分担者，2021～2023年度
科学研究費補助金（基盤A）「過去３万年の極端気候・極端災害史の精密編年に向けた新しい年輪年代法の基盤研究」（研究代表者：箱崎真隆）研究分担者，2020年度～2024年度
科学研究費補助金（萌芽）「エジプト遺跡出土織物資料データベース構築―京都モデルの提案」（研究代表者：横山操）研究分担者，2019年度～2022年度
科学研究費補助金（基盤A）「ヘルレン川流域を中心とした匈奴国家中枢地の研究」（研究代表者：臼杵勲）研究分担者，2018年度～2022年度

5　教育
早稲田大学非常勤講師（考古学と関連科学B）
千葉大学非常勤講師（博物館資料保存論）
武蔵大学人文学部専門科目「芸術の科学/文化財科学」講師

三　社会活動等

1　館外における各種委員
日本文化財科学会評議員（2022年度～）
日本AMS研究協会運営委員（2017年度～）

4　社会連携
③　講演会・シンポジウム
「未知への挑戦：若手が語る最先端研究」2022年度総研大社会連携事業，長野県飯田高校，2022年11月13～15日（担当教員）
「炭素14年代法」『令和３年度中堅技術者研修（C班）』文化財建造物保存技術協会，2022年10月27日，国立歴史民俗博物館（Zoom）
「古いものの年代をどうやって測るのか」中郷カレッジ，中郷公民館，2023年２月16日，木更津市立中郷公民館

四　活動報告

3　研究・調査プロジェクト報告
大学院教育の一環として，「津島版木」および綿エンジの炭素14年代測定を山形大学で実施した。
９月30日，測定値が世界標準の較正曲線IntCalに採用されたことで知られる福井県年縞博物館の展示調査を行い，炭素14年代法に関する知見を得た。

佐川　享平　SAGAWA Kyohei 特任助教（2022～）

【学歴】早稲田大学大学院文学研究科日本史コース博士後期課程満期退学（2012年度）
【職歴】早稲田大学大学史資料センター助手（2015～2017年度）・同助教（2018～2021年度）
【学位】博士（文学）（早稲田大学）【専門分野】日本近現代史 【主な研究テーマ】炭鉱における労働社会史，炭鉱関係資料の保全・活用 【所属学会】民衆史研究会，アジア民衆史研究会，国際高麗学会日本支部，歴史学研究会 【研究目的・研究状況】1910年代から増加する朝鮮人鉱夫に着目し，労働力として担った役割や炭鉱社会への影響を考察している。また，近年では，戦後の炭鉱労働や，労働災害の問題にも研究の射程を延ばしている。

●主要業績

1．【著書】『筑豊の朝鮮人鉱夫 1910～30年代年代――労働・生活・社会とその管理』（世織書房，2021年３月）
2．【論文】「戦前期の早稲田大学における鉱山実習とキャリア形成」（『早稲田大学史記要』52, pp.55-94,2021年３月）
3．【論文】「戦間期日本の炭鉱業における朝鮮人鉱夫の役割と待遇」（『歴史学研究』1015, pp.108-117,2021年10月）

４．【学会・外部研究会発表】
「戦間期日本の炭鉱業における朝鮮人鉱夫の役割と待遇」（2021年度歴史学研究会大会近代史部会，2021年５月23日）

●2022年度の研究教育活動

一　研究業績

７　その他
「書評と紹介　伊藤彰浩著『戦時期日本の私立大学：成長と苦難』」（『日本歴史』892，pp.98-100,2022年９月）
「若手研究者たちの挑戦　新しい資料と向き合い，炭鉱労働社会の歴史を探る」（『REKIHAKU』８，pp.88-90,2023年２月）
「国立歴史民俗博物館の愉悦12　囚人労働絵巻」（ジーアス教育新社『文部科学教育通信』550, p.2,2022年９月）

二　主な研究教育活動

２　外部資金による研究
科学研究費若手研究「戦後の炭鉱における労働・労働災害史に関する基礎的研究」（2020～2023年度）研究代表者

４　主な展示・資料活動
総合展示第５・６室展示プロジェクト委員

５　教育
早稲田大学文学部・文化構想学部非常勤講師

澤田　和人　SAWADA Kazuto　准教授（2009.10～）

併任：総合研究大学院大学日本歴史研究専攻准教授（2013～）

【学歴】大阪大学文学部美学科（1996年卒業），大阪大学大学院文学研究科芸術史学専攻博士前期課程（1998年修了）【職歴】財団法人大和文華館学芸部（1998），国立歴史民俗博物館情報資料研究部助手（2002），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部助手（2004），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部助教（2007），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部准教授（2009），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻准教授併任（2013）
【学位】文学修士（大阪大学）（1998年取得）【専門分野】染織史，服飾史，絵画史（絵巻）【主な研究テーマ】中世を中心とする染織および服飾・衣装風俗に関する研究，野村正治郎に関する研究【所属学会】美術史学会

●主要業績

１．【論文】「十徳の変遷―中世を中心に」（『美術史』147号，pp.36-53,1999年11月）
２．【編著】『［染］と［織］の肖像―日本と韓国・守り伝えられた染織品』（国立歴史民俗博物館平成20年度企画展示図録，208頁，2008年10月）
３．【編著】『紅板締め―江戸から明治のランジェリー』（国立歴史民俗博物館平成23年度企画展示図録，164頁，2011年７月）
４．【編著】『野村コレクション 服飾Ⅰ』（国立歴史民俗博物館資料図録9,348頁，2013年３月）
５．【編著】『野村コレクション　服飾Ⅱ』（国立歴史民俗博物館資料図録10,356頁，2014年３月）

●2022年度の研究教育活動

一 研究業績

２　論文
「近代における風俗史研究と美人画の着物」『国立歴史民俗博物館研究報告』235集，pp.431-461, 2022年９月，査読あり

二　主な研究教育活動

１　主な共同研究等参加状況

①　歴博
基盤研究「歴博研究映像の総合的活用の方法論の構築―沖縄地域の映像を中心に」（研究代表：内田順子）共同研究者（2022年度～2024年度）
基盤研究「日本植物文化史の分野横断的な検証と展示手法の再構築」（研究代表：青木隆浩）研究副代表（2020～2022年度）
③　機構
機構共創先導プロジェクト「外交と日本コレクション―19世紀在外日本資料の世界史的文脈による研究と現地およびオンライン空間における活用」（研究代表：日高 薫）共同研究者（2022～2027年度）

4　主な展示・資料活動
くらしの植物苑特別企画「季節の伝統植物」展示プロジェクト副代表

5 教育
学習院女子大学非常勤講師

三　社会活動等

1　館外における各種委員（学会，学術会議，文化庁・学振・自治体審議委員など）
日本伝統工芸展　第１次鑑査委員

2　講演・カルチャーセンターなど（友の会も含む）
くらしの植物苑観察会「西洋草花模様の着物」，国立歴史民俗博物館くらしの植物苑，2023年２月25日
シルク博物館講座「変わりゆく着物―幕末から昭和初期」，シルク博物館，2023年３月11日

4　社会連携（国内）
③　講演会・シンポジウム（自治体など地方公共団体主催のもの）
連続講座　袈裟が紡ぐ時代と地域・人物の様相「宝金剛寺蔵七条袈裟・横被の美術工芸品としての特色」，佐倉市立美術館，2022年７月２日

四　活動報告

3　研究・調査プロジェクト報告
歴博研究報告235集に「近代における風俗史研究と美人画の着物」と題する論考を発表した。

篠崎　鉄哉　SHINOZAKI Tetsuya プロジェクト研究員（2022～）

生年：1986

【学歴】東北大学理学部地圏環境科学科（2008年卒業），東北大学大学院理学研究科地学専攻（2010年修了），筑波大学大学院生命環境科学研究科地球進化科学専攻（2016年修了），【職歴】国立大学法人筑波大学アイソトープ環境動態研究センター特任助教（2016年４月～2020年３月），国立研究開発法人産業技術総合研究所活断層・火山研究部門日本学術振興会特別研究員PD（2020年４月～2022年９月），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部プロジェクト研究員（2022年10月～現在）【学位】博士（理学）（筑波大学）（2016年取得）【専門分野】堆積学，地質学，地球化学　【主な研究テーマ】年輪年代法による古津波年代の誤差０年決定，日本海溝沿いの歴史・先史津波の高精度浸水推定，南海トラフ沿岸域の広域津波履歴推定による連動型巨大地震の津波リスク評価，津波堆積物の地球化学的特徴の基礎データ整備　【所属学会】日本地球惑星科学連合，日本堆積学会，日本地質学会，日本第四紀学会，日本地球化学会，地球環境史学会，American Geophysical Union　【研究目的・研究状況】主に堆積物試料を用いて地球化学や堆積学などの観点から地球表層の動態や変遷史に関する研究を行っている．特に，低頻度巨大津波のリスク評価を行うべく，津波堆積物を用いた過去の津波規模・履歴復元研究に精力的に取り組んでいる．

●主要業績

1．【論文】Shinozaki T., Sawai Y., Ikehara M., Matsumoto D., Shimada Y., Tanigawa K., Tamura T. (2022) Identifying tsunami traces beyond sandy tsunami deposits using terrigenous biomarkers: a case study of the 2011 Tohoku-oki tsunami in a coastal pine forest, northern Japan. *Progress in Earth and Planetary Science* 9, 29, doi: 10.1186/s40645-022-00491-6.（査読あり）

2．【論文】Shinozaki T.（2021）Geochemical approaches in tsunami research: current knowledge and challenges. *Geoscience Letters* 8, 6, doi: 10.1186/s40562-021-00177-9.（査読あり）
3．【論文】Shinozaki T., Sawai Y., Ito K., Hara J., Matsumoto D., Tanigawa K., Pilarczyk J.E.（2020）Recent and historical tsunami deposits from Lake Tokotan, eastern Hokkaido, Japan, inferred from nondestructive, grain size, and radioactive cesium analyses. *Natural Hazards* 103（1）, 713–730, doi: 10.1007/s11069-020-04007-7.（査読あり）
4．【論文】Shinozaki T., Goto K., Fujino S., Sugawara D., Chiba T.（2015）Erosion of paleo-tsunami record by the 2011 Tohoku-oki tsunami along the southern Sendai Plain. *Marine Geology* 369, 127–136, doi: 10.1016/j.margeo.2015.08.009.（査読あり）
5．【論文】Shinozaki T., Fujino S., Ikehara M., Sawai Y., Tamura T., Goto K., Sugawara D., Abe T.（2015）Marine biomarkers deposited on coastal land by the 2011 Tohoku-oki tsunami. *Natural Hazards* 77（1）, 445–460, doi: 10.1007/s11069-015-1598-9.（査読あり）

●2022年度の研究教育活動

一　研究業績

2　論文

Tanigawa K., Sawai Y., Bobrowsky P., Huntley D., Goff J., Shinozaki T., Ito K.（2022）A new chronology for sand sheets before the 1700 CE Cascadia Earthquake from Vancouver Island, Canada. Scientific Reports 12, 12527, doi: 10.1038/s41598-022-16842-8.（査読あり）

Shinozaki T., Sawai Y., Ikehara M., Matsumoto D., Shimada Y., Tanigawa K., Tamura T.（2022）Identifying tsunami traces beyond sandy tsunami deposits using terrigenous biomarkers: a case study of the 2011 Tohoku-oki tsunami in a coastal pine forest, northern Japan. Progress in Earth and Planetary Science 9, 29, doi: 10.1186/s40645-022-00491-6.（査読あり）

5　学会・外部研究会発表

篠崎鉄哉，津波地球化学：現状と課題．日本地球惑星科学連合2022年大会，千葉，2022年５月．口頭．招待講演．

Tanigawa K., Sawai Y., Bobrowsky P., Huntley D., Goff J., Shinozaki T., Ito K., New chronology for event deposits before the 1700 Cascadia earthquake from the southwest coast of Vancouver Island, Canada. 日本地球惑星科学連合2022年大会，千葉，2022年５月．口頭．

石澤尭史，後藤和久，山口直文，伴野雅之，篠崎鉄哉，佐藤海生，茨城県波崎海岸の堆積物中におけるマイクロプラスチックの空間分布に関する予察的検討．日本地球惑星科学連合2022年大会，千葉，2022年５月．口頭．

諏訪有彩，藤野滋弘，松本　弾，篠崎鉄哉，三重県鳥羽市の津波堆積物調査：南海トラフ沿岸地域における津波浸水履歴の復元．日本地球惑星科学連合2022年大会，千葉，2022年５月．口頭．

Pilarczyk J., Sawai Y., Namegaya Y., Tamura T., Tanigawa K., Matsumoto D., Shinozaki T., Fujiwara O., Shishikura M., Shimada Y., Dura T., Horton B., Parnell A., Vane C., An unconsidered source of earthquakes and tsunamis from the Kanto region of Japan. EGU General Assembly 2022, Vienna, Austria & Online, May 2022, oral.

篠崎鉄哉，井口亮，西島美由紀，後藤和久，藤野滋弘，環境DNAを用いた津波堆積物研究に関する予察的検討．日本堆積学会2022年大会，オンライン，2022年４月．

山田昌樹，加藤汰一，成瀬　元，松田有平，篠崎鉄哉，常盤哲也，2019年千曲川洪水による堤防決壊と堆積物形成のプロセス．日本堆積学会2022年大会，オンライン，2022年４月．

杉原　和，山田昌樹，篠崎鉄哉，宮崎県延岡市島浦島の沿岸湿地におけるイベント層の成因と年代測定．日本堆積学会2022年大会，オンライン，2022年４月．

二　主な研究教育活動

1　主な共同研究等参加状況

③　機構（基幹研究プロジェクト）

人間文化研究機構光領域連携型基幹研究プロジェクト「人新世に至る，モノを通した自然と人間の相互作用に関する研究」（研究代表者：陀安一郎）（2022～2027年度）

2　外部資金による研究

科学研究費補助金（特別研究員奨励費）「地球化学分析が可能にする津波浸水域の高精度復元」（2020～2022年

度）研究代表者
東京大学地震研究所（共同利用・特定共同研究（B））「地質記録と数値シミュレーションに基づく南海トラフ～琉球海溝の長期間の津波発生履歴と巨大地震破壊域の解明」（研究代表者：山田昌樹，2021～2023年度）研究分担者

四　活動報告

1　受賞歴
篠崎鉄哉，2022年日本第四紀学会若手学術賞，日本第四紀学会，2022年８月.

島津　美子　Shimadzu Yoshiko　准教授（2018.4～）

【学歴】金沢大学理学部卒（1999），東京藝術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻（システム保存学）修士課程修了（2001）
【職歴】東京文化財研究所修復技術部研究補佐員（2001），オランダ文化遺産研究所（Instituut Collectie Nederland）プロジェクト研究員（2004），独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所特別研究員（2008），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部助教（2013.7），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部准教授（2018）
【最終学位】Ph.D.（アムステルダム大学）（2015年２月取得）
【専門分野】保存科学【主な研究テーマ】歴史資料の彩色技法材料の調査研究【所属学会】文化財保存修復学会，国際文化財保存学会（IIC），国際博物館会議保存国際委員会（ICOM-CC）【研究目的・研究状況・メールアドレス】彩色材料およびその製造方法，彩色技法等を明らかにし，資料の帰属する時代や地域における技術レベルや素材の流通などを探る。現在は，国内の近世から近代にかけての彩色材料についての調査分析を実施中。

●主要業績

1．【論文】「近世近代における群青と洋紅」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第230集，pp.215-244, 2021年12月）
2．【論文】島津美子・岡田靖「近世･近代の木彫仏像に施された彩色の技法と色材」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第230集，pp.135-167, 2021年12月）
3．【論文】研究ノート「幕末明治期の錦絵に用いられた色材調査―赤色，黄色，緑色について―」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第200集，pp.83-96, 2016年１月）
4．【調査報告】「伊能図にみられる彩色材料と技法」（『〈稿本・大名家本〉伊能図研究図録』（平井松午・島津美子編），創元社，pp.323-330, 2022年３月）
5．【報告書】Chemical and optical aspects of appearance changes in oil paintings from the 19th and early 20th century，Molart Reports 15. University of Amsterdam，02/2015.

●2022年度の研究教育活動

一 研究業績

3　調査・発掘調査報告書，自治体史・史料集，辞典など
島津美子，ジャン=ジャック・ドロネー，櫻庭美咲「漆塗り装飾染付磁器に見られる彩色装飾の材質分析と製作技法の考察」，『アウグスト強王コレクション』（櫻庭美咲編），pp.179-189，2023年３月
5　学会・外部研究会発表
島津美子，村岡ゆかり「伊能図の種類と彩色材料の関係性について」，熊本県立劇場, 文化財保存修復学会第44回大会要旨集, p.128-129, 2022年６月18日
「有機質赤色色料の原材料と使用例」，2022 中国伝統色彩学術年会，オンライン，主催：天津美術学院，中国芸術研究院美術研究所，2022年11月19日
「山形県に伝わる江戸後期から明治初期に造られた仏像彩色の色料について」，「文化遺産の保存・活用に関する研究」専門家会議『江戸～明治時代の色料の種類と変遷』, 東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター，2023年２月25日

二　主な研究教育活動

1　主な共同研究等参加状況
①　歴博
基盤研究「日本植物文化史の分野横断的な検証と展示手法の再構築」（研究代表者：青木隆浩），共同研究者，2020年度～2022年度
基盤研究「秦漢時期の文字使用をめぐる学際的研究」（研究代表者：下田誠），共同研究者，2021年度～2023年度
基盤研究「高度情報化による古代中世の寺院および荘園の総合的研究 ―額田寺伽藍並条里図と栄山寺寺領文書を中心に―」（研究代表者：下村周太郎），共同研究者，2021年度～2023年度
共同利用型「博物館収蔵庫および周辺空間の温熱環境と空調制御に関する調査」（研究代表者：伊庭千恵美），館内担当者，2022年度
2　外部資金による研究
科研基盤（C）19世紀の日本における絵具素材の移り変わり，研究代表者，2021年度～2023年度
科研基盤（B）自然科学的調査手法を用いた黄檗様彫刻の国内受容と変容に関する総合的研究（研究代表者：長谷洋一（関西大学）），研究分担者，2019年度～2021年度（2020年度繰越, 2022年度まで）
4　主な展示・資料活動（展示・資料・ＤＢなど）
企画展示「いにしえが，好きっ！」展示プロジェクト委員
5　教育
東京藝術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻保存修復彫刻研究室　非常勤講師（「保存科学演習」担当）

三　社会活動等
1　館外における各種委員
文化財保存修復学会理事
2　講演・カルチャーセンターなど
「金頭銀茎簪の自然科学分析」, シンポジウム『宮古島と琉球帝国』, 主催：宮古島教育委員会, JA宮古大ホール, 2022年11月12日

四　活動報告
3　研究・調査プロジェクト報告
３年ぶりに対面で開催された文化財保存修復学会において，近代の彩色に関する資料調査の結果をポスターにて発表するとともに，錦絵など近世近代の彩色材料に関する研究発表者との意見交換を行った。

鈴木 卓治　SUZUKI Takuzi 教授（2017.1～）

併任：総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻教授（2017～），生年：1965

【学歴】電気通信大学電気通信学部情報数理工学科（1988年卒業），電気通信大学大学院電気通信学研究科情報工学専攻博士後期課程（1994年単位取得退学），千葉大学大学院融合科学研究科情報科学専攻博士後期課程（2015年修了）【職歴】国立歴史民俗博物館情報資料研究部助手（1994），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部助手（2004），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部助教（2007），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部准教授（2007），国立大学法人総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻准教授併任（2016），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部教授（2017），国立大学法人総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻教授併任（2017），博物館資源センター長併任（2019～2020）
【学位】博士（学術）（千葉大学）（2015年取得）【専門分野】ソフトウェア学, 色彩と画像の数理【主な研究テーマ】博物館における研究・展示・広報を支援するシステムの研究，とくにネットワーク，データベース，色彩と画像の情報処理【所属学会】情報処理学会，日本ソフトウェア科学会，日本色彩学会，情報知識学会

●主要業績
1．【論文】鈴木卓治・安達文夫・大久保純一・小林光夫：「錦絵資料の測色画像データベースの構築と色彩分析の試み」,『人文科学とコンピュータシンポジウム（じんもんこん2004）論文集』, IPSJ Symposium Series,

Vol.2004，No.17，pp.75-82（2004―12）.（平成17年度情報処理学会山下記念研究賞（人文科学とコンピュータ研究会推薦）受賞対象論文）

2．【論文】Takuzi Suzuki, Misaki Kan'no, Noriko Yata, Yoshitsugu Manabe：Detection of transition of red colours on Nishiki-e printings from colour-corrected digital images, Journal of the International Color Association, Vol.14，pp.57-66（2015-04-27）

3．【論文】鈴木卓治：「蒔絵万年筆資料のマルチアングル画像撮影ならびに展開図作成のための技術開発」，『国立歴史民俗博物館研究報告』206号，pp.39-59,2017年３月

4．【展示】歴博常設展示の第３，第６，第４室各室のリニューアルならびに数多くの企画展示における情報端末の設置ならびに情報コンテンツの提供に関する業務に従事

5．【展示】2016年度企画展示「デジタルで楽しむ歴史資料」，国立歴史民俗博物館，展示プロジェクト代表，2017年３月14日～５月７日

●2022年度の研究教育活動

一 研究業績

4　展示図録・資料図録・映像・DB・デジタル・コンテンツ開発

鈴木卓治，田中大喜，村木次郎：音声ガイド，企画展示「中世武士団」，国立歴史民俗博物館，2022年３月15日～５月８日

5　学会・外部研究会発表

「可搬型Web会議端末『どこでも展示解説』の開発」「第50回 画像電子学会年次大会」ハイブリッド（ゆめホール知床／オンライン），2022年８月31日

二 主な研究教育活動

4　主な展示・資料活動

［総合展示］第１室，第３室，第４室，第５・６室各展示プロジェクト委員（情報端末）

企画展示「歴博色尽くし」（2024年春開催）展示プロジェクト代表

5　教育（総研大シンポ，大学院セミナー担当，大学非常勤講師，学位審査の主査・副査・委員，博物館活動，教育プログラムなど）

鈴木卓治：nihuBridgeについて，メディア懇談会「『nihuBridge』公開のご案内」，人間文化研究機構，2022年６月９日

鈴木卓治：nihuBridge APIの利用事例，「DH プラットフォームnihuBridge の研究活用の可能性 ～ API 機能を一例として（情報処理学会人文科学とコンピュータシンポジウム（じんもんこん2022）プレイベント１（第１回人間文化研究機構DH研究会；パネラー：北岡タマ子，後藤真，関野樹，鈴木卓治，宮川創，菊池信彦）」オンライン，2022年12月９日

三 社会活動等

1　館外における各種委員

人間文化研究機構人間文化研究創発センター企画調整会議デジタル・ヒューマニティーズ（ＤＨ）部会委員（総合情報発信センター情報部門会議に代わって新設，2023年７月より）

同部会技術検討チームメンバー（高度連携情報技術委員会に代わって新設，2023年７月より）

人間文化研究機構情報セキュリティ委員会委員（2016年４月より継続中）一般社団法人日本色彩学会代議員（関東支部選出, 2021年５月より継続中）一般社団法人日本色彩学会画像色彩研究会主査（2014年４月より継続中）一般社団法人日本色彩学会学会誌広報委員会委員（2016年７月より継続中）

四 活動報告

3　研究・調査プロジェクト報告

博物館資料の撮影およびオンライン展示の技術に関する研究:資料固定・回転用治具の筐体の制作に必要となる工作器具および制御基板の調整に必要となる汎用電子計測機器を導入した.

4　その他

歴博と研究者・来館者をつなぐさまざまなデジタル技術について，実際に動いて利用に供するものを生み出す努力を続けたい。

関沢まゆみ　SEKIZAWA Mayumi　副館長・研究総主幹（2021～），教授（2011～）

併任：総合研究大学院大学日本歴史研究専攻教授（2011～），生年：1964

【学歴】東京女子大学文理学部史学科（1986年卒業），筑波大学大学院地域研究研究科日本文化研究コース修士課程（1988年修了）
【職歴】帝京大学文学部非常勤講師（1993），早稲田大学オープンカレッジ非常勤講師（1993），東京家政学院大学人文学部非常勤講師（1994），東京学芸大学教育学部非常勤講師（1994），筑波大学第二学群非常勤講師（1996），国立歴史民俗博物館民俗研究部助手（1998），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部助教授（2004），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻助教授併任（2005），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部准教授（2007），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻准教授併任（2007），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部教授（2011），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻教授併任（2011），研究推進センター長併任（2013～2014,2017～2019），副館長併任（2021～2023）
【学位】文学博士（筑波大学）（2001年取得）【専門分野】民俗学【主な研究テーマ】社会・信仰・儀礼に関する民俗学的研究，高度経済成長と民俗の変化【所属学会】日本民俗学会，日本文化人類学会，比較家族史学会【研究目的・研究状況】高度経済成長と民俗の変化に関する共同研究による，資料情報の蓄積と論文作成，また戦後民俗学でやや等閑視されてきた比較研究法の有効性を再確認する実践例を示す試みなどが中心的課題となっている。

●主要業績

1．【単著】『宮座と老人の民俗』266頁，吉川弘文館 2001年２月
2．【単著】『隠居と定年―老いの民俗学的考察―』196頁，臨川書店 2003年３月
3．【単著】『宮座と墓制の歴史民俗』305頁，吉川弘文館 2005年２月
4．【単著】『現代「女の一生」―人生儀礼から読み解く―』244頁，NHK出版 2008年６月
5．【単編著】『民俗学が読み解く葬儀と墓の変化』（国立歴史民俗博物館研究叢書２），160頁，朝倉書店，2017年３月

●2022年度の研究教育活動

一　研究業績

２　論文
「田植えと女性―民俗学的視点から―」『国立歴史民俗博物館研究報告』235，国立歴史民俗博物館，pp.501-511，2022年９月30日（査読有）

５　学会・外部研究会発表
「民俗の変遷と伝承―疱瘡習俗：COVID-19禍のなかで―」現代民俗学会第64回研究会報告「民俗学の論点2022」，2022年10月15日，Zoom

７　その他
「近代の100年フード―明治・大正に生み出された食文化―」『月刊石垣』，pp37，2022年７月10日
「旧正月は大豆で年取り―栃木県の伝統のしもつかれ―」『月刊石垣』，pp49，2022年11月10日
書誌紹介「新谷尚紀『遠野物語と柳田國男―日本人のルーツをさぐる―』」『日本民俗学』313，pp108，2023年２月28日
「民俗の変遷と伝承―疱瘡習俗：COVID-19禍のなかで―」（第64回研究会報告「民俗学の論点2022」）『現代民俗学研究』15，pp71，2023年３月31日

二　主な研究教育活動

１　主な共同研究等参加状況
①　歴博
基幹研究「水をめぐる生活世界―実用と信仰の視点から―」代表，2020～2022年度

４　主な展示・資料活動
総合展示第５室・第６室リニューアル委員
総合展示第６室「高度経済成長と生活の変貌」担当
企画展示「歴博色尽くし」展示プロジェクト委員
５ 教育
國學院大学大学院文学研究科兼任講師（民俗学特論）
お茶の水女子大学生活科学部非常勤講師（文化情報論）

三　社会活動等
１　館外における各種委員
栃木県重要文化財保護審議委員，新宿区文化財保護審議会委員，川崎市文化財審議会委員，千葉県博物館協議会委員，昭和館運営専門委員会委員，文化審議会専門委員（文化財分科会），文化財保存活用専門委員会専門委員，江戸東京博物館資料収集委員会委員，日本台湾交流協会日本研究支援委員会委員，2027年国際園芸博覧会政府出展懇談会委員，令和４年度食文化機運醸成事業有識者委員会など
２　講演・カルチャーセンターなど
「赤色の意味―民俗学の視点から―」第27回赤十字健康管理事業研究会特別講演，成田赤十字病院，2022年８月26日
３　マスコミ
「暦や季節のしきたりから学ぶ，日本ならではの開運の知恵」『クロワッサン』1074，pp.12～15, 2022年７月25日（取材協力）
「知られざるお盆ご当地事情―行事の地域性を調べ25年，先祖の迎え方さまざま―」『日本経済新聞』（文化），2022年８月１日
「お盆」Alex「MUSEION」2022年８月11日（ラジオ出演）
「「ナゾノクサ」や花にかかったうどん・・・お盆のお供えは「謎の行事」？」『朝日新聞withnews』，2022年９月27日（取材協力）
「きっかけ　私のレトロブーム」『産経新聞』2023年２月28日（取材協力）
「新日本風土記　はじまりの奈良」BS NHK，2023年３月17日（取材協力），ほか

四　活動報告
３　研究・調査プロジェクト報告
高度経済成長期を経て食生活がどのように変化してきたのかについて，論文をまとめた（『研究報告』2023年４月刊行予定）。

高科　真紀　TAKASHINA Maki　特任助教（2020.7～）

【学歴】東京学芸大学教育学部（2004-2008），東京学芸大学大学院教育学研究科修士課程（2008-2010），学習院大学大学院人文科学研究科博士後期課程（2020年６月満期取得退学）
【職歴】国文学研究資料館機関研究員（2013-2015），国文学研究資料館プロジェクト研究員（2016-2017），学習院大学科研費研究員（2017），東京学芸大学非常勤講師（2017），日本学術振興会特別研究員DC２（2018-2019），人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター研究員（2020.7-2022.3），人間文化研究機構人間文化研究創発センター研究員（2022.8-），国立歴史民俗博物館研究部特任助教（2020.7-）
【学位】修士（教育学）【専門分野】資料保存論，アーカイブズ学【主な研究テーマ】資料の保存環境管理，民間所在資料の保全と活用【所属学会】文化財保存修復学会，日本アーカイブズ学会，デジタルアーカイブ学会，アート・ドキュメンテーション学会，日本民俗学会

●主要業績
１．【論文】「写真メディアを軸とした沖縄祭祀アーカイブズ：写真家・比嘉康雄資料を事例に」『アート・ドキュメンテーション研究』29, pp.3-16, アート・ドキュメンテーション学会，2021年５月
２．【著書（分担執筆）】“Preservation and Conservation of Japanese Archival Documents in the Vatican Library”,

Mutsumi Aoki・Núñez Gaitán, Ángela編,（担当：分担執筆，範囲：pp.111-131：Introducing the Newest Salvage and Conservation Techniques Used after the 2011 Tohoku Earthquake and Tsunami），2019年12月，バチカン図書館

3．【論文】「収蔵庫を対象としたアーカイブズの照明管理―ISO・アメリカ・イギリス・日本の事例」，2019年２月，『GCAS Report 』vol.8, pp.35-55,学習院大学大学院人文科学研究科アーカイブズ学専攻, 2019年２月

4．【論文】「和書の展示技法と保存環境制御の実践―「和書のさまざま」展を素材として―」『国文学研究資料館紀要 文学研究篇』第41号，pp.111-134, 国文学研究資料館, 2015年３月

5．【研究発表】“Case verification of the LED illumination at the museum in Japan”，2018年，LED Museum Lighting and Conservation Science 2018（LMLCS2018），Gyeongju Hwabaek International Convention Center（大韓民国）

●2022年度の研究教育活動

一 研究業績

1．（分担執筆）「第11章 アーキビストの研究活動と社会実践」『アーキビストとしてはたらく: 記録が人と社会をつなぐ』, 山川出版社, 2022年４月１日（ISBN: 4634591251）

5．「写真がつなぐ地域の記憶:戦後沖縄写真アーカイブズの公開と活用に向けて」,広領域連携型基幹研究プロジェクト・キックオフシンポジウム「横断的・融合的地域文化研究の領域展開 ―新たな社会の創発を目指して―」, フクラシア八重洲（オンライン併用）, 2023年３月16日

7．「島の宝･島の人々　阿波根昌鴻資料展に寄せて（上）記憶の拠り所となる写真」, 琉球新報2022年10月25日朝刊, 琉球新報社, 2022年10月

二　主な研究教育活動

1　主な共同研究等参加状況

③　機構

・広領域連携型基幹研究プロジェクト「横断的･融合的地域文化研究の領域展開:新たな社会の創発を目指して」, 主導機関：国立歴史民俗博物館・国立民族学博物館,「フィールドサイエンスの再統合と地域文化の創発（国立歴史民俗博物館）」,「地域文化の効果的な活用モデルの構築（国立民族学博物館）」,「人口減少地域におけるアーカイブズと歴史文化の再構築（国文学研究資料館）」, 2022年度～

・機関拠点型基幹研究プロジェクト「日本歴史文化知の構築と歴史文化オープンサイエンス研究」,国立歴史民俗博物館, 2022年度～

・共創促進研究日本関連在外資料調査研究「日本・バチカン関係アーカイブズの情報基盤構築に関する研究」, 国文学研究資料館, 2022年度～

・国文学研究資料館基幹研究「アーカイブズ社会の基盤創発に関する基礎的研究」, 2022年度～

2　外部資金による研究

「民間所在アーカイブズにおける写真の公開･活用体制の構築―女性･子どもを記録した写真家を対象に―」（研究代表者：阿久津美紀），DNP文化振興財団グラフィック文化に関する学術研究助成（2019年11月～2022年12月），共同研究者

「〈沖縄経験〉を軸とした戦後沖縄写真に関する表象文化の発展的研究」（研究代表者：小屋敷琢己）日本学術振興会 科学研究費助成事業 基盤研究（C）（2020年４月～2024年３月），研究分担者

三　社会活動等

1　館外における各種委員

日本アーカイブズ学会 委員（研究部会）

2 講演会・シンポジウムなど

「島の宝・阿波根昌鴻写真展」シンポジウム・パネリスト, 佐喜眞美術館, 2022年11月３日

高田　貫太　TAKATA Kanta　教授（2021.1～）

併任：総合研究大学院大学日本歴史研究専攻教授（2021.1～）生年：1975

【学歴】岡山大学文学部史学科（1997年卒業），岡山大学大学院文学研究科史学専攻修士課程（1999年修了），大韓民国慶北大学校大学院考古人類学科博士課程（2004年修了）
【職歴】大韓民国慶北大学校考古人類学科非常勤講師（2003），岡山大学埋蔵文化財センター助手（2004），奈良文化財研究所都城発掘調査部研究員（2006），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部准教授（2010），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻准教授併任（2011），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部教授（2021.1），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻教授併任（2021.1）
【学位】文学博士（大韓民国慶北大学）（2005年取得）【専門分野】考古学【主な研究テーマ】古墳時代における日本列島と朝鮮半島の交流史【所属学会】韓国嶺南考古学会，韓国考古学会【研究目的・研究状況】近年は，朝鮮半島栄山江流域と倭の交流史について日朝双方の視点からその特色を浮き彫りにすることに努めている。

●主要業績

1．【単著】『古墳時代の日朝関係』吉川弘文館，363頁，2014年３月
2．【単著】『海の向こうから見た倭国』講談社，304頁，2017年２月
3．【単著】『「異形」の古墳　朝鮮半島の前方後円墳』KADOKAWA，286頁，2019年９月
4．【単著】『アクセサリーの考古学　倭と古代朝鮮の交渉史』吉川弘文館，273頁，2021年５月１日
5．【論文「】古墳出土龍文透彫製品の分類と編年（」『国立歴史民俗博物館研究報告』第173集, pp.121-141,2013年３月）（査読付き）

●2022年度の研究教育活動

一 研究業績

2　論文
「海を越えた百済の耳飾り―耳飾りから見た倭と百済の交渉史―」『百済の耳飾り　特別展示図録』，韓国国立公州博物館，pp.150-169,2022年12月15日　（原文韓国語）
「古墳時代の日朝交渉における海の道」『「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群特別研究事業・総括検討会』，「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会，pp.61-76，2022年12月17日

4　展示図録・資料図録・映像・ＤＢ・デジタル・コンテンツ開発
高田貫太・上野祥史・松木武彦・仁藤敦史（国立歴史民俗博物館編）『国際企画展示　加耶　古代東アジアを生きた，ある王国の歴史』，国立歴史民俗博物館，74頁，2022年10月４日

5　学会・外部研究会発表
「古墳時代の日朝交渉における海の道」世界遺産「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群特別研究事業成果報告会「沖ノ島研究の新地平―古代東アジアの航海・交流・信仰―」，2023年３月12日

二　主な研究教育活動

1　主な共同研究等参加状況
①　歴博
基盤研究「先史から近代における日朝交流史像の再構築」（2022～2024年度）共同研究員

2　外部資金による研究（科学研究費などの外部資金，各種補助金による研究，企業・自体体による研究）
基盤研究（B）「航路・寄港地から見た倭と古代朝鮮の交渉史に関する日韓共同研究」（2022～2025年度）
研究代表者　高田　貫太

3　国際交流事業
「先史～中世における日韓葬送儀礼の比較研究Ⅲ」（研究代表者：高田貫太，相手機関：韓国国立中央博物館，2022～2024年度）※2022年４月に学術交流協定を延長

4　主な展示・資料活動
総合展示第１室展示プロジェクト委員
国際企画展示『加耶―東アジアを生きた，ある王国の歴史―』展示プロジェクト委員代表
企画展示『歴博色尽くし』展示プロジェクト委員

５　教育
総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻において，学位審査の委員を務めた。

三　社会活動等

１　館外における各種委員
韓国嶺南考古学会誌『嶺南考古学』編集委員韓国湖南考古学会誌『湖南考古学』編集委員
韓国中央文化財研究院発行専門雑誌『中央考古』編集委員
韓国国立中央博物館発行専門雑誌『考古雑誌』編集委員
「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群特別研究事業 委託研究者 ２ 講演・カルチャーセンターなど
「海を越えた百済の耳飾り―耳飾りから見た倭と百済の交渉史―」韓国国立公州博物館特別展示連携特別講座 2023年２月３日

四　活動報告

３　研究・調査プロジェクト報告
国際企画展示「加耶―古代東アジアを生きた，ある王国の歴史―」の開催に向けて，展示や図録の内容の充実をはかった。その結果, 2022年 10月４日（火）から12月11日（日）まで無事に展示を開催することができた。

田中　大喜　TANAKA　Hiroki，准教授（2014.4～）

併任：総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻准教授（2014.10～），生年：1972

【学歴】学習院大学文学部史学科（1996年３月卒業), 学習院大学大学院人文科学研究科史学専攻博士前期課程（1999年３月修了），学習院大学大学院人文科学研究科史学専攻博士後期課程（2005年３月修了）【職歴】学習院大学文学部助手（2005年４月～2006年３月），東京大学史料編纂所研究機関研究員（2005年４月～2006年３月），駒場東邦中学校・高等学校教諭（2006年４月～2014年３月），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部准教授（2014年４月～），総合研究大学院大学先端学術院日本歴史研究コース准教授併任（2014年10月～）【学位】博士（史学, 学習院大学）（2005年取得）【専門分野】日本中世史【主な研究テーマ】中世武士団･武家政権論，中世地域社会論【所属学会】歴史学研究会，日本史研究会，日本歴史学会，地方史研究協議会，鎌倉遺文研究会，学習院史学会【研究目的・研究状況】武士団・武家政権の研究を通して，およそ700年間にわたり武士の支配が継続した歴史を持つ日本社会の特質を追究することを目的とする。2019年度より，東国武士団の西遷・北遷に関する共同研究を実施している。【メールアドレス】daiki-t@rekihaku.ac.jp

●主要業績

１.【単著】『中世武士団構造の研究』376頁，校倉書房，2011年８月
２.【単著】『新田一族の中世 「武家の棟梁」への道』230頁，吉川弘文館，2015年９月
３.【単著】『対決の東国史３　足利氏と新田氏』226頁，吉川弘文館，2021年12月
４.【編著】田中大喜『中世武家領主の世界　現地と文献・モノから探る』352頁，勉誠出版，2021年８月
５.【共編】田中大喜・荒木和憲・村木二郎『企画展示 中世武士団 地域に生きた武家の領主』184頁，国立歴史民俗博物館，2022年３月

●2022年度の研究教育活動

一 研究業績

２　論文
「南北朝～室町期武家の兄弟惣領」「日本歴史』896号，pp.34-40，日本歴史学会，2023年１月１日（査読無）
「鎌倉時代における地頭の荘園支配」『歴史地理教育』950号, pp.12-17, 歴史教育者評議会, 2023年２月１日（査読無）

５　学会・外部研究会発表
「河口域の中世港湾―石見益田を事例として―」，中世学研究会第４回シンポジウム「中世・港の景観」，國學院大學渋谷キャンパス，2022年６月26日
「松吉里永子報告に寄せて―文献史料にみる鎌倉の御家人屋敷―」，日本貿易陶磁研究会第42回研究集会，立教大学池袋キャンパス，2022年９月17日

「西遷・北遷武家領主と鎌倉期東国武家社会」，中世史研究会50周年記念大会シンポジウム「列島東西の社会構造とその変質」，名古屋大学東山キャンパス，2022年９月24日

７　その他

監修『大河ドラマ鎌倉殿の13人　北条義時，立つ！』，pp.33-95，宝島社，2022年７月27日

「『兼仲卿暦記』自正安二年正月二十二日至三月二十九日」『日本歴史』894号，日本歴史学会，口絵，2022年11月１日

監修「鎌倉時代にかつやくした武士」『少年写真新聞』1277号，少年写真新聞社，2022年11月８日

「鎌倉時代の武士の生活」『小学図書館ニュース』1277号付録，少年写真新聞社，p.1，2022年11月８日

「国立歴史民俗博物館の愉悦⑤　『兼仲卿暦記』『兼仲卿記』」『文部科学省教育通信』543号，文部科学省，p.2，2022年11月14日

監修『講談社の動く図鑑MOVE　日本の歴史』，pp.74-151，小学館，2022年11月29日

合評「ふみの森もてぎ監修・高橋修編『戦う茂木一族』の成果と課題」『常総中世史研究』11号，茨城大学中世史研究会，pp.86-88，2023年３月31日

二　主な研究教育活動

１　主な共同研究等参加状況

①　歴博

「『広橋家旧蔵記録文書典籍類』を素材とする中世公家の家蔵史料群に関する研究」（代表：家永遵嗣）共同研究員（副代表），2020～2022年度

「中世日本の地域社会における都市の存立と機能の研究」研究代表者，2022～2024年度

２　外部資金による研究

科学研究費補助金基盤研究（A）「中世東アジア海域の地域社会と琉球帝国―集落・信仰・技術―」（代表：村木二郎）研究分担者，2022～2026年度

科学研究費補助金基盤研究（B）「西遷・北遷東国武士の社会的権力化」研究代表者，2019～2022年度

科学研究費補助金基盤研究（C）「中世東国武家本領の構造的特質に関する復元的研究」（代表：高橋修）研究分担者，2021～2024年度

４　主な展示・資料活動

2021年度企画展示「中世武士団―地域に生きた武家の領主―」展示プロジェクト委員（展示代表）

2023年度企画展示「陰陽師とは何者か―うらない，まじない，こよみをつくる―」（展示代表：小池淳一）展示プロジェクト委員

総合展示第２室リニューアル委員会委員（副代表）

５　教育

國學院大学文学部兼任講師，「史料講読Ⅰ・Ⅱ」担当

明治大学文学部兼任講師，「日本史料学Ⅰ」担当

東京都立大学人文社会学部非常勤講師，「日本史学特殊講義Ⅰ」担当

東邦大学理学部非常勤講師，「総合演習Ⅳ」担当

三　社会活動等

２　講演・カルチャーセンターなど

「石井進『中世武士団』と企画展示「中世武士団」」，第436回歴博講演会，2022年４月２日

「中世の武家領主の世界」早稲田大学エクステンションセンター八丁堀校，2022年４月13日・４月27日・５月11日・５月18日・６月１日・６月８日

「本拠からみる中世武士団の地域支配」，第114回歴博フォーラム「中世武士団の世界」，2022年４月16日

「武士はなぜ領主になれたのか？」，企画展示「中世武士団」オンラインイベント，2022年４月30日

「論文を書くこと，研究をすること」，駒場東邦中学校講演会，2022年５月30日

「肥前千葉氏の本拠を探る」，千葉氏を語る会「九州千葉氏の動向」記念講演，2022年６月５日

「中世武家の一揆」，京都国立博物館2022年夏期講座「動乱の時代―14世紀」，2022年８月５日

「鎌倉・南北朝期の武家社会における「源氏嫡流」意識」，歴博友の会歴史学講座，2022年９月28日

「武蔵武士団と鎌倉幕府」早稲田大学エクステンションセンター八丁堀校，2022年10月12日・10月19日・11月２日・11月16日・12月７日

「中世の古文書を読む」朝日カルチャーセンター千葉，通年
「中世の古文書を読む」産経学園ユーカリが丘校，通年

3　マスコミ
「スペシャル正月料理「一年の計は“美味”にあり」」，NHK Eテレ「先人たちの底力 知恵泉」，2023年１月１日
「田中大喜の新書速報」，朝日新聞（朝刊），2022年４月30日・６月４日・７月９日・８月13日・９月17日・10月22日・11月26日・2023年１月14日・２月18日・３月25日

4　社会連携
③　講演会・シンポジウム
「武蔵武士団と鎌倉幕府」，豊洲文化センター講座，2022年５月11日・６月１日・６月29日・７月13日・９月７日
「建武政権下の足利尊氏と新田義貞」，新田荘歴史資料館講演会，2022年11月27日
「新田義貞の挙兵と武蔵府中」，国分寺市立もとまち公民館歴史講座，2023年２月２日
「新田氏と足利氏の覇権抗争」，国分寺市立もとまち公民館歴史講座，2023年２月９日
「沼田小早川氏の本拠を探る」，シンポジウム「中世沼田荘を解き明かす―現地調査中間報告―」，三原市本郷生涯学習センター，2023年３月19日

四　活動報告

2　特別委員会委員など館長からの委嘱を受けたもの
テニュアトラック助教選考委員会委員長

3　研究・調査プロジェクト報告
胎内市個人所蔵の近世絵図の調査・撮影を行い，越後和田氏の本拠地である越後国奥山荘故地の地理情報を収集した。また，石見国益田荘故地の現地調査を実施し，当該地域における中世武家領主の本拠景観復元に向けた情報を収集した。

4　その他
2019年度から開始した科学研究費補助金基盤研究（B）「西遷・北遷東国武士の社会的権力化」の今年度の研究経過・成果については，「外部資金による研究」の章を参照のこと。

土山　祐之　TSUCHIYAMA Yushi プロジェクト研究員（2022～）

生年：1988年

【学歴】早稲田大学文学部（2011.3）早稲田大学大学院文学研究科人文科学専攻日本史学コース博士前期課程（2013修了）早稲田大学大学院文学研究科人文科学専攻日本史学コース博士後期課程（2019単位取得満期退学）
【職歴】日本学術振興会特別研究員（DC２）（2014）東京大学史料編纂所学術専門職員（2019.4）
国立歴史民俗博物館プロジェクト研究員（2022.4）
【学位】修士【専門分野】日本中世史【主な研究テーマ】環境史，災害史，荘園史，村落史，景観変遷史【所属学会】歴史学研究会，日本史研究会，地方史研究協議会，日本古文書学会，中世史研究会，鎌倉遺文研究会

●主要業績

1【論文】「現地調査にみる新見荘三職―西方・金谷地区の水利と地名」（海老澤衷・酒井紀美・清水克行編『中世の荘園空間と現代　備中国新見荘の水利・地名・たたら』勉誠出版，2014年）
2【論文】「美濃国大井荘の土地利用と水害―都市化地域における現地調査の可能性―」（海老澤衷編『中世荘園村落の環境歴史学―東大寺領美濃国大井荘の研究』吉川弘文館，2018年）
3【論文】「大和国能登・岩井川流域における用水相論の展開―古気候データの活用から―」（『史観』180,2019年）
4【論文】「東寺領山城国上久世荘の自然災害―古気候データと史料の検討から―」（中塚武監修，伊藤啓介・田村憲美・水野章二編『気候変動から読みなおす日本史　第４巻　気候変動と中世社会』臨川書店，2020年）
5【論文】「東寺領摂津国垂水荘における「興行」について」（『地方史研究』416,2022年）

●2022年度の研究教育活動

一　研究業績

２　論文
「法隆寺による春日神木動座・帰座への供奉について―暦応年間を事例として―」『東京大学史料編纂所研究成果報告2022―８　日本中近世寺社〈記録〉論の構築―日本の日記文化の多様性の探究とその研究資源化』（「日本中近世寺社〈記録〉論構築」グループ，2023年）　査読なし
５　学会・外部研究会発表
「現代の水利灌漑から中世景観を探る（シンポジウム『中世沼田荘を解き明かす―現地調査中間報告―』広島県三原市本郷生涯学習センター，2022年）

二　主な研究教育活動
１　主な共同研究等参加状況
①　歴博
基盤研究「中世日本の地域社会における都市の存立と機能の研究」（代表：田中大喜）
２　外部資金による研究
科学研究費研究活動スタート支援「環境的要因と人為的要因との双方向検討による村落景観変遷史の研究」（代表：土山祐之）

三　社会活動等
２　講演・カルチャーセンターなど（友の会も含む）
築地本願寺kokoroアカデミー　講師
鎌倉市教養センター秋季専門講座　講師

中村　耕作　NAKAMURA Kousaku 准教授（2022～）

【学歴】國學院大學文学部史学科（2005年卒業），國學院大學大学院文学研究科史学専攻博士課程前期（2007年修了），國學院大學大学院文学研究科史学専攻博士課程後期（2009年単位取得満期退学）
【職歴】國學院大學文学部助手（2009），國學院大學栃木短期大学日本文化学科専任講師（2014），國學院大學栃木短期大学日本文化学科准教授（2017），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部准教授（2022）
【学位】博士（歴史学）（國學院大學）（2010年取得）【専門分野】日本考古学　【主な研究テーマ】縄文土器･大形石棒･廃屋墓を対象とする儀礼行為･象徴性の研究　【所属学会】日本考古学協会，考古学研究会，縄文時代文化研究会，物質文化研究会，古代学協会，全日本博物館学会，日本音楽教育学会，栃木県考古学会，神奈川県考古学会【研究目的・研究状況】縄文土器の異形化・顔身体化から象徴認識を検討している。

●主要業績
１．【単著】『縄文土器の儀礼利用と象徴操作』アム・プロモーション，総309頁，2013年
２．【編著】『縄文時代異形土器集成図譜Ⅰ』國學院大學考古学研究室，総120頁，2013年
３．【共編著】『平川遺跡出土品整理報告書』國學院大學栃木短期大学，総80頁，2023年
４．【共著】『縄文人の石神～大形石棒にみる祭儀行為～』谷口康浩編，六一書房，総239頁，2010年
５．【共著】『縄文土器を読む: Reading the Jomon Pots』小林達雄編，アム・プロモーション，総174頁，2012年

●2022年度の研究教育活動
一　研究業績
２　論文
「縄文時代晩期の大形石棒集積とその系譜」『縄文時代』第33号，pp.1-30,2022年５月（査読有）
「顔身体土器群の展開過程と身体部位表現」『モノ・構造・社会の考古学―今福利恵博士追悼論文集―』今福利恵博士追悼論文集刊行委員会，pp.139-150,2022年11月
「外縁域にみる釣手土器の地域的展開―顔面付の郷土型と多量出土の桜町型―」『縄文時代における情報伝達と物資流通システムに関する基礎的研究（科研費報告書）』研究代表者：大工原豊，pp.126-155,2023年３月
「顔身体土器」『季刊考古学別冊40』pp.103-106,2023年３月

共著：中村耕作，早川冨美子「縄文土器文様をもとにした音楽づくりの試み（第６報）―中学校３年生総合的な学習の時間における実践と課題―」『國學院大學栃木短期大学紀要』第57号，pp.61-82，2023年３月
共著：今井邦彦，高田祐一，中尾智行，中村耕作，野口淳，樋上昇，堀木真美子，三好清超「日本考古学協会セッションアフタートーク「考古学・埋蔵文化財情報のオープン化のなぜ？誰が？どうやって？」」『デジタル技術による文化財情報の記録と利活用５』奈良文化財研究所，pp.114-144,2023年３月

３　調査・発掘調査報告書，自治体史・史料集，辞典など
編著『平川遺跡出土品整理報告書』國學院大學栃木短期大学，総80頁，2023年３月
共著「栃木県栃木市中根八幡遺跡第８次発掘調査概要報告」『文化財学報』第41集，pp.25-28，2023年３月

４　展示図録・資料図録・映像・DB・デジタル・コンテンツ開発
共著：中村耕作，早川冨美子　〈縄文×音楽〉科研ワークショップ実践成果動画（YouTube）

５　学会・外部研究会発表
共著：中村耕作，早川冨美子「考古学と音楽教育の連携３　―主体的・協働的な学びにむけて―」考古学研究会第68回研究集会，2022年４月23日
共著：中村耕作，早川冨美子「博物館資料をもとにした創作の可能性　―〈縄文土器×音楽〉を通じた「協働的な学び」に向けて―」全日本博物館学会第48回研究大会，2022年６月26日
共著：中村耕作，早川冨美子「博物館資料（縄文土器）を用いた音楽づくりの試み：考古学と音楽教育の連携２」日本音楽教育学会第53回大会，2022年11月

７　その他
「縄文を音楽で表現してみよう」『REKIHAKU』８，pp.60-51,2023年２月

二　主な研究教育活動

１　主な共同研究等参加状況
②　他の機関
國學院大學研究開発推進機構共同研究員
東京外国語大学アジアアフリカ文化研究所共同研究「身体性の人類学」共同研究員
國學院大學栃木短期大学考古学研究会「栃木県大学地域連携活動支援事業：文化交流の交差点「栃木」の起源を縄文時代に探るⅣ」外部指導者

２　外部資金による研究
科研費挑戦的研究（萌芽）「縄文土器文様を奏でる：考古学と音楽教育の協同による新感覚体験学習プログラムの創出」研究代表者（2020年度～2022年度）

４　主な展示・資料活動
資料調査研究プロジェクト「歴博館蔵縄文時代資料図録の作成」代表者（2022年度～2026年度）

５　教育
國學院大學文学部兼任講師「史学基礎演習Ｂ」・「考古学各論Ⅱ」
駒沢大学大学院非常勤講師「考古学特講Ⅳ」

三　社会活動等

１　館外における各種委員
日本考古学協会　社会科歴史教科書等検討委員会委員・事務担当
考古学研究会　全国委員
縄文時代文化研究会　運営編集委員
公益財団法人とちぎ未来づくり財団　評議員
伊奈町文化財保護委員会　委員
調布市国史跡下布田遺跡保存活用整備検討委員会　委員

２　講演・カルチャーセンターなど
「川崎の縄文土器」川崎市民アカデミー「モノの生産から見る川崎の歴史（その２）」の１回，2022年４月９日
「栃木県における環状集落の特徴」NHK文化センター柏教室「縄文研究の最新報告：なぜ環状に集落が作られるのか」の１回，2023年１月21日

４　社会連携
③　講演会・シンポジウム

講演「大形石棒と縄文人の象徴世界」：長野県埋蔵文化財センター掘るしんin佐久穂2022講演会，2022年10月18日
講演「縄文人のくらし―縄文人の道具と象徴操作―」：令和４年度小田原市遺跡講演会「縄文と弥生―考古学から見たくらしと心―」2022年11月20日
講演「縄文時代の身体象徴と環境変化」：神奈川県教育委員会令和４年度かながわの遺跡展「縄文人の環境適応」第３回特別講演，2023年２月19日
講演「文化交流の交差点「栃木」の起源を縄文土器に探る」：國學院大學栃木短期大学考古学研究会「栃木県大学地域連携活動支援事業：文化交流の交差点「栃木」の起源を縄文時代に探るⅣ」中根八幡遺跡関連講演会，2023年１月22日

四　活動報告

３　研究・調査プロジェクト報告

縄文時代の顔身体土器の現地調査を継続して実施し，中期および晩期の事例について分析した結果を論考にまとめた。また，一般の土器の動向を検討するため，國學院大學栃木短期大学・奈良大学と協力して栃木市中根八幡遺跡の発掘調査を行うとともに，栃木市平川遺跡出土土器の整理報告書を編集・刊行した。

仁藤　敦史　NITO Atsushi　教授（2008～）

併任：総合研究大学院大学日本歴史研究専攻教授（2008～）

【学歴】早稲田大学第一文学部日本史学専攻（1982年卒業），早稲田大学大学院文学研究科史学（日本史）専攻博士前期課程（1984年修了），早稲田大学大学院文学研究科史学（日本史）専攻博士後期課程（1989年満期退学）
【職歴】早稲田大学第一文学部助手（1989），国立歴史民俗博物館歴史研究部助手（1991），同助教授（1999），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻助教授併任（2002），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部准教授（2007），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻准教授併任（2007），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部教授（2008），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻教授併任（2008），【役職】総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻長（2012-13），広報連携センター長（2017-2018）【その他】国立歴史民俗博物館三十年史編纂委員長（2011-2014）【学位】博士（文学）（早稲田大学1998取得）【専門分野】日本古代史【主な研究テーマ】都城制成立過程の研究／Establishment process of Japanese ancient capital cities，古代王権論／Theoretical study of ancient sovereignty，古代地域社会論／Ancient local societies【所属学会】歴史学研究会，木簡学会，史学会，日本史研究会，条里制・古代都市研究会

●主要業績

１．【著書】『都はなぜ移るのか―遷都の古代史―』吉川弘文館，246頁，2011年12月
２．【著書】『古代王権と支配構造』吉川弘文館，361頁，2012年３月
３．【原著論文】「倭国の成立と東アジア」（『岩波講座 日本歴史』１原始･古代１，岩波書店，pp.137-167,2013年11月）（査読有）
４．【著書】『藤原仲麻呂』中央公論新社，中公新書，258頁，2021年６月25日
５．【著書】『東アジアからみた「大化改新」』，吉川弘文館，213頁，2022年９月１日

●2022年度の研究教育活動

一 研究業績

１　著書

単著『東アジアからみた「大化改新」』，吉川弘文館，213頁，2022年９月
共著「古代天皇制の成立」李成市他編『アジア人物史』２，集英社，pp.565-628,2023年２月，

２　論文

「殯宮儀礼の主宰と大后―女帝の成立過程を考える―」『国立歴史民俗博物館研究報告』235，pp.25-58，国立歴史民俗博物館，2022年９月，査読有り
「卑弥呼景初２年朝貢説再論」『桜井市纒向学研究センター紀要』10纒向学の最前線，pp.651-658，桜井市纒向

学研究センター，2022年７月，
「再論・藤原京の京域と条坊」吉村武彦編『律令制国家の理念と実像』，pp.159-182，八木書店，2022年５月，
「秦氏の開発伝承と祭祀」伏見稲荷神社『朱』66，pp.24-38,2023年３月

3　書評
重見泰『日本古代都城の形成と条坊』日本史研究会『日本史研究』719, pp.61-67, 日本史研究会, 2022年７月，
吉川真司『律令体制史研究』岡山大学文明動態学研究所『文明動態学』２，pp.159-164, 2023年２月，

4　展示図録
国際企画展示「加耶」図録，コラム「滅亡後の加耶の人々」，p60,2022年10月
企画展示「「いにしえが，好きっ！―近世好古図録の文化誌―」，コラム「宇治橋断碑の発見と名古屋学９，資料解説p207・213・218・226, 2023年３月，

5　学会・外部研究会発表
「 継体・欽明朝の国家段階」七世紀史研究会報告，早稲田大学法学部，2022年６月20日
「卑弥呼と公孫氏政権」東アジアの古代文化を考える会，日比谷コンベンションホール，2022年11月19日
（要旨は『卑弥呼王権と公孫氏政権シンポジウム資料集』，pp.3-18に掲載）
「磐井の乱と古代国家生成」主催（公財）飯塚市教育文化振興事業団・遠賀川古代史事業推進実行委員会，2022年度古代連続講座第七回講演会，福岡県飯塚市イイズカコスモスコモンズ，2022年12月10日
（要旨は『古代から未来のトビラを拓く』pp.1-19に掲載），
「古代都市の成立と展開―都城から国府・―」斎宮歴史博物館・市川市立考古博物館『公開講座・伊勢斎宮と古代都市』，市川市文化会館，2023年２月25日
（要旨は『公開講座・伊勢斎宮と古代都市　資料集』pp.1-15）

7　小論
「卑弥呼」「中臣鎌足」新古代史の会編『人物で学ぶ名本古代史』１古墳・飛鳥時代編，吉川弘文館，2022年８月
「孝謙・称徳天皇」新古代史の会編『人物で学ぶ名本古代史』２奈良時代編，吉川弘文館，2022年10月
「「大化改新」と「韓政」」『本郷』162，吉川弘文館，pp.17-19,2022年11月，
「額田寺伽藍並条里図」『文部科学教育通信』540，ジアース教育新社，p2,2022年９月.

二　主な研究教育活動

1　主な共同研究等参加状況
①　歴博
館蔵資料型基盤研究「高度情報化による古代中世の寺院および荘園の総合的研究―額田寺伽藍並条里図と栄山寺寺領文書を中心に―」副代表（2021～2023年度）
報告　島津美子と共同報告「額田寺条里図の麻布と栄山寺文書の印影にかかわる調査」早稲田大学戸山町キャンパス，ハイブリッド研究会，2022年12月17日

2　外部資金による研究
科学研究費基盤研究（C）「古代荘園と在地社会についての高度情報化研究」（研究代表者, 2020年度～2022年度）
科学研究費基盤研究（B）「格･式研究を踏まえた日本古代社会像の再構築」（研究分担者, 2020年度～2022年度）
桜井市纒向学研究センター共同研究員（2013年度～）

4　主な展示・資料活動
2022年度企画展示「いにしえが，好きっ！―近世好古図録の文化誌―」展示プロジェクト委員
2022年度企画展示「加耶―古代東アジアを生きた，ある王国の歴史―」展示プロジェクト委員
正倉院文書複製事業

5　教育
明治大学大学大学院文学研究科兼任講師（日本史特論）通年
早稲田大学大学院文学研究科非常勤講師（日本史学特論）通年

三　社会活動等

1　館外における各種委員
条里制・古代都市研究会評議員正倉院文書研究会委員
奈良県桜井市纒向学研究センター共同研究員島根県古代文化センター企画運営委員

２　講演・カルチャーセンターなど
「邪馬台国論の現状と課題」全４回，朝日カルチャーセンター立川，立川ルミネ，2022年４月７日・５月19日
「推古期の王権を考える」全５回，トンボの眼連続講座，2022年４月10日・５月22日・６月19日，ZOOM講座
「東アジアから「大化改新」を考える 」全３回，朝日カルチャーセンター立川，立川ルミネ，2022年７月７日・８月４日・９月８日
「「大化改新」と東アジア」全５回，トンボの眼連続講座，2022年７月17日・８月14日・９月11日・10月９日・11月３日，ZOOM講座
「七世紀後半の戦乱と国家意識 」全３回，朝日カルチャーセンター立川，立川ルミネ，2022年10月６日・11月17日・12月１日
「倭の五王と天下観―その外交と内政を考える―」横浜市栄区古代史セミナー講演会，神奈川県立地球市民かながわプラザ，2022年10月20日
「東アジアから見た「大化改新」」早稲田イクステンションセンター，八丁堀校舎，2023年１月19日・26日・２月２日・９日・16日
「中国の世界観と公孫氏―邪馬台国の時間と空間を考える―」歴史サークルあびこ創立四十周年記念講演，我孫子市，2023年１月14日
「卑弥呼と公孫氏政権―景初二年の虚実―」東アジアの古代文化を考える会例会，としま区民センター，2022年４月10日
「七世紀末の戦乱と国家意識」全５回，トンボの眼連続講座，2023年１月８日・２月11日・３月５日，ZOOM講座
「遠江・駿河・伊豆の古代史―古代の東海道―」朝日カルチャーセンター新宿，新宿住友ビル，2023年２月15日
３　マスコミ
書評
「聖徳太子」番組コメント，『日本史スクープ砲』第11回，７月３日（日）21時～22時，BS松竹東急
森公章「書評　東アジアからみた「大化改新」」『しんぶん　赤旗』2022年10月30日朝刊，
「新刊　東アジアからみた「大化改新」」『奈良新聞』2022年９月11日朝刊
「紹介　東アジアからみた「大化改新」」『四国新聞』2022年11月27日朝刊
山本直美「紹介　東アジアからみた「大化改新」」『歴史地理教育』950，

四　活動報告
２　特別委員会委員など館長からの委嘱を受けたもの
・人事委員
３　研究・調査プロジェクト報告
古代の王権および都城を研究するため，木簡学会への参加により最新の発掘情報および出土文字資料の情報収集をすることができた。また，関係書籍を購入した。

箱﨑　真隆　HAKOZAKI Masataka　准教授（2022.4～）

生年：1982

【学歴】福島大学教育学部生涯教育課程環境科学教育コース（2005年卒業），福島大学大学院教育学研究科教科教育専攻（2008年修了），東北大学大学院生命科学研究科生態システム生命科学専攻（2012年修了）
【職歴】国立大学法人名古屋大学年代測定総合研究センター研究員（2012），国立大学法人名古屋大学年代測定総合研究センター研究機関研究員（2014），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部特任助教（2019），同科研費支援研究員（2019.4～６），同プロジェクト研究員（2019.7～2022.3），同准教授（2022.4～）
【学位】博士（生命科学）（東北大学）（2012年取得）
【専門分野】年輪年代学，放射性炭素年代学，文化財科学，古生態学
【主な研究テーマ】北東アジアの木質文化財，災害由来の自然埋没木の高精度年代決定，年輪幅および酸素同位体比年輪年代法の長期標準年輪曲線の確立，炭素14年代法における北半球標準および日本版暦年較正曲線の基盤データの獲得，過去３万年間にわたる気候復元・太陽活動復元

【所属学会】日本植生史学会，日本生態学会，日本文化財科学会，日本地球惑星科学連合，日本第四紀学会，日本AMS研究協会，日本「樹木年輪」研究会
【研究目的・研究状況】2010年代に日本で確立された酸素同位体比年輪年代法と炭素14スパイクマッチングにより，北東アジアの年輪年代測定の最大の障害となっていた「樹種の壁」が打ち破られた。これにより，様々な地域・時代の木質文化財，自然埋没木に誤差０年の年代情報の付与が可能となった。年輪酸素同位体比は気候（主に降水量）復元に，年輪炭素14濃度は太陽活動復元に応用できる。２つの新しい年輪年代法を駆使して，北東アジアの歴史事象と環境変動との関係を明らかにする。

●主要業績

1．【論文】Hakozaki M, Miyake F, Nakamura T, Kimura K, Masuda K, Okuno M, Verification of the annual dating of the 10th century Baitoushan Volcano eruption based on AD 774–775 carbon-14 spike, Radiocarbon, 60（1），pp.261-268. 2018.
2．【論文】Miyake F, Masuda K, Nakamura T, Kimura K, Hakozaki M, Jull T, Lange T, Cruz R, Panyushkina I, Baisan C, Salzer M, Search for annual carbon-14 excursions in the past, Radiocarbon, 59（2），pp.315-320,2017.
3．【論文】Hakozaki M, Kimura K, Tsuji S, Suzuki M，Tree-ring study of a late Holocene forest buried in the Ubuka Basin, southwestern Japan，IAWA Journal，33（3），pp.287-299,2012.
4．【論文】箱﨑真隆，14C-スパイクマッチ法による年代決定，考古学ジャーナル，779，pp.15-18，ニューサイエンス社，2023.
5．【論文】箱﨑真隆，酸素同位体比年輪年代法による韓国南部古代資料の高精度年代測定，国立歴史民俗博物館研究報告，231，pp.299-315,2022.

●2022年度の研究教育活動

2　論文

「A WIGGLE-MATCHED 297-YR TREE-RING OXYGEN ISOTOPE RECORD FROM THAILAND: INVESTIGATING THE 14C OFFSET INDUCED BY AIR MASS TRANSPORT FROM THE INDIAN OCEAN」『Radiocarbon』65（2），Cambridge University Press，2023年３月23日（査読有）

「３万年前のタイムカプセル」『文部科学教育通信』552（2），ジアース教育新社，pp.2,2023年３月

「14C-スパイクマッチ法による年代決定」『考古学ジャーナル』779，ニューサイエンス社，pp.15-18,2023年２月

「樹木年輪が導く高精度年代研究の新時代」『KEK Proceedings 2022-１』，高エネルギー加速器研究機構，pp.145-159,2022年11月

「Regional Differences in Carbon-14 Data of the 993 CE Cosmic Ray Event」『Frontiers in Astronomy and Space Sciences』９，Frontiers，2022年７月４日（査読有）

5　学会・外部研究会発表

箱﨑真隆，上奈穂美，能城修一，佐野雅規，木村勝彦，坂本稔，中塚武．静岡県裾野市茶畑山の最終氷期埋没木に基づく高精度暦年較正と気候復元への応用展望．国際火山噴火史情報研究集会EHAI 2022-2,2023.

箱﨑真隆，上奈穂美．炭素14地域オフセットの解明に向けた在日希少外国産材の年輪年代学的研究．第23回AMSシンポジウム，2022.

三宅 芙沙，箱崎 真隆，Rashit Hantemirov，早川 尚志，Samuli Helama，堀内 一穂，A.J.Timothy Jull，木村 勝彦，前原 裕之，宮原 ひろ子，森谷 透，Markku Oinonen，Irina P，Panyushkina，笹 公和，武山美麗，門叶冬樹．過去１万年間の極端太陽高エネルギー粒子現象の調査．第23回AMSシンポジウム，2022.

箱﨑真隆．巨大フレアの痕跡が明らかにした巨大噴火の年代．大学共同利用機関シンポジウム2022「科学の時代。見えてきた未来」，2022.

國分陽子，箱﨑真隆，坂本稔，李貞，中塚武，藤田奈津子．岐阜県瑞浪市大湫町神明神社御神木を用いた炭素14年代較正曲線の整備:御神木の年代調査．日本放射化学会第66回討論会，2022.

Sakamoto M, Hakozaki M, Nakatsuka T, Ozaki H. Annual radiocarbon dating of tree rings of the beginning and the end of the Yayoi period, Japan. 24th Radiocarbon Conference・10th 14C & Archaeology Conference, 2022.

Hong W, Park Y, Sung K, Park G, Sakamoto M, Hakozaki M, Park J. Radiocarbon ages of annual tree rings

collected in Korea（AD 900 - 2021, 81 - 168, 131 - 211）. 24th Radiocarbon Conference・10th 14C & Archaeology Conference, 2022.

Miyake F, Hakozaki M, Kimura K, Tokanai F, Nakamura T, Takeyama M, Moriya T, Panyushkina I, Hantemirov R, Helama S, Jull A. Toward detections of 14C spikes: regional differences in 14C data. 24th Radiocarbon Conference・10th 14C & Archaeology Conference, 2022.

箱﨑真隆．炭素14年代法による誤差０年決定の現状と展望．日本文化財科学会第39回大会，2022.

Takeshi NAKATSUKA, Zhen LI, Masaki SANO, Masataka HAKOZAKI, Katsuhiko KIMURA. Development of Oxygen Isotopic（δ18O）Dendroarchaeology in Japan. The 7 th Asian Dendrochronological Conference, 2022.

二　主な研究教育活動

1　主な共同研究等参加状況

①　歴博

基幹研究「交流・環境からみたオホーツク文化・擦文文化，アイヌ文化―その成立・展開過程―」（研究代表者：鈴木琢也，2022～2024年度）

課題設定型共同研究「秦漢時期の文字使用をめぐる学際的研究」（研究代表者：下田誠，2021～2023年度）

③　機構

広領域連携型基幹研究プロジェクト「人新世に至る，モノを通した自然と人間の相互作用に関する研究」（研究代表者：陀安一郎，2022～2027年度）

2　外部資金による研究

科学研究費補助金（基盤A）「過去３万年の極端気候・極端災害史の精密編年に向けた新しい年輪年代法の基盤研究」（2020～2024年度）研究代表者

科学研究費補助金（学変A公募研究）「遺跡出土木材の単年輪データに基づく暦年較正の高度化と炭素14年輪年代法の確立」（2021～2022年度）研究代表者

科学研究費補助金（基盤S）「過去１万年間の太陽活動」（研究代表者：三宅芙沙，2020～2024年度）研究分担者

科学研究費補助金（基盤S）「酸素同位体比年輪年代法の高精度化による日本列島の気候・生産・人口変動史の定量化」（研究代表者：中塚武，2021～2025年度）研究分担者

科学研究費補助金（挑戦的研究（萌芽））「宇宙線生成核種を用いたシュワーベサイクル検出手法の確立」（研究代表者：三宅芙沙，2020～2022年度）研究分担者

科学研究費補助金（基盤A）「高精度年代体系による東アジア新石器文化過程―地域文化の成立と相互関係―」（研究代表者：小林謙一，2022～2026年度）研究分担者

科学研究費補助金（新学術）「考古学データによるヤポネシア人の歴史の解明」（研究代表者：藤尾慎一郎，2018～2022年度）研究協力者

科学研究費補助金（基盤A）「高精度単年輪14C測定による弥生から古墳期の暦年較正の高解像度化」（研究代表者：坂本稔，2022～2026年度）研究分担者

科学研究費補助金（基盤A）「汽水成年縞堆積物と年輪試料の複合解析による完新世の気候変化と高分解能編年の研究」（研究代表者：齋藤文紀，2021～2025年度）研究分担者

科学研究費補助金（基盤C）「中世民家の年代研究」（研究代表者：中尾七重，2021年度～2023年度）研究分担者

三　社会活動等

1　館外における各種委員

日本第四紀学会2021-2022年度行事委員

四　活動報告

1　受賞歴

日本文化財科学会第16回ポスター賞，箱﨑真隆「炭素14年代法による誤差０年決定の現状と展望」，2022年９月，日本文化財科学会

橋本　雄太　HASHIMOTO Yuta　准教授（2022.4～）

【学歴】京都大学文学部（2004-2008），京都大学文学研究科修士課程（2008-2010），京都大学文学研究科博士課程課程（2013-2017）
【職歴】株式会社内田洋行社員（2010-2012），大阪大学特任研究員（2015-2017），国立国会図書館委嘱研究員（2015-2021），国立歴史民俗博物館テニュアトラック助教（2017-2022），同准教授（2022-），
【学位】博士（文学）（京都大学文学研究科2018年取得）【専門分野】人文情報学，科学史【主な研究テーマ】人文学資料を対象にしたクラウドソーシング，歴史研究に関わる教育ソフトウェア開発，近代西洋数学史
【所属学会】情報処理学会，Japanese Association of Digital Humanities，日本科学史学会【研究目的・研究状況】クラウドソーシング技術を駆使した歴史資料の活用をテーマに研究をおこなっている．前近代日本語史料の市民参加型翻刻プラットフォーム「みんなで翻刻」や，くずし字解読の学習用アプリケーション「KuLA」の開発にあたっている．「みんなで翻刻」では2022年４月時点で2000万文字の近世史料が翻刻され，KuLAは2016年の公開後20万回以上ダウンロードされている．
【メールアドレス】yhashimoto@rekihaku.ac.jp

●主要業績

１．【論文】「音声読み上げとフォーラム機能を備えた中世文書オンライン展示システムの開発」国立歴史民俗博物館研究報告，224号，pp.311-328, 2021年３月（査読あり）
２．【論文】共著：「『みんなで翻刻』の運用成果と参加動向の報告」，人文科学とコンピュータシンポジウム2020論文集，pp.39-46, 2020年12月（査読あり）
３．【論文】「AI 文字認識とクラウドソーシングを組み合わせた歴史資料の大規模テキスト化」，人工知能学会誌，Vol. 35，No. ６，pp.754-760, 2020年11月

●2022年度の研究教育活動

一 研究業績

２　論文
高橋そよ, 池田香菜, 菊凛太郎, 後藤真, 橋本雄太, 南勇輔「鹿児島県与論島における市民参加型“島の自然とくらしのゆんぬ古写真調査”の展開」島嶼研究 24（１）13-30 2023年３月
橋本雄太「［動向レビュー］くずし字資料の解読を支援するデジタル技術」カレントアウェアネス・ポータル，No.351，pp.10-13,2022年３月
橋本雄太「歴史資料のオープンデータ化とシチズンサイエンスの可能性」，歴史学研究（1028）149-155 2022年10月
５　学会・外部研究会発表
橋本雄太「歴史災害資料のマークアップシステムの試作」第131回 人文科学とコンピュータ研究会発表会 2023年２月13日
Yuta Hashimoto, et al. Crowdsourcing as Collaborative Learning： A Participatory Annotation Project for the Photographic Materials of Shibusawa Eiichi, Digital Humanities 2022 479-483 2022年７月
７　その他
橋本雄太「Omeka―歴史文化資料デジタルコレクションのためのコンテンツ管理システム―」西洋史学（273）42-45 2022年８月
橋本雄太「市民と協働して古文書資料を活用する「みんなで翻刻」」博物館研究 57（８）６-９ 2022年８月

二 主な研究教育活動

１　主な共同研究等参加状況
①　歴博
機関拠点型基幹研究プロジェクト「日本歴史文化知の構築と歴史文化オープンサイエンス研究」(2023年度～)
２　外部資金による研究
科学研究費助成事業 若手研究「データ駆動型歴史研究のための共用テキストレポジトリ構築」代表者 2018年度～2022年度

科学研究費助成事業 基盤B「近世日本数理科学史の領野横断究の実践」分担者 2020年度～2022年度
科学研究費助成事業 挑戦的研究（開拓）「日本語コーパスに対する情報付与を核としたオープンサイエンス推進環境の構築」分担者 2019年度～2021年度
科学研究費助成事業 基盤A「歴史ビッグデータ研究基盤による過去世界のデータ駆動型復元と統合解析」分担者 2019年度～2021年度

三 社会活動等

1　館外における各種委員
情報処理学会人文科学とコンピューター研究会幹（2021年４月-）情報処理学会 論文誌編集委員（2019年４月-）
JADH2021プログラム委員長（2021年）

四 活動報告

3　研究・調査プロジェクト報告
「みんなで翻刻」上で得られた650万文字のテキストに対しマークアップおよびエンティティリンキングを実施するプラットフォーム「みんなでマークアップ」（https://markup.honkoku.org/）を一般公開し，2023年２月の人文科学とコンピュータ研究会発表会にて成果を報告した。

林部　均　HAYASHIBE Hitoshi　教授（2013～）

併任：総合研究大学院大学日本歴史研究専攻教授（2013～），生年：1960

【学歴】関西大学文学部史学地理学科（1983年卒業）
【職歴】奈良県立橿原考古学研究所嘱託（1983），奈良県立橿原考古学研究所（奈良県教育委員会）技師（1985），同主任研究員（1992），同総括研究員（2006），関西大学文学部非常勤講師（2002～2005），三重大学人文学部非常勤講師（2006），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部准教授（2010），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻准教授併任（2010），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部教授（2013～），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻教授併任（2013～），研究推進センター長（2014～2016），副館長・研究総主幹（2017～2020），専修大学文学部非常勤講師（2013），早稲田大学大学院非常勤講師(2014)，専修大学大学院非常勤講師(2015)，東京大学大学院人文社会系研究科客員教授(2020～)
【学位】博士（文学）（奈良女子大学）（2001年取得）【専門分野】日本考古学【主な研究テーマ】東アジアの古代宮都（王宮・王都）の研究，考古学からみた地域社会の研究【所属学会】日本考古学協会，考古学研究会，日本史研究会，条里制・古代都市研究会

●主要業績

1．【著書】『古代宮都形成過程の研究』378頁，青木書店，2001年３月
2．【著書】『飛鳥の宮と藤原京―よみがえる古代王宮―』259頁，歴史文化ライブラリー249，吉川弘文館，2008年３月
3．【論文】「東日本出土の飛鳥・奈良時代の畿内産土師器」（『考古学雑誌』72-１，pp.31-71，日本考古学会，1986年９月）（査読あり）
4．【論文】「古代宮都と郡山遺跡･多賀城―古代宮都からみた地方官衙論序説―」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第163集，pp.99-131,2011年３月）（査読あり）
5．【調査報告書】編著『飛鳥京跡Ⅲ―内郭中枢の調査―』253頁，奈良県立橿原考古学研究所，2008年３月

●2022年度の研究教育活動

一 研究業績

7　その他
「国立歴史民俗博物館の愉悦３　鬼瓦（福岡県大宰府跡出土，複製）」『文部科学教育通信』No.541　2022年10月10日pp.2
「王宮にみる「飛鳥・藤原」の国際交流」『「飛鳥・藤原」が語る国際交流』講演会資料集「飛鳥・藤原」の世界遺産を目指す奈良講演会　世界遺産「飛鳥・藤原」登録推進協議会　2022年10月22日　pp.7-12

「飛鳥を象徴する石造物　須弥山石」『REKIHAKU007 歴史の匂い』国立歴史民俗博物館　文学通信　2022年10月26日　pp.72-75

二　主な研究教育活動

1　主な共同研究等参加状況

①　歴博

基幹研究「交流・環境から見たオホーツク文化・擦文文化，アイヌ文化―その成立・展開過程―」（研究代表者　北海道博物館鈴木琢也）副代表，2022～2024年度

4　主な展示・資料活動

総合展示第１室「原始・古代」新構築プロジェクト委員 5 教育

東京大学大学院人文社会系研究科 客員教授（2022.4.1～2023.3.31），「考古学特殊講義ＸＶ・ＸⅥ」「日本古代の考古学１・２」

三　社会活動等

1　館外における各種委員

条里制・古代都市研究会評議委員，考古学研究会全国委員（関東），文化審議会専門委員（文化財分科会第一専門調査会 文化庁），古墳壁画の保存活用に関する検討会委員（文化庁），登録美術品（文字資料等）調査研究協力委員（文化庁），日本学術会議連携会員（史学委員会 文化財の保存と活用に関する文科会 第25期），奈良県立橿原考古学研究所共同研究員，上野国府等調査委員会委員（前橋市教育委員会），総社古墳群調査検討委員会委員（前橋市教育委員会），松山市文化財保護審議会久米官衙遺跡群調査検討部会委員（松山市教育委員会），福原長者原遺跡調査指導委員会委員（行橋市教育委員会），粕屋町文化財調査指導委員会委員（粕屋町教育委員会），史跡鋳銭司跡調査検討委員会委員（山口市教育委員会），史跡鋳銭司跡保存活用計画策定委員会委員（山口市教育委員会），史跡秋田城跡環境整備指導委員会副委員長（秋田市教育委員会）

2　講演・カルチャーセンターなど

「飛鳥宮跡と藤原京，平城京―王宮・王都の発掘調査からみた古代国家の形成―」早稲田大学オープンカレッジ『日本の歴史と文化』 早稲田大学エクステンションセンター早稲田校　2023年１月25日・２月１日・２月８日・２月15日

4　社会連携（国内）

③　講演会・シンポジウム（自治体など地方公共団体主催のもの）

「王宮･王都史からみた飛鳥宮跡と苑池」奈良県立橿原考古学研究所附属博物館秋季特別展「宮廷苑池の誕生」研究講座　奈良県立橿原考古学研究所講堂　2022年10月16日

「王宮からみた「飛鳥・藤原」の国際交流」「飛鳥・藤原」の世界遺産を目指す奈良講演会「『飛鳥・藤原』が語る国際交流」 世界遺産「飛鳥・藤原」登録推進協議会　奈良県社会福祉総合センター　2022年10月22日

「座談会「飛鳥・藤原」が語る東アジアの国際交流」「飛鳥・藤原」の世界遺産を目指す奈良講演会「『飛鳥・藤原』が語る国際交流」 世界遺産「飛鳥・藤原」登録推進協議会　奈良県社会福祉総合センター　2022年10月22日

四　活動報告

1　受賞

前橋市社会教育活動功労者　前橋市教育委員会　2023年２月７日

3　研究・調査プロジェクト報告

列島の各地は，多様な自然環境，歴史的条件に規制され，様々な地域文化を形成してきた。地域文化形成の要因はどこにあるのか，また，歴史的条件は何かということを明らかにすべく本研究を実施した。本年は，新潟県新潟市とその周辺で信濃川の舟運や水害防止のための運河，茨城県水戸市で那珂川の舟運，石川県金沢市において北前船をはじめとした北海道との交流にかかわるモノ資料や古文書，遺跡の調査等を実施し，それぞれの地域のもつ多様性，ならびに地図資料などによる地域認識の把握につとめた。多様となる要因は，それぞれの地域によって様々であり，それが何であるのかを検討した。また，それらが，前近代から現代へと，どのように展開したのかという現代までを視野に入れた研究を進めた。そして，現代にも残る地域社会の多様性について検討した。

樋浦　郷子　HIURA Satoko　准教授（2016～）

【学歴】神戸大学大学院国際協力研究科博士前期課程（1998年修了），京都大学大学院教育学研究科修士課程（2006年修了），京都大学大学院教育学研究科博士課程（2011年修了）
【職歴】帝京大学専任講師（総合基礎科目・教職課程）（～2016年３月），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部准教授（2016～）
【学位】博士（教育学・京都大学）（2011年取得）【専門分野】教育史【主な研究テーマ】帝国日本の教育と宗教の関係に関わる歴史【所属学会】教育史学会，朝鮮史研究会，歴史学研究会，日本教育史研究会

●主要業績

・【著書】『신사・학교・식민지 지배를 위한 종교-교육
（神社・学校・植民地 支配のための宗教―教育）』高麗大学出版文化院（韓国），387頁，2016年２月
・【著書】『神社・学校・植民地―逆機能する朝鮮支配―』京都大学学術出版会，373頁，2013年３月
・【論文】「학교의식에 나타난 식민지 교육：현대일본의 “국가신도” 논쟁과 관련하여」
（学校儀式に見る植民地の教育:現代日本の「国家神道」論争と関連して）『翰林日本学』25号，翰林大学（韓国）日本学研究所，pp.59-71,2014年12月
・【論文】「植民地朝鮮の『御真影』：初等教育機関の場合」『日本の教育史学』57号，教育史学会，pp.84-96,2014年10月
・【学会・外部研究会発表】
「台湾の天皇崇敬教育―新化の学校をめぐるモノ資料を手がかりに―」，“上學去―近代教育與臺灣社會”臺灣教育史國際學術研討會，文化部・国立台湾歴史博物館，2019年１月19日
「未完の朝鮮扶余神宮が果たした役割と意味」“The Role and the Meaning of Unfinished Buyeo Sin Gung（Fuyo Jingu）Imperial Shrine in the Wartime Korea”（英語・日本語による），History of education and language in late Chosôn and Colonial-era Korea Workshop，九州大学，2016年２月20日

●2022年度の研究教育活動

一 研究業績

５　学会・外部研究会発表
「帝国日本」の学校儀式,教育史フォーラム・京都，人文研アカデミーシンポジウム，京都大学，2023年２月11日
「君」をことほぐための模索―万歳か唱歌か（先島諸島の学校誌から）―, 青森中央学院大学共通研究費成果報告会, 2023年３月21日
７　その他
植民地期朝鮮における一地方の初等後教育実態 ―「載寧商業学校」生徒の日記を読む― ,歴博基盤共同研究「近代東アジアにおけるエゴ・ドキュメントの学際的・国際的研究」研究会 ,2022年９月15日

二　主な研究教育活動

１　主な共同研究等参加状況
①　歴博
基盤共同研究「近代東アジアにおけるエゴ・ドキュメントの学際的・国際的研究」2022年～
２　外部資金による研究
科研 19K02493 基盤C「帝国日本における学校儀礼教育の歴史：声・音の検討を中心に」
４　主な展示・資料活動
第５展示室展示リニューアル委員
５　教育
歴博・千葉大学留学生プロジェクト

三　社会活動等

1　館外における各種委員
教育史学会編集委員（2021年10月から現在）同　70周年記念誌編集委員（2022年12月から現在）
4　社会連携
②　共同研究
山川出版社との共同研究

四　活動報告
近代天皇制下の宗教と教育,比較教育社会史研究会宗教と社会化部会 ,2023年３月31日

樋口　雄彦　HIGUCHI Takehiko　教授（2011～），専攻長（2020～2022）

併任：総合研究大学院大学日本歴史研究専攻教授（2011～），生年：1961

【学歴】静岡大学人文学部人文学科日本史学専攻（1984年卒業）
【職歴】沼津市明治史料館学芸員（1984），同主任学芸員（1997），国立歴史民俗博物館歴史研究部助教授（2001），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻助教授併任（2003），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部助教授（2004），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部准教授（2007），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻准教授併任（2007），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部教授（2011），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻教授併任（2011），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻長併任（2020～2021）
【学位】博士（文学）（大阪大学）（2007年取得）【専門分野】日本近代史【主な研究テーマ】明治期の社会・文化と旧幕臣の動向【所属学会】明治維新史学会，洋学史学会，全国歴史資料保存利用機関連絡協議会，静岡県近代史研究会，静岡県地域史研究会

●主要業績
1．【著書】『旧幕臣の明治維新 沼津兵学校とその群像』吉川弘文館，206頁，2005年11月
2．【著書】『沼津兵学校の研究』吉川弘文館，661頁，2007年10月
3．【著書】『敗者の日本史17 箱館戦争と榎本武揚』吉川弘文館，288頁，2012年11月
4．【著書】『幕末の農兵』現代書館，206頁，2017年12月
5．【著書】『幕末維新期の洋学と幕臣』岩田書院，404頁，2019年８月

●2022年度の研究教育活動
一 研究業績
1　著書
『江原素六のことば』，編著，公益社団法人江原素六先生顕彰会，2022年５月15日
『講談社の動く図鑑MOVE　日本の歴史』，監修（近代①明治時代・前期），講談社，2022年11月29日
『明治の旧幕臣とその信仰』，思文閣出版，2023年１月31日
『静岡県伊豆市牧之郷飯田家資料目録』，編著，科研費での私家版，2023年１月31日
2　論文
「恭順派と抗戦派の交錯―江戸無血開城をめぐる旧幕臣―」 岩下哲典編『江戸無血開城の史料学』，pp.134-164，吉川弘文館，2022年11月１日
「幕臣柴田剛中日記にみる書籍と公務・生活」『国立歴史民俗博物館研究報告』236, pp.47-70，国立歴史民俗博物館，2022年10月31日（査読有）
「旗本土着と戊辰戦争―伊豆の松下加兵衛とその周辺―」『国立歴史民俗博物館研究報告』240, pp.101-199，国立歴史民俗博物館，2023年３月31日（査読有）

二　主な研究教育活動
2　外部資金による研究
科研費・基盤研究C「幕府瓦解後の旗本土着をめぐる研究」（2019～2022年度）研究代表者
4　主な展示・資料活動

総合展示第５室・第６室リニューアル委員会委員

三　社会活動等

１　館外における各種委員

静岡市文化財保護審議会委員
千葉県文化財保護審議会委員
静岡市歴史博物館収集資料審議会委員
沼津市文化財保存活用地域計画作成委員会委員

４　社会連携

①　刊行物

「太郎乙と五郎乙」『沼津市明治史料館通信』149，pp.1-３，沼津市明治史料館，2022年４月25日
「勝海舟の江原素六評」『沼津市明治史料館通信』149，pp.3-３，沼津市明治史料館，2022年４月25日
「河鍋暁斎門下の女流画人綾部暁月と旧幕臣桑原三」『静岡県近代史研究会会報』526，pp.2-４，静岡県近代史研究会，2022年７月10日
「江原素六と広岡浅子」『沼津市明治史料館通信』150，pp.1-2, 沼津市明治史料館，2022年７月25日
「細井昌徳とその墓碑」『沼津市明治史料館通信』150，pp.2-４, 沼津市明治史料館，2022年７月25日
「江原素六の末弟丸山銀蔵のこと」『沼津市明治史料館通信』151，pp.2-3, 沼津市明治史料館，2022年10月25日
「旧幕府軍として箱館戦争に参加した駿遠豆の庶民出身者」『静岡県近代史研究会会報』532，pp.2-３，静岡県近代史研究会，2023年１月10日
「林洞海が遺した徳川家康の偽筆」『沼津市明治史料館通信』152，pp.1-3, 沼津市明治史料館，2023年１月25日
「陸軍少将加藤泰久と江原素六」『沼津市明治史料館通信』152，pp.4-4, 沼津市明治史料館，2023年１月25日
「飯島虚心とその家系―沼津兵学校資業生飯島正一郎の背景―」『沼津市博物館紀要』47，pp.1-36，沼津市歴史民俗資料館・沼津市明治史料館，2023年３月31日
「民権ネットワーク　旧幕臣」『自由民権』36，pp.83-84，町田市立自由民権資料館，2023年３月31日
「菊間藩出身の教師織田豊二とその顕彰碑」『成田市史研究』47，pp.25-31，成田市教育委員会，2023年３月

②　講演会・シンポジウム

「佐倉藩士と沼津兵学校」佐倉市民カレッジ，佐倉市中央公民館，2022年９月14日

四　活動報告

３　研究・調査プロジェクト報告

明治の旧幕臣に関する文献・資料について調査・収集を行った。

藤尾　慎一郎　FUJIO Shin’ichiro　教授（2008.11～）

併任：総合研究大学院大学日本歴史研究専攻教授（2009～）　生年：1959

【学歴】広島大学文学部卒（1981），九州大学大学院修士課程修了（1983），九州大学大学院博士課程後期単位取得退学（1986）
【職歴】九州大学文学部助手（1986），国立歴史民俗博物館考古研究部助手（1988），同助教授（1999），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻助教授併任（2003），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部教授（2008），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻教授併任（2009）
【役職】研究推進センター長併任（2011～2012），副館長・研究総主幹併任（2013～2016）【学位】博士（文学）（広島大学文学部2002）【専門分野】日本考古学【主な研究テーマ】弥生文化，鉄，農耕のはじまり，年代研究，DNA【所属学会】日本考古学協会，考古学研究会，九州考古学会，たたら研究会【受賞歴】なし

●主要業績

１．【単著】『弥生文化像の新構築』275頁，東京：吉川弘文館，2013年５月
２．【単著】『弥生時代の歴史』250頁，講談社現代新書2330，東京：講談社，2015年８月

３．【編著】設楽博己・藤尾慎一郎・松木武彦『弥生文化誕生』弥生時代の考古学2,226頁，2009年１月
４．【原著論文】「弥生文化の輪郭」（『開館30周年記念論文集１』国立歴史民俗博物館研究報告第178集，pp.85-120,2013年３月）（査読有）
５．【編著】『弥生ってなに?!』2014年度歴博企画展示図録，128頁，2014年７月15日

●2022年度の研究教育活動（成果を出す以前の研究・調査途中のものも含む）

一　研究業績（公開，発表，刊行済みのもの）

２　論文（査読あり，なしを明記）

藤尾慎一郎　2022.8.20「弥生時代の列島社会―弥生文化とはどのようなものだったか」『論点日本史学』pp.12-13，ミネルヴァ書房.査読無し.

藤尾慎一郎・篠田謙一・坂本稔・瀧上舞　2022.11.30「考古学データとDNA分析からみた弥生人の成立と展開」『国立歴史民俗博物館研究報告』第237集，pp.17-70.（査読あり）

藤尾慎一郎　2023.3.15「数値年代とDNAがもたらすこれからの弥生文化研究」『考古学雑誌』105－２，pp.89-103.（査読なし）

藤尾慎一郎　2023.3.30：「考古学データとヤポネシア人」『考古学ジャーナル』779，pp.5-９.（査読なし）

藤尾慎一郎　2023.3.31：「弥生文化における鉄器の意義」『弥生文化博物館研究報告』第８集，pp.65-75，大阪府立弥生文化博物館30周年記念論文集．ISSN-0919-2840（査読なし）

藤尾慎一郎・坂本稔・佐野雅規　2023.3：「岡山大学構内遺跡における水田稲作の開始年代―Ⅰ期中段階の堰の酸素同位体比年輪年代と炭素14年代―」『文明動態学』vol.2，pp.18-31，岡山大学文明動態学研究所.（査読あり）

３　調査・発掘調査報告書，自治体史・史料集，辞典など

藤尾慎一郎編著　2022.11.30『考古学データによるヤポネシア人の歴史の解明』国立歴史民俗博物館研究報告第237集，186頁.（査読あり）

藤尾慎一郎・木下尚子・坂本稔・瀧上舞・篠田謙一　2022.11.30「考古学データによるヤポネシア人の歴史の解明－2020年度の調査―」『国立歴史民俗博物館研究報告』第237集，pp.3-16.（査読あり）

藤尾慎一郎・坂本稔・瀧上舞　2022.11.30「福岡県行橋市長井遺跡出土弥生人骨の年代学的調査」『国立歴史民俗博物館研究報告』第237集，pp.127-134.（査読あり）

藤尾慎一郎・木下尚子・山田康弘・清家章・坂本稔・瀧上舞・篠田謙一　2023.3.30：「考古学データによるヤポネシア人の歴史の解明―2021年度の調査⑴」『国立歴史民俗博物館研究報告』第240集，pp.351－360.（査読あり）

藤尾慎一郎・坂本稔・瀧上舞　2023.3.30「熊本大学医学部所蔵弥生時代の人骨の年代学的調査―笹尾遺跡・神水遺跡・畑中遺跡・大坪貝塚―」『国立歴史俗博物館研究報告』第240集,pp331-350.（査読あり）

５　学会・外部研究会発表

「数値年代とDNAがもたらす，これからの弥生文化研究」日本考古学会第119回総会　招待講演，10月29日，東京国立博物館平成館内，小講堂。

藤尾慎一郎･篠田謙一　「ゲノムからみた弥生時代人の多様性」『令和４年度九州考古学会総会研究発表資料集』pp.26-35, 2022年11月26日，九州大学伊都キャンパス

「古代ゲノムが語る新しい弥生時代人―ヤポネシアゲノム（YAPONESIAN GENOME）」『REKIHAKU』7,pp.76-80. 2022.10.26.

二　主な研究教育活動（共同研究，調査，展示，教育等）

１　主な共同研究等参加状況（歴博や機構の運営交付金による共同・連携研究）

③　機構（基幹研究プロジェクト）

ネットワーク型基幹研究プロジェクト 地域研究推進事業 北東アジア地域研究（国立民族学博物館拠点）

２　外部資金による研究（科学研究費などの外部資金，各種補助金による研究，企業・自治体による研究）

・日本学術振興会平成30年度科学研究費補助金新学術領域「考古学データによるヤポネシア人の歴史の解明」研究代表者，2018～2022年度

2022年第１回全体会議　苫小牧市文化交流センター　2022年６月11日～12日　B01班活動報告

熊本報告会，熊本県立図書館，2022年11月28日.

米子報告会，米子市文化ホール，2023年１月21日

鹿児島報告会，鹿児島市国際交流センター，2023年２月11日
2022年第２回全体会議，第９回考古班会議　沖縄　2023年２月17～19日
・日本学術振興会科学研究費基盤研究Ｓ「年輪酸素同位体比を用いた日本列島における先史暦年代体系の再構築と気候変動影響調査」研究分担者，（研究代表者　中塚武）2021～2025年度
３　国際交流事業（国際交流協定にもとづく事業，国際シンポジウム・集会など）
国立釜山大学校博物館学術交流（研究代表者 藤尾慎一郎）
2023年２月23日～25日訪韓し，新館長の李尚澤氏と次年度以降の交流について打ち合わせ
釜山大学校考古学科東アジアＳＡＰ融合人材養成事業チーム主催特別講義「渡来系弥生人の出自？」

三　社会活動等

１　館外における各種委員（学会，学術会議，学振・自治体審議委員など）
考古学研究会全国委員，たたら研究会関東委員
２　講演・カルチャーセンターなど（友の会も含む）
「ヤポネシアゲノムと考古学」かながわ考古学同好会講演会，４月22日，神奈川県埋蔵文化財センター
令和４年度北海道立埋蔵文化財センター連続講座　縄文文化から弥生文化へ！第１回「弥生文化とはなにか」，北海道立埋蔵文化財センター，５月21日.
講座『日本創生の実像―先史時代の移行期とは―』ZOOMによる同時配信，早稲田大学オープンカレッジ，９月28日，10月12日，26日。
2022年度古代史連続講座「古代から未来のトビラを拓く」第４回「遠賀川式土器と日本稲作の起源」飯塚コミュニティセンター，９月24日.
３　マスコミ（テレビ，ラジオ，新聞，雑誌など）
毎日新聞2022年４月18日夕刊４版「文化」今時の歴史　弥生時代研究　新段階へ　土器の謎解くＤＮＡ

四　活動報告

３　研究・調査プロジェクト報告
韓国へは2022年11月末にビザなし渡航ができるようになったが，国内調査を中心に行った。
●鹿児島県十島村宝島大池遺跡Ａ地点出土土器の調査報告を2023年２月末締め切りの国立歴史民俗博物館研究報告通常号に提出した（執筆は志布志市教育委員会　相美伊久雄氏）。あわせて，同遺跡出土貝製品を熊本大学名誉教授の木下尚子氏，オオツタノハを千葉県立中央博物館の黒住耐二氏が執筆して提出した。これで概報にとどまっていた土器編と貝編の一部が本報告されたことになる。刊行は，2024年３月末の予定である。
４　その他（研究の目的，意義など）＊任意
2021年１月に発表したFUJIO Shin'ichiro　2021.1.27：Early Grain Cultivation and Starting Processes in th Japanese Archipelago.Quaternary, pp.1-15.が，2021－2022のMost Viewed Articlesベスト10に選ばれた。
2003年５月の弥生時代開始年代500年遡上説の発表以来，継続してきた歴博の弥生時代の年代研究の成果が，2023年４月から高校で使われる日本史の教科書に採用されることになった（山川出版社，日本史詳説，2023年３月）。これによって，日本の水田稲作は2800年前に始まったと記述されるとともに，弥生時代は前期・中期・後期の３期区分から，前期の前に早期を加えた４期区分となった。1982年に佐原真元歴博館長が提唱した弥生早期（先Ⅰ期）が，ようやく教科書に正式採用されたことになる。
渡来系弥生人は，現代韓国人と同じ核ゲノムをもつ渡来人と在来（縄文）系弥生人との混血により出現すると考えられてきたが（二重構造モデル），韓半島の新石器時代に確認されている中国北部系と在来新石器時代人の混血の子孫が，青銅器時代に九州北部へ移住していたと仮定すれば，在来（縄文）系弥生人と混血しなくても，渡来系弥生人となる可能性を指摘した。

松尾　恒一　MATSUO Koichi　教授（2010～）

生年：1963

【学歴】國學院大學文学部日本文学科（1985年卒業），國學院大學大学院文学研究科博士前期課程（1987年修了），國學院大學大学院文学研究科博士後期課程（1995年修了）
【職歴】國學院大學文学部専任講師（1996），大倉山精神文化研究所非常勤研究員（1997），國學院大學文学部助教

授（1999），同大學日本文化研究所兼担助教授（1999），国立歴史民俗博物館民俗研究部助教授（2002），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部助教授（2004），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻助教授併任（2004），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部准教授（2007），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻准教授併任（2007），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部教授（2010），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻教授併任（2010～2019,2021～）

【学位】博士（文学，國學院大學）【専門分野】民俗宗教，儀礼・芸能史【主な研究テーマ】民俗宗教・民間信仰，権門寺院の儀礼・芸能，寺院に奉仕する職能者の研究，アジアにおける宗教・信仰の交流史と民俗【所属学会】日本民俗学会，民俗芸能学会，芸能史研究会，儀礼文化学会　【研究目的･研究状況】中国大陸･台湾等，海外の民俗･歴史学研究者･研究機関とも交流を推進しつつ，フィールドワークと歴史資料を中心とする調査，研究を進めている。

●主要業績

1．【著書】『日本の民俗宗教』288頁，筑摩書房，2019年11月
2．【著書】『物部の民俗といざなぎ流』250頁，吉川弘文館，2011年６月
3．【著書】『儀礼から芸能へ　狂騒・憑依・道化』237頁，角川学芸出版，2011年９月
4．【著書】『東アジア世界の民俗　変容する社会・生活・文化』（『アジア遊学』215,272頁，勉誠出版），2017年10月
5．【編著】『神楽の中世』392頁，三弥井書店，2021年６月

●2022年度の研究教育活動

一　研究業績

2　論文

「日本における放生思想，儀礼の受容と展開―対馬八幡宮の放生儀礼と神楽を中心に―」（『年刊　藝能』29号，pp 109-126,2023年３月）（査読有）『年刊　藝能』: ISSN ナシ

「中近世，対馬と朝鮮との交流と航海安全祈願」（儀礼文化学会編『儀礼文化学会紀要』11号（通巻51号），pp 57-76,2023年３月）（査読有）儀礼文化学会紀要: ISSN：21882339

「日本の二十四節気―自然の中の暮らしの中で育まれた生活文化―」（儀礼文化学会編『儀礼文化学会紀要』11号（通巻●号），pp 19-30,2023年３月）（査読有）　儀礼文化学会紀要: ISSN　　21882339

「中世，対馬の八幡信仰，放生会と神楽―国難克服祈願としての祭儀と芸能―」（斎藤英喜編『歴史と地域のなかの神楽』，pp 43-69，法蔵館，2023年４月30日）（査読有）　ISBN 978-４-8318-6278-５

「佛教东渡日本及其与护国的结合―王权和仪礼（日本への仏教伝来と護国の仏教―王権と儀礼―）」（四川大学編・発行『中国俗文化研究』21輯，pp 120-132,2022年11月）（査読有）　ISBN: 978-７-5690-８

単著「中世後期，カトリック布教における治病―長崎における宣教師の祭儀，呪法，療養院経営を中心に―」（上智大学『カトリック研究』91号，pp.111-163,2022年８月１日）（査読有）

4　展示図録・資料図録・映像・ＤＢ・デジタル・コンテンツ開発

「来訪神，姿とかたち」―福の神も疫神も異界から―」（『国立歴史民俗博物館特集展示　解説シート』，pp １-4,2023年１月１

5　学会・外部研究会発表

松尾代表科研「日本仏教と東南アジア仏教との比較研究―政治と権力の視点を中心として」2022年度共同研究会①，４月９日（土），京都大学（百万遍），「国難克服の祈禱としての神楽―古代･中世の八幡信仰と放生儀礼―」

松尾代表科研「日本仏教と東南アジア仏教との比較研究―政治と権力の視点を中心として」2022年度共同研究会②，６月25日（土），日本女子大学（目白キャンパス），「山門・寺門の対立と赤山明神と新羅明神，寺院鎮守社となった異国神―遣唐僧と日本-新羅-唐の国際関係」

単独・招待「中世，対馬の神楽―朝鮮半島との交流・戦闘を視野に入れて―」，芸能史研究会・例会 on-line，2022年７月８日（金）

松尾代表科研「日本仏教と東南アジア仏教との比較研究―政治と権力の視点を中心として」2022年度共同研究会③，日本女子大学（目白キャンパス），「民俗から考える神仏混交」「在日華僑の公共墓地の“后土”“土神”―移民の土地神の信仰の視点から―」，2022年10月14日（金）

単独・招待「ノロとユタ―琉球地域の女性宗教者―」，柳田国男と女性民俗学―妹の力論の再検討シンポジウム（永池健二代表），鎌倉芸術館，2022年10月15日（土）

6　総研大リーフレット
7　その他（歴史系総合誌『歴博』，友の会ニュース，『本郷』など）
「第４展示室特集展示　来訪神，姿とかたち―福の神も疫神も異界から―」（『国立歴史民俗博物館友の会ニュース　歴博友の会』224，pp １-2,2022年12月５日）（査読無）

二　主な研究教育活動

1　主な共同研究等参加状況
①　歴博（基幹・基盤・開発型，国内交流事業）
歴博-千葉大学大学院連携教育事業代表
2　外部資金による研究（科学研究費などの外部資金，各種補助金による研究，企業・自体体による研究）
科研基盤Ｃ「日本仏教と東南アジア仏教との比較研究―政治と権力の視点を中心として」（研究代表者，2019～2023年度）
中国中山大学国家社会科学基金項目「海外藏珍稀中国民俗文物与文献整理研究暨数据库建设（在外中国民俗関係資料の整理・研究とデータベースの構築）」（研究代表者：中国中山大学　王霄冰教授）研究分担者，2016～2021年度
4　主な展示・資料活動
特集展示（第４・民俗展示室）１月17日（火）～ 2024年５月14日（日）「来訪神，姿とかたち―福の神も疫神も異界から―」　関連行事「歴博映画の会」2023年５月13日（土）　13:30～15:30　第40回「大和の古代寺院の年頭儀礼と鬼追い行事，その伝承」，松尾制作民俗研究映像『薬師寺花会式～行法と支える人々～』（2007年，松尾恒一，71分）上映と解説
5　教育
千葉大学大学院客員教授（人工物デザイン史論）
國學院大學非常勤講師（伝承文学演習）・國學院大學大学院非常勤講師（アジア比較文化論）
上智大学非常勤講師（多様性の日本民俗文化）
日本女子大非常勤講師「日本民俗文化論」
法政大学沖縄文化研究所研究員

三　社会活動等

1　館外における各種委員
儀礼文化学会理事，國學院大學國文學會役員，国立劇場民俗芸能・琉球舞踊公演専門委員（代表），中国国家社科基金重大項目“海外藏珍稀中国民俗文献 与文物资料整理，研究暨数据庫建設（海外所蔵の民俗関係文献と文物の調査・研究とデータベースの構築）”成果刊行書籍「海外藏中国民俗文化珍稀文献（海外所蔵中国民俗文化の貴重書籍）」（中国国家重点図書出版項目）編集委員，中国莆田学院媽祖文化研究院刊行『媽祖文化研究』編集委員。
2　講演・カルチャーセンターなど
3　マスコミ
5　国際連携（日本国内で行われたものも含む）
③　その他
単独・招待・講演「源于中国的传统艺道―以香道与自然保护活动为中心―（中国起源の日本の伝統芸道―香道と自然の保全活動を中心に―）」（湖南工业大学・国际学术研讨会「人类设计的过去・现在・未来（人類におけるデザインの過去・現在，未来）」，湖南工業大学，2022年12月22日）
単独・招待・講演「明清时期的海上势力与东南亚・东亚的华侨：以欧洲向亚洲发展为视角（明清代の海上勢力と東南アジア・東アジアの華僑―ヨーロッパのアジア進出を視野に入れて―）」（2022年度国际学术与谈会“东南亚区域国别与华人华侨（東南アジア各国の華人華僑）”，閩南師範大学歴史地理学院），2022年12月30日

四　活動報告

2　特別委員会委員など館長からの委嘱を受けたもの（第四期の会，30年史編集委員会など）
3　研究・調査プロジェクト報告
○実績報告

日本の対外交流と生活変化，及びその伝承：日古代～近世期の中国大陸，朝鮮半島との交流による，文化・生活への影響をテーマに，博多･対馬，奈良のフィールドワークと歴史資料の収集，分析を行った。その成果として，対馬と朝鮮半島との交流をテーマとする論文４本を執筆し，このうち３本は，今年度2022年度内に刊行された（「論文」参照：『年刊 藝能』，『儀礼文化学会紀要』，斎藤英喜編論集『地域と歴史のなかの神楽』法蔵館）。その他一本を，牧野敦･佐藤愛弓編，阿部泰郎監修『中世の宗教世界』（勉誠出版）に，次年度2023年度刊行予定（現在，初校済）である。

また，中国閩南師範大学の国際シンポジウム“東南アジア各国の華人華僑”（12月30日）において，講演「明清代の海上勢力と東南アジア・東アジアの華僑―ヨーロッパのアジア進出を視野に入れて―」を行った。

松田　睦彦　MATSUDA Mutsuhiko　准教授（2014.4～）

併任：総合研究大学院大学日本歴史研究専攻准教授（2021～）生年：1977

【学歴】早稲田大学第一文学部文学科日本文学専修（1999年卒業），成城大学大学院文学研究科日本常民文化専攻博士課程前期（2002年修了），成城大学大学院文学研究科日本常民文化専攻博士課程後期（2007年修了）
【職歴】成城大学民俗学研究所研究員（2007），成城大学非常勤講師（2008），荒川区教育委員会事務局社会教育課文学館調査担当学芸員（2008），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部助教（2009），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部准教授（2014），ソウル大学校社会科学研究院比較文化研究所客員研究員（2016～2017），韓国国立民俗博物館客員研究者（2017），神奈川大学日本常民文化研究所客員研究員（2019～），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻准教授併任（2021.4）
【学位】博士（文学）（成城大学）（2007年取得）【専門分野】民俗学【主な研究テーマ】生業の技術および生業をとりまく信仰・儀礼・社会組織等の生活文化に関する総合的研究【所属学会】日本民俗学会・日本民具学会・日本文化人類学会【研究目的・研究状況】さまざまな生業の技術や，信仰・儀礼をはじめとする生業にともなう生活文化について総合的視点から明らかにする。また，生業にともなう人の移動に注目し，定住を前提とする従来の民俗学的研究に対し，移動の日常性を前提とする研究を提唱している。現在は日本と韓国との海をめぐる生活文化の比較研究も行っている。

●主要業績

1．【単著】『人の移動の民俗学―タビ〈旅〉から見る生業と故郷』311頁，慶友社，2010年
2．【編著】『人の移動とその動態に関する民俗学的研究』（『国立歴史民俗博物館研究報告』第199集），261頁，2015年
3．【共編著】『柳田國男と考古学―なぜ柳田は考古資料を収集したのか』158頁，新泉社，2016年
4．【編著】『徳川林政史研究所所蔵「駿州・豆州・相州 御石場絵図」の研究』（2014～2016年度 科学研究費補助金若手研究（B）（課題番号2670299）「安山岩に関する歴史・民俗学的研究」成果報告書），175頁，2017年
5．【映像】民俗研究映像『石を切る―花崗岩採掘の伝統と革新』DVD，200分，国立歴史民俗博物館，2012年度

●2022年度の研究教育活動

一 研究業績

1　著書
『어구도집（漁具図集）』（共訳）韓国国立海洋博物館，2022年12月９日
『考古学が中世史を変える』（共編著）総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻，2023年３月25日

2　論文
「外交文書に見る朝鮮海通漁の成立―貿易規則から通漁規則へ」『国立歴史民俗博物館研究報告』239，pp.175-191,2023年３月31日（査読有）
「해외사례（海外事例）」『해조류 채취와 전통어촌공동체（海藻類採取と伝統共同体）』韓国文化財庁　国立無形遺産院，pp.231-239,2022年11月25日

5　学会・外部研究会発表
「コメント」『2022韓日海女フォーラム』東義大学校産学協力館PRIMEコンベンションホール（韓国），2022年８月26日

7　その他

「白山麓の出作り生活となりわい」『學士會会報』956，一般社団法人学士会，pp.85-90,2022年９月１日
「道具の変化から学びたいこと」『小学図書館ニュース（付録）』1266，少年写真新聞社，2022年６月28日

二　主な研究教育活動

１　主な共同研究等参加状況

①　歴博

基幹研究「先史から近代における日朝交流史像の再構築―航海･港市･交流に生きた人びとの視点から―」（研究代表者：松田睦彦），2022～2024年度

基盤研究「中世日本の地域社会における都市の存立と機能の研究」（研究代表者：田中大喜），2022～2024年度

共同利用型共同研究「イソガネの形状と機能に関する研究」（研究代表者：瀬川渉〔横須賀市自然･人文博物館〕）館内担当者，2022年度

②　他の機関

神奈川大学日本常民文化研究所基盤共同研究「海域・海村の景観史に関する総合的研究」（研究代表者：安室知〔神奈川大学〕）客員研究員，2019年度～

神奈川大学非文字資料研究センター共同研究（準備研究）「近現代日本の宿〈ヤド〉の体系化に関する研究」（研究代表者：山本志乃〔神奈川大学〕）客員研究員，2022年度～

２ 外部資金による研究

科学研究費基盤研究A「19世紀以降の東アジア世界における海藻の生産・流通・消費に関する総合研究」（研究代表者：塚本明〔三重大学〕），研究分担者，2022～2026年度

科学研究費基盤研究A「中世東アジア海域の地域社会と琉球帝国―集落・信仰・技術―」（研究代表者：村木二郎〔国立歴史民俗博物館〕），研究分担者，2022～2026年度

科学研究費基盤研究B「西遷･北遷東国武士の社会的権力化」（研究代表者：田中大喜〔国立歴史民俗博物館〕），研究分担者，2019～2022年度

科学研究費基盤研究B「モノ・人・権力の現代民俗学：日中韓の比較に基づく批判的〈民具〉研究の構築」（研究代表者：門田岳久［立教大学］），研究分担者，2021～2024年度

５　教育

総合研究大学院大学，集中講義B「地域研究の方法」

成城大学大学院文学研究科,「日本常民文化研究ＩＡ」「日本常民文化研究ＩＢ」「日本常民文化特殊研究ＩＡ」「日本常民文化特殊研究ＩＢ」「日本常民文化特殊研究指導ＩＡ」「日本常民文化特殊研究指導ＩＢ」「ゼミナール（３）〈地域自治論（生業論・環境論）〉」「ゼミナール（４）〈地域自治論（生業論・環境論）〉」

三　社会活動等

１　館外における各種委員

【学会】一般社団法人日本民俗学会 理事

【文化財】千葉県文化財保護審議委員，熱海市教育委員会史跡江戸城石垣石丁場跡調査・整備委員会 委員

【市史】木更津市史編集部会 委員，府中市史編さん専門部会 委員

２　講演・カルチャーセンターなど

モデレーター，シンポジウム『「大日本物産図会」にみる日本の食べものづくり』，公益財団法人味の素食の文化センター，大学共同利用機関法人人間文化研究機構共催，味の素グループ高輪研修センター，2022年11月11日

四　活動報告

３　研究・調査プロジェクト報告

日本と韓国における漁業や漁民の往来についての現地調査を実施した。

三上　喜孝　MIKAMI Yoshitaka　教授（2017.11～）

併任：総合研究大学院大学日本歴史研究専攻教授（2021～）生年：1969

【学歴】東京大学文学部国史学専修課程卒業（1992年），東京大学大学院人文科学研究科日本史学修士課程修了（1994），東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻課程（1998年単位取得退学）【職歴】山形県立米沢女子短期大学講師（2000.4～），山形大学人文学部助教授（2002.9～），同准教授（2007.4～），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部准教授（2014），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部教授（2017.11），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻教授併任（2021.11），研究推進センター長併任（2020～2021）【学位】博士（文学）（東京大学文学部2001）【専門分野】日本古代史【主な研究テーマ】東アジア文字文化交流史，古代地域社会史，貨幣史【所属学会】木簡学会，史学会，日本史研究会，正倉院文書研究会，東北史学会，韓国木簡学会ほか

●主要業績

1．【単著】『日本古代の貨幣と社会』261頁，吉川弘文館，2005年７月
2．【単著】『日本古代の文字と地方社会』335頁，吉川弘文館，2013年８月
3．【単著】『落書きに歴史をよむ』232頁，吉川弘文館，2014年４月
4．【論文】「古代の辺要国と四天王法」（『山形大学歴史・地理・人類学論集』５，pp.115-126,2004年３月）
5．【論文】「韓国出土木簡と日本古代木簡―比較研究の可能性をめぐって―」（『韓国古代木簡の世界』pp.286-307，雄山閣，2007年３月）

●2022年度の研究教育活動

一 研究業績

２　論文

「古代の文字文化とジェンダーに関する覚書　―東アジアと地域社会の視点から―」『国立歴史民俗博物館研究報告』235,2022年９月，117～124頁，査読有

「墨書土器とは何か」吉村武彦･加藤友康･川尻秋生･中村友一編『墨書土器と文字瓦　―出土文字史料の研究―』八木書店，2023年１月，35～50頁，査読無

「日本古代木簡の型式分類と機能的分類」『木簡と文字』29，韓国木簡学会，2022年12月，61～75頁，査読有，韓国語

〔学会発表〕

「日本古代木簡の型式分類と機能的分類」韓国木簡学会第16回国際学術大会「韓・中・日古代木簡の名称に対する総合的検討」，2022年９月23日，於韓国・中央大学（オンライン報告）

「出土文字資料の集成的研究」岩手大学平泉文化研究センター主催第３回平泉学研究会，2023年２月４日（土），於岩手大学北桐ホール

５　学会・外部研究会発表

「出土文字資料の集成的研究」岩手大学平泉文化研究センター主催第３回平泉学研究会，2023年２月４日（土），於岩手大学北桐ホール

７　その他

企画展示図録『いにしえが，好きっ！　―近世好古図録の文化誌―』2023年３月，国立歴史民俗博物館

二　主な研究教育活動

１　主な共同研究等参加状況

①　歴博

「近代東アジアにおけるエゴ・ドキュメントの学際的・国際的研究」（研究代表者：田中祐介）2022～2024年度，ほか

③　機構

「歴史文化資料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業」（研究代表者：三上喜孝）2022～　2027年度，ほか

２　外部資金による研究

科学研究費基盤研究（B）「古代日本と朝鮮の金石文にみる東アジア文字文化の地域的展開」研究代表者，2019

～2022年度
科学研究費基盤研究（C）「日中韓の王宮と官衙の比較宗教史研究」（研究代表者：堀裕）研究分担者，2022～2025年度
科学研究費基盤研究（B）「文書群復元と歴史的景観復元の融合による栄山寺および栄山寺領の総合的研究」（研究代表者：下村周太郎）研究分担者，2020～2023年度
科学研究費基盤研究（B）「格・式研究を踏まえた日本古代社会史像の再構築」（研究代表者：小倉慈司）研究分担者，2020～2022年度
科学研究費基盤研究（C）「『日本書紀』の注釈的研究（研究代表者：金沢英之）研究分担者，2020～2022年度
科学研究費基盤研究（B）「汐留遺跡出土木簡群の再検討を基盤とした近世・近代木簡研究の飛躍的展開」2022～2026年度
岩手県受託研究「出土文字資料の集成的研究」（研究代表者：三上喜孝）2020～2024年度

3　国際交流事業
「東アジア記録文化の源流と知的ネットワーク研究 」2020～2022年度（韓国・国立慶北大学校人文学術院との交流協定にもとづく国際交流事業）

三　社会活動等

1　館外における各種委員
福島県立博物館収集展示委員会委員（福島県）
国史跡上人壇廃寺跡整備委員会委員（福島県須賀川市）泉官衙遺跡保存整備指導委員会委員（福島県南相馬市）
秋田城跡環境整備指導委員会委員（秋田県秋田市）
郡山遺跡･陸奥国分寺跡等調査指導委員会委員（宮城県仙台市）府中市史編さん専門部会委員（東京都府中市）

4　社会連携
②　共同研究
岩手県受託研究「出土文字資料の集成的研究」（研究代表者：三上喜孝）2020～2024年度

四　活動報告

3　研究・調査プロジェクト報告
企画展示に実現に向けて，資料借用先での事前調査等を行った。研究成果については令和４年度末の企画展示で公開した。

村木　二郎　MURAKI Jiro　准教授（2008.10～）

併任：総合研究大学院大学日本歴史研究専攻准教授（2008～），生年：1971

【学歴】京都大学文学部史学科（考古学専攻）（1995年卒業），京都大学大学院文学研究科歴史文化学専攻考古学専修修士課程（1997年修了），京都大学大学院文学研究科歴史文化学専攻考古学専修博士後期課程（1999年中退）
【職歴】国立歴史民俗博物館考古研究部助手（1999），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部助手（2004），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部助教（2007），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻助教併任（2008），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部准教授（2008），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻准教授併任（2008）
【学位】文学修士（京都大学）（1997年取得）【専門分野】日本考古学【主な研究テーマ】日本中世の考古学的研究【所属学会】史学研究会，日本考古学協会【研究目的・研究状況】信仰，都市，生産技術など，考古学の立場から中世史を総合的に研究する。

●主要業績

1．【新・特集展示】『海の帝国琉球―八重山・宮古・奄美からみた中世―』令和２年度歴博新特集展示，展示代表，2021年
2．【企画展示】『時代を作った技―中世の生産革命―』平成25年度歴博企画展示，展示代表，2013年
3．【研究報告特集号】編著「特集号 中世東アジア海域世界における琉球の動態に関する総合的研究」『国立歴史民俗博物館研究報告』第226集，305頁，2021年３月

4．【研究報告特集号】編著「特集号 中世の技術と職人に関する総合的研究」『国立歴史民俗博物館研究報告』第210集，272頁，2018年３月
5．【編著】『中世のモノづくり』164頁，朝倉書店，2019年３月

●2022年度の研究教育活動

一 研究業績

２　論文
「島々からみた琉球帝国とは」『歴史学研究』1023，pp.68-73,2022年６月15日，査読なし
「万国津梁の琉球王国」『つなぐ世界史』１，pp.236-241，清水書店，2023年３月31日

４　展示図録・資料図録・映像・ＤＢ・デジタル・コンテンツ開発
共編著：企画展示図録『いにしえが，好きっ！―近世好古図録の文化誌―』254頁，国立歴史民俗博物館，2023年３月７日

６　総研大リーフレット
「南の島の中世集落」『歴史研究の最前線』24，pp.33-51,2023年３月25日

７　その他
「回顧と展望 日本（考古）五 歴史時代」『史学雑誌』131-５，pp.34-39,2022年５月20日
「東北院職人歌合」『REKIHAKU』６，pp.34-39,2022年６月26日
「琉球帝国と宮古島の中世」『シンポジウム「宮古島と琉球帝国」資料集』pp.1-8,2022年11月12日

二　主な研究教育活動

１　主な共同研究等参加状況
①　歴博
基盤研究「中世日本の地域社会における都市の存立と機能の研究」（研究代表者：田中大喜），2022～2024年度
産学連携「展示を使った教材開発研究」（研究代表者：村木二郎）研究代表者，2021～2023年度

２　外部資金による研究
科学研究費基盤研究Ａ「琉球帝国からみた東アジア海域世界の流動的様態と国家」（研究代表者：村木二郎）研究代表者，2018～2021年度（繰越）
科学研究費基盤研究Ａ「中世東アジア海域の地域社会と琉球帝国―集落･信仰･技術―」（研究代表者:村木二郎）研究代表者，2022～2026年度
科学研究費基盤研究Ｂ「西遷・北遷東国武士の社会的権力化」（研究代表者：田中大喜）研究分担者，2019～2022年度

４　主な展示・資料活動
総合展示第１室「古代国家と列島世界」,第２室「王朝文化」「東国と西国」「大名と一揆」「民衆の生活と文化」「大航海時代のなかの日本」展示プロジェクト委員
2021年度企画展示「中世武士団―地域に生きた武家の領主―」展示プロジェクト委員
2022年度企画展示「いにしえが，好きっ！―近世好古図録の文化誌―」展示プロジェクト委員
総合展示第２室リニューアル委員会（代表）

５　教育
千葉大学特別研究D（留学生プロジェクト）

三　社会活動等

１　館外における各種委員中世学研究会世話人
日本学術振興会特別研究員等審査会専門委員
文化庁中世城館・近世城郭遺跡等の保存に関する検討会委員
熱海市史跡江戸城石垣石丁場跡調査・整備委員会委員（委員長）
伊東市江戸城石垣石丁場跡保存活用委員会委員
岐阜県古代・中世寺院跡総合調査検討委員会委員
印旛郡市文化財センター理事
静岡県文化財保護審議会委員

２　講演・カルチャーセンターなど
「南の島の中世集落」第24回総研大講演会歴史研究の最前線「考古学が中世史を変える」，国立歴史民俗博物館講堂，2022年６月11日
４　社会連携
③　講演会・シンポジウム
「宮古島と琉球帝国」宮古島市教育委員会，JA宮古大ホール，2022年11月12日

四　活動報告
３　研究・調査プロジェクト報告
東北の巨大なマウンドを有する経塚の発掘調査に参加した。これは平泉を中心に12世紀につくられた当該地域に特有の経塚であり，経塚の地域性を指摘するうえで極めて重要な存在である。これまでも同類型の盗掘された経塚調査に参加してきたが，今年度は平泉に所在する核心となる遺跡の調査であった。調査期間の制約から未解明の部分を残したが，引き続き調査を継続することで問題解決したい。

山田　慎也　YAMADA Shinya　教授（2019.7～），副館長（2022.4～）

併任：総合研究大学院大学日本歴史研究専攻教授（2019.7～），生年：1968

【学歴】慶應義塾大学法学部法律学科（1992年卒業），慶應義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻修士課程（1994年修了），慶應義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻博士課程（1997年単位取得退学）
【職歴】国立民族学博物館講師（COE非常勤研究員）（1997），東京外国語大学非常勤講師（1997），国立歴史民俗博物館民俗研究部助手（1998），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部助手（2004），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部助教（2007），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部准教授（2007），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻准教授併任（2008），　大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部教授（2019.7～），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻教授併任（2019.7～），広報連携センター長併任（2020.4～2022.3），　副館長（2022.4～）
【学位】社会学博士（慶應義塾大学）（2000年取得）【専門分野】民俗学･文化人類学【主な研究テーマ】葬制と死生観･儀礼研究【所属学会】日本民俗学会，日本文化人類学会，日本宗教学会，宗教と社会学会，葬送文化学会【研究目的・研究状況】http://www.rekihaku.ac.jp/kenkyuu/kenkyuusya/yamada/index.html

●主要業績
１．【単著】『現代日本の死と葬儀―葬祭業の展開と死生観の変容』350頁，東京大学出版会，2007年９月
２．【編著】山田慎也・土居浩編『無縁社会の葬儀と墓―死者との過去・現在・未来』245頁，2022年７月
３．【論文】「告別式の平準化と作法書」『国立歴史民俗博物館研究報告』第205集, pp.137-166, 2017年３月（査読有）
４．【研究報告特集号：編著】『民俗儀礼の変容に関する資料論的研究』国立歴史民俗博物館研究報告第205集，490頁，2017年３月
５．【資料図録：編著】『ライデン民族学博物館・国立歴史民俗博物館所蔵死絵』，2016年３月

●2022年度の研究教育活動
一　研究業績
１　著書
『無縁社会の葬儀と墓 - 死者との過去・現在・未来』山田慎也・土居浩編，吉川弘文館，2022年８月（編著）
『現代日本の「看取り文化」を構想する』浮ケ谷幸代･田代志門･山田慎也編, 東京大学出版会, 2022年８月（編著）
２　論文
「作法書に見られる情報と社会層」冠婚葬祭総合研究所論文集（令和３年度），冠婚葬祭総合研究所，pp.23-28，2022年５月31日（査読なし）
「引き取り手のない故人の葬送と助葬制度」『無縁社会の葬儀と墓 - 死者との過去・現在・未来』山田慎也・土居浩編，吉川弘文館，pp.37-58，2022年８月10日
「近親者なき困窮高齢者の意思の実現：看取りから葬送への連続的なサポート」浮ケ谷幸代・田代志門・山田

慎也編，東京大学出版会，pp.315-337，2022年８月17日
「効率化により変わりゆく葬送儀礼」『中央公論』136（６），中央公論新社，pp38-45，2022年５月10日
「葬送儀礼の簡略化は何をもたらすのか:変動する社会状況と死の受容」『月刊保団連』全国保険医団体連合会，

5　学会外部研究会発表
「書評会『先祖祭祀と墓制の近代』について」大正大学宗教学会2022年度秋期大会，大正大学，2023年３月23日

7　その他
「歌舞伎役者の死絵にも見える位牌と戒名で分かること：葬送の習俗が揺らいでいる深層にあるもの32」『月刊住職』281，興山舎，pp.135-139，2022年４月１日
「日本人は家の中で死者をいかに弔うようになったのか：葬送の習俗が揺らいでいる深層にあるもの33」『月刊住職』282，興山舎，pp.129-133，2022年５月１日
「地域でも時代でも変化する位牌の形からわかること：葬送の習俗が揺らいでいる深層にあるもの34」『月刊住職』283，興山舎，pp.131-135，2022年６月１日
「四百年前から寺に祀られる位牌の形から分かること：葬送の習俗が揺らいでいる深層にあるもの35」『月刊住職』285，興山舎，pp.131-135，2022年８月１日
「戦後二度目となる国葬は一体誰のための葬儀なのか：葬送の習俗が揺らいでいる深層にあるもの36」『月刊住職』286，興山舎，pp.114-148，2022年９月１日
「吉田茂元首相の国葬のやり方で分かる自衛隊の役割：葬送の習俗が揺らいでいる深層にあるもの37」『月刊住職』287，興山舎，pp.128-132，2022年10月１日
「元首相六人の国葬や公葬の祭壇で分かる葬儀の本質：葬送の習俗が揺らいでいる深層にあるもの38」『月刊住職』288，興山舎，pp.106-110，2022年11月１日
「遺族親類が亡き人の火葬を実行していた事実に学ぶ：葬送の習俗が揺らいでいる深層にあるもの39」『月刊住職』290，興山舎，pp.115-119，2023年１月１日
「火葬中なのになぜ精進落としをするようになったのか：葬送の習俗が揺らいでいる深層にあるもの40」『月刊住職』291，興山舎，pp.125-129，2023年２月１日
「白木位牌と紙位牌とがある喪主による位牌分けの役割：葬送の習俗が揺らいでいる深層にあるもの31」『月刊住職』279，興山舎，pp.135-139，2022年３月１日
「国葬を考える」『朝日新聞』朝日新聞社，2022年９月17日付朝刊
「変わりゆく葬儀２供物をこしらえる」『REKIHAKU』６号，国立歴史民俗博物館，pp.102-104，2022年６月26日
「変わりゆく葬儀３故人を送り出す」『REKIHAKU』７号，国立歴史民俗博物館，pp.98-100，2022年10月26日
「変わりゆく葬儀４故人と別れる」『REKIHAKU』８号，国立歴史民俗博物館，pp.102-104，2023年２月26日
「火葬の臭煙と煙突のゆくえ」『REKIHAKU』７号，国立歴史民俗博物館，pp.98-100，2022年10月26日
「変わりゆく葬送儀礼」『学士会会報』955号，学士会，2022年７月１日

二　主な研究教育活動

1　主な共同研究等参加状況
①　歴博
基盤研究「家内における死者祭祀・祭具の現在とその歴史的検討：変容するモノ・家族・社会」（研究代表者：土居浩）2020～2022年，副代表

2　外部資金による研究
科学研究費基盤研究（B）「超高齢多死社会を見据えた葬墓制システムの再構築：多様な生前と死後をつなぐために」（研究代表者：山田慎也）2021年度～2024年度，研究代表者
科学研究費基盤研究（B）「病院は死者をいかに遇することができるか：医療現場での『無宗教』者への死者へのケア」（研究代表者：山本佳世子）2021年度～2023年度，研究分担者４主な展示・資料活動
特集展示第４室「亡き人と暮らす：位牌・仏壇・手元供養の歴史と民俗」展示代表者，会期：2022年３月15日～９月25日
総合展示第４室「『民俗』へのまなざし」展示プロジェクト委員総合展示第４室「おそれと祈り」展示プロジェクト委員

5　教育

三　社会活動等

1　館外における各種委員

日本葬送文化学会副会長

冠婚葬祭総合研究所客員研究員

全国冠婚葬祭互助協会葬儀品質認定制度審査会委員

2　講演・カルチャーセンターなど

「日本における葬制と死生観」「現代における葬制の変容」神社本庁指導神職研修，伊勢神宮，2022年４月14日

「亡き人と暮らす：位牌・仏壇・手元供養の歴史と民俗」歴博講演会，国立歴史民俗博物館，2022年５月14日

「近代化と葬送儀礼の変容」教派神道連合会第22回神道講座，國學院大學，2022年６月９日

「現代における供養と課題:展示の企画を通して」供養の日普及推進協会設立５周年記念「供養について考える」ミニシンポジウム，コモレ四谷タワーコンファレンス，2022年７月９日

「変容する葬儀:変わりゆく葬儀と今後の課題」曹洞宗兵庫県第一宗務所令和４年現職研修会，神戸三田ホテル，2022年９月８日

「変わりゆく葬儀とそのゆくえ」八千代松陰中学・高等学校土曜講座，八千代松陰中学・高等学校，2022年11月12日

「葬儀形態の変遷とコロナ禍を経ての葬儀の姿･役割」農協流通研究所全国ＪＡ葬祭経営研究会，萬福寺ホール，2022年11月21日

「国葬と社葬」歴博友の会民俗学講座，オンライン，2023年１月30日

「都市近郊における葬送墓制の変遷」難波田城博物館企画展示「なき人を送る：墓と弔いの歴史」講演会，難波田城博物館，2023年３月25日

3　マスコミ

4　社会連携

②　共同研究

「冠婚葬祭と情報化に関する研究」研究代表者山田慎也，冠婚葬祭総合研究所，2021～2023年

四　活動報告

3　研究・調査プロジェクト報告

単身化社会が進展し，葬送儀礼のあり方も小規模・簡略化している。なかでも近親者のいない単身老人に関しては，終末期の対応や決定だけでなく，死後の葬送儀礼の契約なども行われるようになり，NPO法人や放送関係者だけでなく，寺院などの宗教法人も対応するようになっている。

吉村 郊子　YOSHIMURA Satoko 助教（2007～）

【学歴】奈良女子大学理学部生物学科（1992年卒業），京都大学大学院人間・環境学研究科修士課程人間・環境学専攻（1994年修了），ナミビア大学学際研究センター社会科学部門（共同研究生:1995～1998年），京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程人間・環境学専攻（2000年研究指導認定退学）【職歴】国立歴史民俗博物館歴史研究部助手（2000），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部助手（2004），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部助教（2007）【学位】人間･環境学修士（京都大学）（1994年取得）【専門分野】生態人類学，文化人類学【主な研究テーマ】日本の山間地域における人・生業・自然に関する人類学的研究，アフリカ南部の牧畜民に関する人類学的研究，自然と信仰・音に関する研究【所属学会】日本文化人類学会，日本アフリカ学会，生態人類学会，日本葬送文化学会

●主要業績

1．【論文】「身近な人の死と想いを，わたしたちはどう受容し，生きていくのか」『葬送文化』第24号（2023年，査読無）pp.110-123

2．【論文】「遺された／生きる者にとっての墓―牧畜民ヒンバの事例から」『国立歴史民俗博物館研究報告』第181集（2014年，査読有）pp.81-109

3．【論文】「ナミビアの牧畜民ヒンバと土地のかかわり―その歴史と現在」『国立歴史民俗博物館研究報告』第145

集（2008年，査読有）pp.145-229
4．【分担執筆】「第７章　土地と人をつなぐもの―ナミビアの牧畜民ヒンバにとっての墓」田中二郎他編『遊動民（ノマッド）―アフリカの原野に生きる』（明石書店，2004年）pp.439-464
5．【分担執筆】「第４章 炭焼きとして現代を生きぬく」篠原 徹編『現代民俗誌の地平１．越境』(2003年, 朝倉書店) pp.70-96

●2022年度の研究教育活動

一 研究業績

2　論文
「身近な人の死と想いを，わたしたちはどう受容し，生きていくのか」『葬送文化』第24号（2023年, 査読無）pp.110-123

5　学会・外部研究会発表
「研究報告：身近な人の死と想いを，わたしたちはどう受容し，生きていくのか」日本葬送文化学会３月定例会（2023年３月23日：Zoomによるオンライン開催）

7　その他
「箱田先生と「冬の華サザンカ」」『椿（創立70周年記念号)』61号（2022年）pp.109-116

二　主な研究教育活動

5　教育
早稲田大学非常勤講師（教育学部「文化人類学研究Ⅰ」「文化人類学研究Ⅱ」）
法政大学兼任講師（文学部「世界地誌５」）
立教大学兼任講師（文学部「超域文化学講義17」）

四　活動報告

3　研究・調査プロジェクト報告
前年度にひき続き，これまでの調査で得た資料の整理を進めつつ，関連する文献資料との比較･検討を行った。その中から，周縁地域社会における終末期の過ごし方や死の捉え方にかかわる事例や資料データ等を抜粋し，死者と生者の関係性や共同性について考察を行い，学会誌に投稿して発表した。次年度は，左記のテーマを含めて，さらに調査・研究を続けたく考えている。